

序

高崎市では平成20年度から29年度の「高崎市第5次総合計画」で教育・文化部門において「豊かな心と感性が育つまち」を目指す具体的な施策の一つとして「生涯学習の充実」と「社会教育の充実」を掲げています。そのため、地域の皆様が集い・楽しみ・学ぶ場としての公民館の役割がより一層重要となってくるのです。

その一環として今回は、下里見公民館の新設と金古南足門公民館の増築、そして東部公民館の改築事業を行うことになりました。

この公民館建設予定地には縄文時代や古墳時代を始めとする各時代の遺跡の存在が知られており、建設に伴う発掘調査では数多くの成果を上げることができました。

新しくなった公民館を、より多くの市民の方々に利用していただくと共に、この報告書を教育資料として広く活用していただいて、高崎市の歴史を築き上げてきた祖先の暮らしの様子に想いを馳せていただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査や本書作成に際し、ご指導・ご協力いただきました関係諸機関の方々に厚く感謝を申し上げ、序といたします。

平成26年3月

高崎市教育委員会
教育長 飯野 真幸

例言

- 1 本書は公民館建設等に伴い発掘調査された下里見宮谷戸遺跡（2次調査）・足門東屋敷間遺跡・五霊神社古墳の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地
下里見宮谷戸遺跡 群馬県高崎市下里見町 424
足門東屋敷間遺跡 群馬県高崎市足門町 931
五霊神社古墳 群馬県高崎市貝沢町 333
- 3 事業主体者 高崎市（高崎市教育委員会事務局 教育部社会教育課）
- 4 発掘調査体制
教育長 飯野真幸
教育部長 上原正男
文化財保護課長 松本伸
文化財保護課課長補佐 田ロー一郎
庶務担当 神澤久幸 山田いづみ
調査担当 下里見宮谷戸遺跡 黒田晃 原田直人 神澤久幸 飯塚光生
足門東屋敷間遺跡 田辺芳昭
五霊神社古墳 山本ジェームズ 岡崎裕子
- 5 本書の編集は黒田晃が行い、各遺跡の内容に関しては調査担当が執筆した。
- 6 遺構測量は直営のほか、側面研に委託して行った。遺構の写真撮影は各担当者が行った。
- 7 出土遺物の写真撮影は直営で行ったものと榑毛野考古学研究所に委託したものがある。
- 8 担当者が遺跡で測量した遺構図のデジタルトレースは直営で実施した。遺物の実測・トレースは直営で行ったものと側面研・シン技術コンサル4社・榑毛野考古学研究所に委託したものがある。
- 9 調査で得られた各種原因や写真・出土品は高崎市教育委員会が管理保管している。
- 10 公民館内に1号が及び金床の復元模型を設置するため、側面研トリアド工房に委託して遺構の型取り作業を行った。

凡例

- 1 挿図中の方位は座標北を示し、座標は世界測地系を用いている。
- 2 遺構図については、各挿図中にスケールを添付したが、原則下記の縮尺で掲載した。
住居跡 1/60 カマド断面図 1/40 古墳 1/150 畠跡 1/150 溝・土坑 1/150
- 3 遺物図については、挿図中にスケールを添付したが、原則下記の縮尺で掲載した。
土器 1/4 埴輪 1/3 石器 1/3 2/3
- 4 火山噴出物にかかわる表記・略号は以下の通りである。
As-A(浅間A軽石：1783年(天明三年))
As-B(浅間B軽石：1108年(嘉承三年・天仁元年))
As-C(浅間C軽石：3世紀末～4世紀初頭)

目次

序

例言

凡例

目次

挿図目次

下里見宮谷戸遺跡2

第1章 調査の方法と経緯

第1節 調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・1

第2節 調査の方法・・・・・・・・・・・・・1

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境・・・・・・・・・・・・・2

第2節 歴史的環境・・・・・・・・・・・・・2

第3章 検出された遺構

第1節 概要・・・・・・・・・・・・・4

第2節 各時代の遺構・遺物

1. 縄文時代の遺構・・・・・・・・・・・・・4

2. 弥生時代の遺構・・・・・・・・・・・・・4

3. 古墳時代・平安時代の遺構・・・・・・・・・・・・・6

4. 浅間B層石(Aa-B)下の遺構・・・・・・・・・・・・・58

5. まとめ・・・・・・・・・・・・・62

五霊神社古墳

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・67

第2節 調査の方法・・・・・・・・・・・・・67

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境・・・・・・・・・・・・・67

第2節 歴史的環境・・・・・・・・・・・・・68

第3節 五霊神社古墳について・・・・・・・・・・・・・69

第4節 基本層序・・・・・・・・・・・・・69

足門東屋敷間遺跡

第1章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境・・・・・・・・・・・・・63

第2節 歴史的環境・・・・・・・・・・・・・63

第2章 検出された遺構

第1節 調査の概要・・・・・・・・・・・・・65

第2節 確認された遺構・・・・・・・・・・・・・65

第3節 まとめ・・・・・・・・・・・・・65

第3章 検出された遺構

第1節 概要・・・・・・・・・・・・・70

第2節 検出された遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・70

1. 周堀(SZ01)・・・・・・・・・・・・・70

2. 溝状遺構・・・・・・・・・・・・・80

3. 井戸・・・・・・・・・・・・・84

4. 土坑・・・・・・・・・・・・・85

5. ビット・・・・・・・・・・・・・88

6. 遺構外遺物・・・・・・・・・・・・・90

7. 掘削痕・・・・・・・・・・・・・91

第4章 まとめ・・・・・・・・・・・・・93

挿図目次

下	第 1 図	下里見宮谷戸遺跡周辺遺跡位置図	2
里	第 2 図	下里見宮谷戸遺跡で検出された竪穴住居及び石組み炉全体図	3
見	第 3 図	25 号住居平面図及び断面図・出土遺物	5
宮	第 4 図	24 号住居平面図・断面図・出土遺物	6
谷	第 5 図	1 号住居平面図・断面図	7
戸	第 6 図	1 号住居出土遺物	8
遺	第 7 図	2 号住居平面図・断面図・カマド平面図・断面図	9
跡	第 8 図	2 号住居出土遺物①	10
	第 9 図	2 号住居出土遺物②	11
	第 10 図	3 号住居平面図・断面図	12
	第 11 図	3 号住居出土遺物	13
	第 12 図	4 号住居平面図・断面図	14
	第 13 図	4 号住居カマド・床下土坑平面図・断面図	15
	第 14 図	4 号住居出土遺物	16
	第 15 図	5 号住居平面図・断面図 カマド平面図・断面図 床下土坑断面図	17
	第 16 図	5 号住居出土遺物	18
	第 17 図	6 号住居 1 号炉平面図・断面図 床下土坑 1・2 断面図	19
	第 18 図	6 号住居カマド平面図・断面図 貯蔵穴平面図・断面図	20
	第 19 図	6 号住居出土遺物①	21
	第 20 図	6 号住居出土遺物②	22
	第 21 図	金床出土状況平面図・断面図 1 号炉平面図・断面図 出土遺物	23
	第 22 図	7 号住居平面図・断面図 カマド平面図・断面図	25
	第 23 図	7 号住居出土遺物	26
	第 24 図	8 号住居平面図・断面図	27
	第 25 図	9 号住居及びカマド平面図・断面図	28
	第 26 図	9 号住居出土遺物	29
	第 27 図	10 号住居平面図・断面図	30
	第 28 図	11 号住居平面図・断面図 カマド平面図・断面図	31
	第 29 図	11 号住居出土遺物	32
	第 30 図	12 号住居・15 号住居平面図・断面図	33
	第 31 図	12 号住居出土遺物	34
	第 32 図	15 号住居出土遺物	35
	第 33 図	13 号住居平面図・断面図 出土遺物	36
	第 34 図	14 号住居平面図・断面図	37
	第 35 図	14 号住居カマド平面図・断面図 貯蔵穴平面図・断面図	38
	第 36 図	14 号住居出土遺物①	39
	第 37 図	14 号住居出土遺物②	40
	第 38 図	16 号住居平面図・断面図	41
	第 39 図	16 号住居カマド平面図・断面図	42
	第 40 図	16 号住居出土遺物	43
	第 41 図	17 号住居平面図・断面図 出土遺物実測図	41

	第 42 図	18 号住居平面図・断面図	45
	第 43 図	18 号住居出土遺物	46
	第 44 図	19 号住居平面図・断面図 カマド平面図・断面図	47
	第 45 図	19 号住居出土遺物	48
	第 46 図	20 号住居平面図・断面図	49
	第 47 図	20 号住居カマド・貯蔵穴平面図・断面図	50
	第 48 図	20 号住居出土遺物	51
	第 49 図	21 号住居平面図・断面図	52
	第 50 図	21 号住居カマド平面図・断面図	53
	第 51 図	21 号住居出土遺物	54
	第 52 図	22 号住居平面図・断面図 出土遺物	55
	第 53 図	23 号住居平面図・断面図 貯蔵穴平面図・断面図	56
	第 54 図	23 号住居出土遺物	57
	第 55 図	平成 22 年度及び 23 年度 As-B 下畠検出状況	58
	第 56 図	As-B 下畠及び配石状遺構位置図	59
	第 57 図	As-B 下畠跡エレベーション図・セクション図	60
	第 58 図	配石状遺構平面図・断面図	61
足	第 1 図	周辺の遺跡図 第 2 図 調査箇所位置図	64
門	第 3 図	耕作痕 平面図・断面図	66
五	第 1 図	五雲神社古墳周辺遺跡位置図	68
雲	第 2 図	基本層序	69
神	第 3 図	遺構全体図	71
社	第 4 図	周堀断面図	72
古	第 5 図	周堀出土遺物①	73
墳	第 6 図	周堀出土遺物②	74
	第 7 図	周堀出土遺物③	75
	第 8 図	周堀出土遺物④	76
	第 9 図	周堀出土遺物⑤	77
	第 10 図	周堀出土遺物⑥	78
	第 11 図	周堀出土遺物⑦	79
	第 12 図	周堀出土遺物⑧	80
	第 13 図	溝 断面図	82
	第 14 図	溝 出土遺物 ①	83
	第 15 図	溝出土遺物② 第 16 図 井戸 平面図・断面図	84
	第 17 図	7 号土坑 平面図・断面図 第 18 図 7 号土坑出土遺物	86
	第 19 図	8～11 号土坑 平面図・断面図 11 号土坑出土遺物	87
	第 20 図	1・2・5・9～11 号ピット 平面図・断面図 1 号ピット出土遺物	89
	第 21 図	6～8 号ピット平面図・断面図 第 22 図 遺構外出土遺物①	90
	第 23 図	遺構外出土遺物②	91
	第 24 図	掘削痕平面図	92
	第 25 図	五雲神社古墳周堀想定図	94

下里見宮谷戸遺跡2

第1章 調査の方法と経緯

第1節 調査に至る経緯

高崎市では小学校区など一定の地域を対象に、市民と行政が協力して地域の多様な公益課題に取り組んでいくための拠点として公民館の役割を強く認識しており、その目的達成のため「1小学校区1公民館」の方針に基づいて各地域における公民館の設置と拡充に努めてきた。

そのような中で今回は、下里見小学校区で下里見公民館を新設することとなり、また金古南小学校区にある金古南足門公民館では不足していた図書室及び実習室を増設することが決定し、更には東部小学校区の東部公民館では耐震診断の結果、耐震補強の必要が生じたため、隣接する駐車場用地に改築することになった。

これらの用地は埋蔵文化財包蔵地に当たっているため、建設予定地下に遺跡の存在が想定されていたが、建設予定地の変更が不可能であるため、発掘調査を行い遺跡の記録保存を行うこととなった。

第2節 調査の方法

今回の調査は、公民館建設予定地であるため集落の中に立地しており、調査地に隣接して広大な廃土置き場を確保することが困難であった。また、表土掘削の際に活用する重機の作業や調査中に生じた深い穴や溝など一般の方や近隣の児童が調査区内に入ると危険な場合が多いので、まずは十分な安全対策をとる必要があった。

下里見宮谷戸遺跡第2次調査では、公民館に隣接する駐車場予定地に廃土を置くことが可能であったため、一回の掘削で全ての表土を剥くことができた。

重機を用いて表土を約50～60cm掘削したところ、1108年(天仁元年)に浅間山が噴出した際降下した火山灰(以下As-Bと表記)が厚いところで40cm前後堆積していたため、この層で重機による掘削を止め、人力によりAs-B下の遺構確認を行った。

また下里見宮谷戸遺跡第1次調査の結果から、As-B下の遺構面よりも更に下層から平安時代及び古墳時代の竪穴住居跡や弥生時代・縄文時代の遺構が検出されており、2次調査でもこれらの遺構が存在する可能性が考えられたため、As-B下の遺構を検出後に重機を用いて下層の面まで掘削して調査を行った。

調査の結果、As-Bの下の面からは平安時代に耕作されていた畝の耕作痕がほぼ遺跡全域から確認され、1次調査で検出されている同時期の畝が2次調査の区域にも広がっていることがわかった。更にその下の層からは平安時代・古墳時代中期の竪穴住居跡が24軒、平安時代のもと考えられる配石状遺構が1基、古墳時代中期の鍛冶跡が1基、住居と推定される縄文土器の集中地点が1基検出された。

これらの遺構の断面図・平面図は市職員・作業員が測量した他、一部併測研に委託して測量を行い、担当者が遺跡全体及び個別遺構の写真撮影を行って記録保存を完了させた。

調査終了後は再び重機を用いて廃土を移動し埋め戻しを行った。現在出土した遺物、作成した図面・写真等は高崎市教育委員会が保管・管理している。

第2章 地理的・歴史的環境

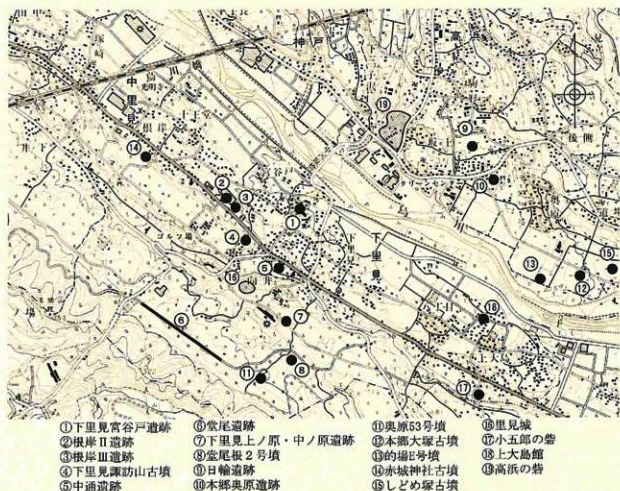
第1節 地理的環境

遺跡は高崎市下里見町(旧群馬郡榛名町大字下里見)に位置し、高崎市倉沢町の鼻曲山に源を發し、南東方向に流れる烏川の右岸の下位段丘上に立地している。遺跡の北東は低地の谷底平野へと傾斜しており、遺跡が段丘の北端部に立地していたことが分かる。

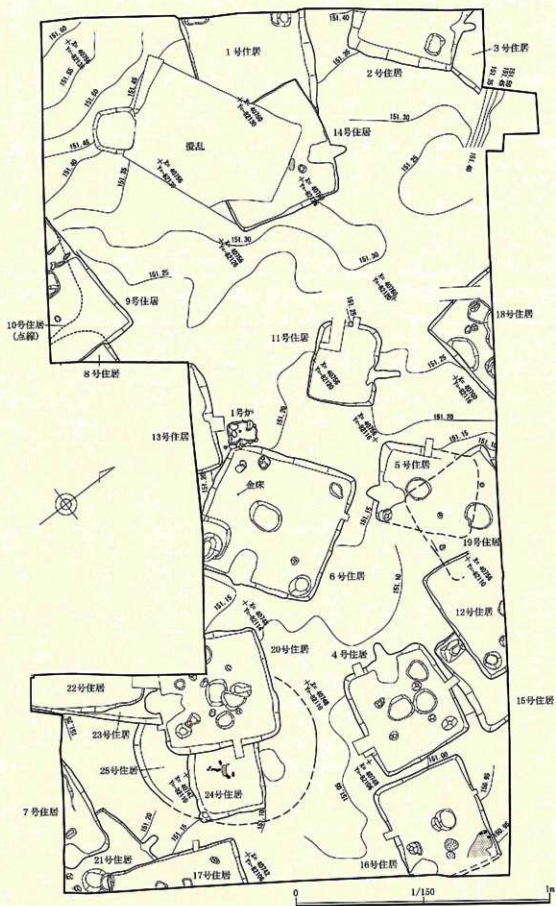
第2節 歴史的環境

下里見宮谷戸遺跡①と同じ下位段丘上には根岸Ⅱ②・Ⅲ③遺跡が存在し、As-Bの下から水田が検出されている。遺跡の南に広がる秋間丘陵上には6世紀前半代に築造され、無袖型横穴式石室を主体部として円筒埴輪・形象埴輪の他、土師器・須恵器片を出土した下里見諏訪山古墳④や縄文時代前期の竪穴住居跡が検出された中通遺跡⑤、縄文時代前期の土器片と10世紀代の土師器・須恵器片を出土した堂尾遺跡⑥などが存在する。また上位段丘上には7世紀に築造され無袖型横穴式石室を主体部とする堂尾根2号墳⑧が存在し、更に南の里見台地上には弥生時代中期の竪穴住居跡が検出された下里見上ノ原・中ノ原遺跡⑦が存在する。

このように遺跡周辺には縄文時代前期を初めとして弥生時代中期・古墳時代・奈良・平安時代の複合的な遺跡が存在している。更に里見台地上には平安時代末期、上野国碓氷郡里見郷を領した新田義重の三男里見義俊の居館であったとされる里見城⑩が存在しており、この地が数千年に及ぶ長い期間人々の居留地として活用されていたことが伺える。



第1図 下里見宮谷戸遺跡周辺遺跡位置図(国土地理院発行 2万5千分の1地形図「下室田」より作成)



第2図 下里見宮谷戸遺跡で検出された竪穴住居及び石組み炉全体図(S=1/150)

第3章 検出された遺構

第1節 概要

下里見宮谷戸遺跡2次調査では縄文時代中期の竪穴式住居跡（以下住居と呼称）が1軒と古墳時代前期の住居が1軒、古墳時代中期の住居が22軒、平安時代の住居が1軒の計25軒検出された。また住居以外の遺構としては、配石状遺構が1基・鍛冶炉と考えられる石組み炉が1基・土坑が38基・Aa-B下から検出された畚跡及び土坑・溝等が検出されている。出土した遺物の中で、6号住居居土から直立状態で検出された鉄製の金床は、隣接する石組み炉（1号炉）に伴う可能性が高いが、本書では6号住居出土遺物として扱う。

まずは時代別に遺構の様子を確認していきたい。

第2節 各時代の遺構・遺物

1. 縄文時代の遺構

縄文時代の遺構としては中期の住居が1軒検出されている。当遺跡の東と北に隣接する下里見宮谷戸遺跡第1次調査と第3次調査でも縄文時代中期の土器片が出土しており、遺跡周囲に縄文時代中期の集落が展開していたことが想定される。

25号住居

調査区南東端で検出された住居である。住居プランの東半を20号住居に削平されていることと、覆土の色調が地山と差異が無かったため、壁の立ち上りを明確に確認することができなかった。残っていた壁を精査した結果、住居の平面プランは径約8mの円形を呈していたことがわかる。

住居の中央部分に複数の石を据えた炉が作られており、この炉の周囲から大量の縄文土器片及び打製石斧が出土した。土器の出土状態を見ると完形品やそれに近いものは見られず、多数の個体の破片が群集していることから、住居内での土器の使用状態を示しているのではなく、使用後の土器が廃棄されたものであると推定される。

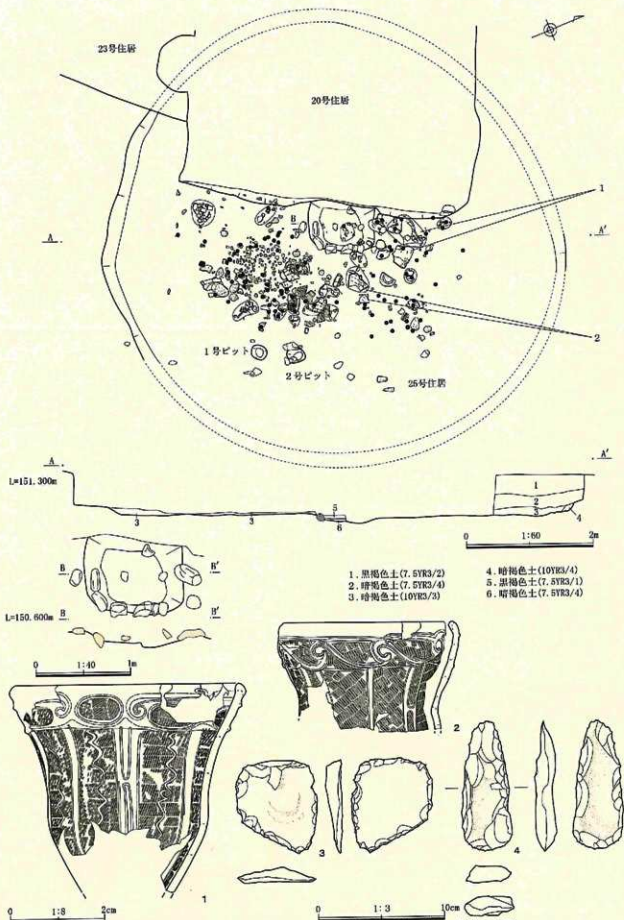
柱穴は土器集中地点の外側に2基（1・2号ピット）確認されたため、床面内側にサークル状に並ぶ柱であったと推定されているが、検出された2基以外の柱穴を確認することはできなかった。

出土した土器を見ると、口縁部文様帯と胴部文様帯が形成され、陸帯や沈線で縄文の充填される部分と無文の部分で区分される加曾利式の様相を示しており、口縁部文様帯は陸帯及び磨消し縄文で構成されるが、胴部文様帯と口縁部文様帯の間に無文帯が存在しないことから加曾利Ⅱ式の土器群であると考えられる。

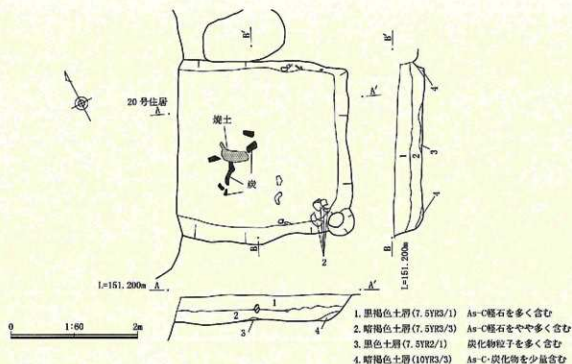
胴部文様帯は縦方向に幅広く縄文を磨り消した帯の外側に沈線で区画するものが多いが、図化しなかった個体の中には低い陸帯と沈線のみを文様とし、縄文を施さないものも存在した。第3図の1及び3は単節縄文を主文としているが、2は無節の縄文を主文としている。

2. 弥生時代の遺構

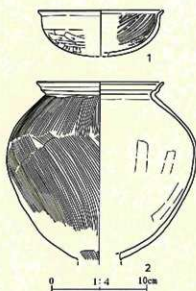
今回報告する下里見宮谷戸遺跡の2次調査では、弥生時代の遺構は検出されなかった。しかし、平成22年度に学校施設整備事業に伴って調査された下里見宮谷戸遺跡第1次調査『下里見宮谷戸遺跡第1次・下室田街遺跡・上中居荒神遺跡第3次 一 学校施設整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』（2013）では弥生時代後期の樽式土器片が出土しており、平成24年度に下里見小学校児童クラブ建設事業に伴って調査された下里見宮谷戸遺跡第3次調査では弥生時代中期後半の土器を出土する覆床基が数基検出されている。これら2遺跡は当遺跡と隣接していることから、遺跡周辺に弥生時代の集落が存在することも十分考えられる。



第3図 25号住居平面図及び断面図(S=1/60・1/40)・出土遺物(S=石器1/3・土器1/8)



第4図 24号住居 平面図・断面図(S=1/60)・出土遺物(S=1/4)



24号住居出土遺物(S=1/4)

鉄製の金床が集落から出土することは極めて稀なことであると共に、垂直に立てられた状態で出土したことから、偶然そこに廃棄されたものではなく、使用状態であったことが考えられ、隣接する炉を利用して鍛冶を行っていた可能性が想定されるのである。

金床の出土地点が6号住居の覆土であることと、住居の覆土を掘削して金床を埋めた痕跡が確認できなかったことから、本書では金床は6号住居の覆土出土遺物として扱っているが、実際は石組みがとの関係を十分考慮していかなければならないであろう。

24号住居

調査区南東隅に存在する住居で、縄文時代中期の25号住居の上に重なるような形で作られ、古墳時代中期の20号住居と重複関係にあるため、西壁を失っている。残存している南北壁の間隔が2.85mであることから、一辺3m弱の正方形を呈すると考えられる。カマドは設置されず、住居中央に炉が作られており、炭・焼土が見られる。

3. 古墳時代・平安時代の遺構

古墳時代前期の住居が1軒と、中期のカマドを持つ住居が22軒、還元炭焼成の碗を伴う平安時代の住居1軒の計24軒が確認された。遺跡内における住居の分布状態を見ると調査区北西端に1・2・3・14号住居が近接して建てられており、この集中地点から南に8・9・10号住居が重なり合って存在している。ここから東に目を向けると13・6・5・18号住居が建てられており、更に西に12軒の住居が重なり合うように存在していることがわかる。

第2図を見ると、1号住居の他3軒が建つ地点から南西に展開する8号住居・13号住居などの集中地点との間に、住居が作られていない空白地帯があることがわかる。

住居の他の遺構としては、6号住居の北西に隣接して石組みの炉が検出され、隣の6号住居の覆土の中から鉄製の金床が出土したことが注目される。

遺物は内斜口縁の坏(1)とS字口縁の台付甕(2)があるが、1は覆土上層からの出土で、周辺の古墳時代中期の住居から混入した可能性が高い。2は住居南のコーナー部分の床面上で潰れた形で出土していることから、住居に伴うと推定される。従って住居の年代は4世紀後半代と推定される。

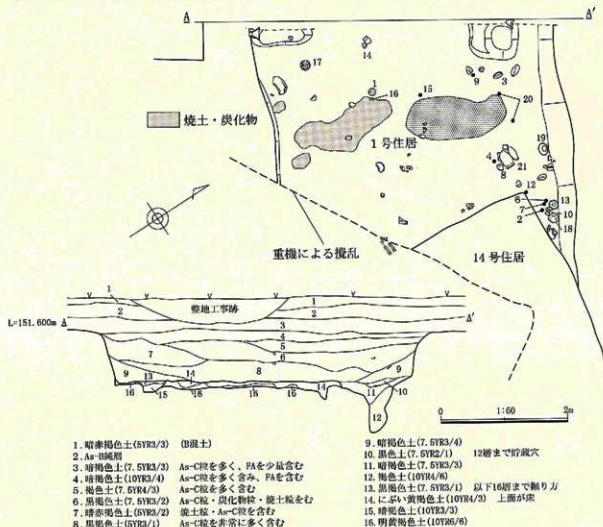
1号住居

調査区西端に存在する住居で、14号住居と重複関係にあり当住居のほうが古い。住居の東壁は14号住居と攪乱によって消失しており、西壁は調査区外にある。残存している南北壁の間隔は4.56mでカマドは検出されなためが使用していた事も想定されるが、調査区西端壁と住居北壁との接点付近に、貯蔵穴と見られる穴が存在することから、西壁にカマドが設置されていた可能性も否定できない。住居の中央部付近には焼土及び炭化物が広く分布していることから焼失住居であると考えられる。柱穴は床面からも床下からも検出されなかった。

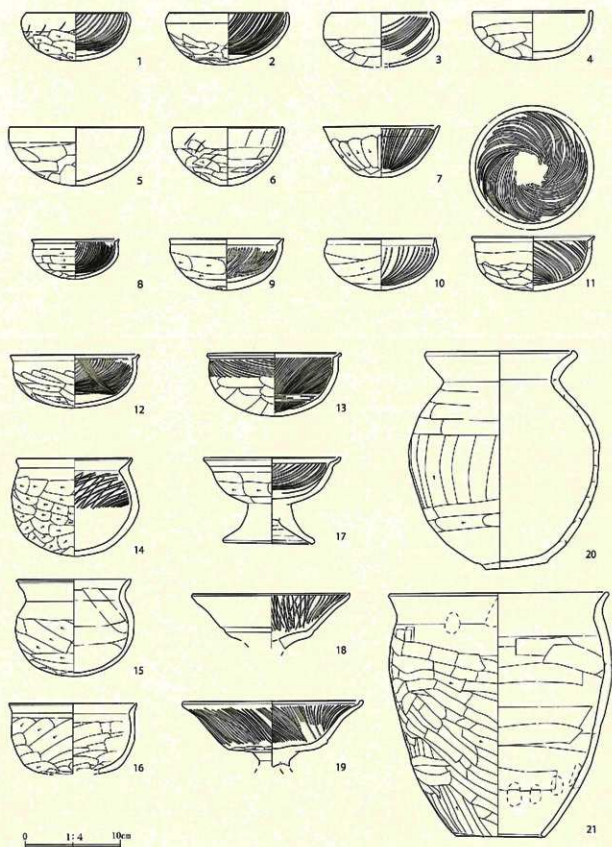
遺物は住居北壁に沿うように多く出土しており、特に14号住居と重複している地点周辺の床面からは、土師器坏(2・4・6・7・8・10・12・13)、高坏(18・19)、瓶(21)など、実測可能遺物の半数近くが集中して出土したことがわかる。

出土した遺物のうち坏(1~13)は内斜口縁と内湾口縁に分類され、内面に放射状の暗文を施したものが多く、また小型甕・高坏にも内面に暗文を持つ個体が存在し、更に高坏は坏部が内斜口縁のもの(17)と外反口縁のもの2種に細分が可能である。甕(20)は胴部が丸胴気味で口縁部が「く」の字に屈曲している。瓶(21)は大型で単孔を穿っており、口縁部直下に最大径を持つタイプである。

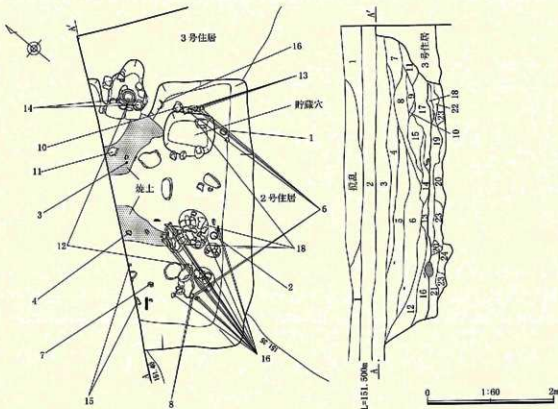
遺物の特徴から、古墳時代中期5世紀の住居であると考えられる。



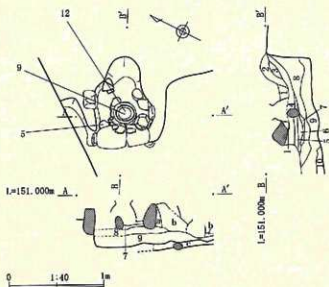
第5図 1号住居 平面図・断面図(S=1/60)



第6図 1号住居出土遺物(S=1/4)

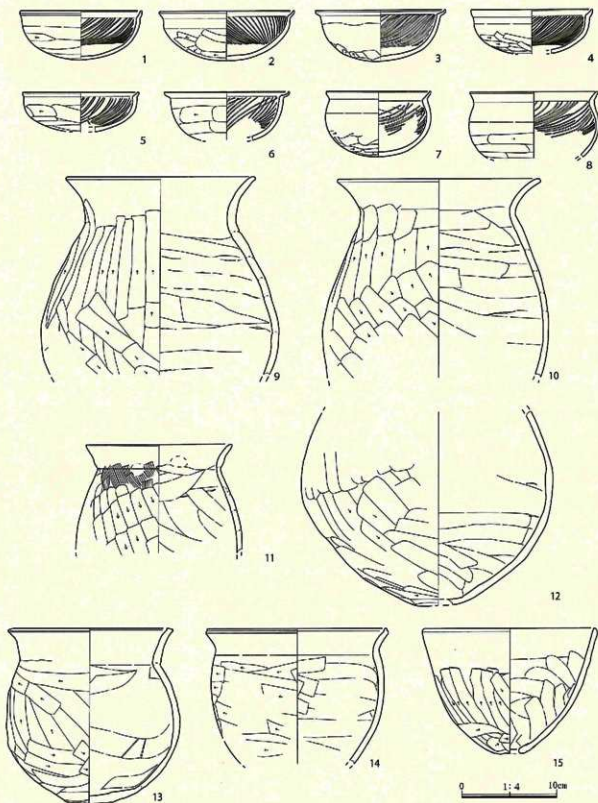


- | | |
|-------------------------------------|--|
| 1. 暗褐色土(10YR3/4) As-B・鉄分含む | 13. 黒褐色土(10YR3/1) As-C・ローム・焼土を少し含む |
| 2. As-B破砕 | 14. 黒褐色土(7.5YR3/2) As-C・焼土を含む |
| 3. 暗褐色土(10YR3/3) As-Cを多く含む | 15. 暗褐色土(7.5YR3/2) ローム粒・As-Cをやや多く含む |
| 4. 暗褐色土(7.5YR3/4) As-Cを非常に多く含む | 16. 黒褐色土(10YR3/1) As-C・焼土・炭化物を少し含む |
| 5. 暗褐色土(7.5YR3/3) As-Cを多く含む | 17. 暗褐色土(7.5YR3/3) As-Cを多く含む、ローム・焼土を含む |
| 6. 褐色土(7.5YR4/3) As-C・ローム粒を多く含む | 18. 褐色土(10YR4/4) ローム粒・ロームブロックを多く含む |
| 7. 暗褐色土(10YR3/4) As-Cをやや多く含む | 19. 黒褐色土(7.5YR3/2) ロームブロック・As-Cを含む |
| 8. にぶい黄褐色土(10YR4/3) As-Cを含む | 20. 黄褐色土(10YR5/8) 黒色土ブロック・白色軽石を含む |
| 9. 黒褐色土(10YR3/2) As-Cを多く含む | 21. 黒褐色土(GYR3/1) As-C・ロームを含み、炭化物を少し含む |
| 10. 黄褐色土(10YR5/8) ローム・焼土を少し含む | 22. 黒褐色土(7.5YR3/2) ローム・As-Cをやや多く含む、焼土を少し含む |
| 11. 褐色土(10YR4/6) As-C・焼土粒を少し含む | 23. 黒褐色土(7.5YR3/1) As-C・ロームブロックを多く含む |
| 12. 黒褐色土(7.5YR3/2) As-C・焼土・炭化物を少し含む | 24. 黒色土(7.5YR2/1) As-C・焼土・炭化物を少し含む |

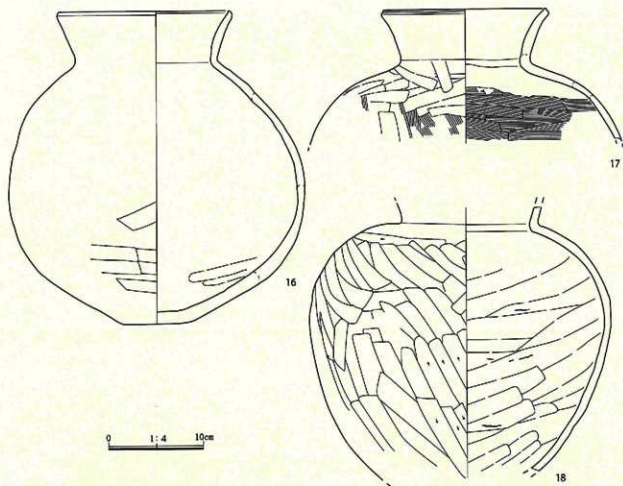


- | |
|---|
| 1. 暗褐色土(10YR3/4) 粘土・焼土ブロックを多量に含む、崩壊した天井部分 |
| 2. 暗褐色土(10YR3/3) As-Cを含み、黒色土ブロック・焼土ブロックを含む |
| 3. 黒褐色土(10YR2/2) 焼土粒を多く含む、黒色土ブロックを含む |
| 4. 黒褐色土(10YR2/2) ローム粒をやや多く含む |
| 5. 黒褐色土(10YR2/1) 粘性強い、灰を多く含む |
| 6. 黒褐色土(10YR2/2) As-Cを含む |
| 7. 明赤褐色土(5YR5/8) 焼土、上期に灰あり |
| 8. 黒褐色土(7.5YR3/1) ローム粒・ロームブロックを多く含む、As-Cを含む |
| 9. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックを多く含む、As-Cを含む |
| 10. 暗褐色土(7.5YR3/4) ローム粒を多く含む、焼土粒・炭化物を少量含む |
| a. 黄褐色土(10YR5/8) ローム層(カマド基部) |
| b. 暗褐色土(7.5YR3/3) As-C・ローム粒を多く含む |
| c. 明黄褐色土(10YR6/8) ロームを主体とする層 |

第7図 2号住居平面図・断面図(S= 1/60) カマド平面図・断面図(S=1/40)



第8図 2号住居出土遺物①(S=1/4)



第9図 2号住居出土遺物②(S=1/4)

2号住居

調査区北西隅に存在する住居で、3号住居と重複関係にあり、当住居のほうが新しい。住居の床面からは大量の焼土・炭化物が検出され、焼失住居であると考えられる。

住居の北西半は調査区外にあり、確認できる南東壁は長4.2mを計測する。柱穴は確認されなかった。

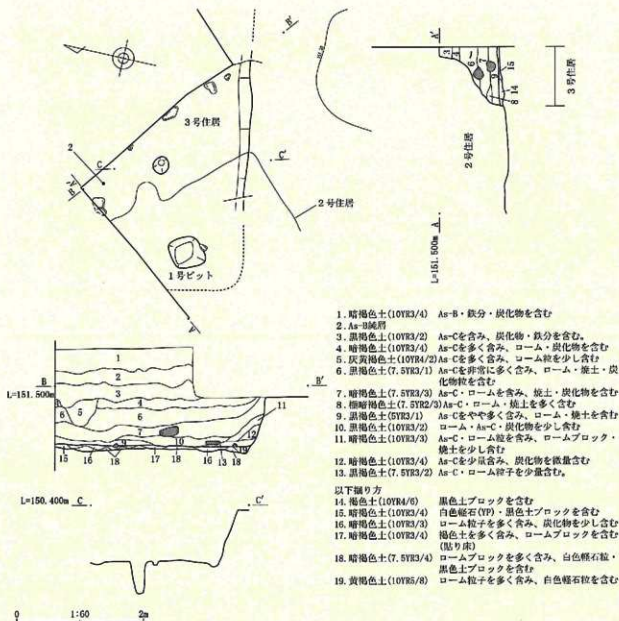
北東壁中央部にカマドが設置されており、カマドに隣接するコーナー部分には隅丸方形の貯蔵穴が作られている。カマドは袖部に袖石を立てて構築されており、崩落した天井材や土師器の甕などの遺物を取り上げてみると、カマドの中心には石製の支脚が立ったままの状態で見出された。

遺物はカマド内と貯蔵穴周辺、南東壁の付近から集中的に出土した。

土師器甕(9・12・14)はカマドの中心の本来甕が据えてある部分から出土しており、貯蔵穴北東の床面では(10・13)がそれぞれ検出されている。また南東壁際の中央部からやや南寄りにかけて大型の土師器甕(16・18)が潰れたような形で出土している。特に(16)は口縁部から肩部のみが、カマドの袖脇の床面直上から掘えられたような形で出土しており、カマドで使用する土器の置き台として再利用されていた様子が伺える。

土師器坏(1~8)は内斜口縁で内面に放射状暗文を伴い、体部が半球形でやや浅めのもの(1~5)と、やや深めで球状を呈するもの(6~8)に分類される。暗文は深めのものよりも浅めのものの方が丁寧に細かく施文されているようである。土師器模倣坏及び須恵器は出土していない。

出土した遺物の特徴から、古墳時代中期5世紀代の住居であると考えられる。



第10図 3号住居平面図・断面図(S=1/60)

3号住居

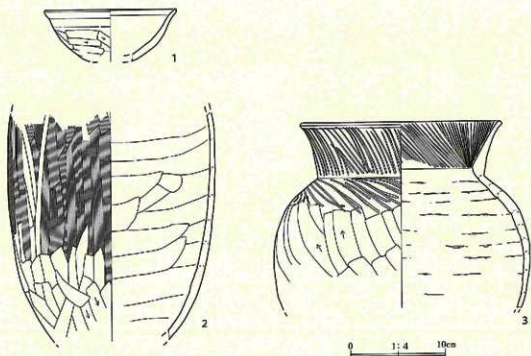
調査区北西隅に存在する住居で、2号住居と重複関係にあり、当住居のほうが古い。

住居の北半は調査区外にあり南西部分は2号住居により壊されているため、住居の規模は明らかでない。南西コーナー一部分に柱穴と推定される穴(ピット1)が存在するが、他の柱穴は検出されなかった。カマドも調査区外に存在したと考えられ、検出できなかった。

覆土は2号住居と同様にAs-Cを多く含んでおり、貼り床にはロームを混入して固められている。

遺物は土師器のみ数点出土している。(1)は高坏の坏部と考えられ、内斜口縁気味の口唇部に、やや厚めの体部を持つ。他の住居から出土した同時期の高坏では、坏部内面に暗文を施したものが多かったが、(1)はナデ調整のみである。壺(2)は現存する住居床面北西端部で検出された。胴部外面中位より上半には縦方向のハケを施しており、下半は更にその上から縦方向のヘラケズリを施している。(3)胴部下半及び底部を失っているが、口縁部内外面及び胴部上半に暗文を施しており、壺であると考えられる。

出土した遺物の特徴から、古墳時代中期5世紀前半代の住居であると考えられる。



第11図 3号住居出土遺物(S=1/4)

4号住居

調査区北東端に存在する住居で12・15・16号住居と隣接するが、重複関係は無い。

南北壁が4.32m・東西壁が3.93mを計測するほぼ正方形の平面プランで、4基の柱穴を持っており（1号ビット～4号ビット）、西壁中央にカマドを設置している。住居の北東コーナー部分ももう1基のビット（5号ビット）が存在するが、主柱穴ではない。3号住居にも同じコーナー部分にビット（3号住居1号ビット）が存在していたことから、同様の機能を持つ穴であると推定される。

貼り床は存在せず、掘り方底面を平坦にして床としている。4基の主柱穴の内側に、2基の床下土坑が検出され、更にカマドの北側にも1基の床下土坑が検出されている。

床下土坑1及び2は直径約1mの崩れた円形を呈し、深さは30cm前後を計測する。貯蔵穴内から土器の小片は出土したが、大型の甕や焼土は検出されなかった。

カマドの北に隣接する床下土坑3は隅丸三角形に近い形に崩れた径約80cmの円形で、位置的には貯蔵穴が掘られる場所であるが、深さが床面から8cmしかなく、貯蔵穴としては浅すぎると考えられるため、ここでは床下土坑として扱いたい。

1号ビット～4号ビットは、床面から40～50cm前後掘削されており、更に10～20cm程度深く柱痕と推定される窪みが見られる。

カマドは西壁中央付近に設置されている。両方の袖には、やや長胴の傾向を持つ土師器甕が伏せられた様な状態で、補強材として再利用されている（12・13）。カマド主軸方位はN-80°-Wを計測する。

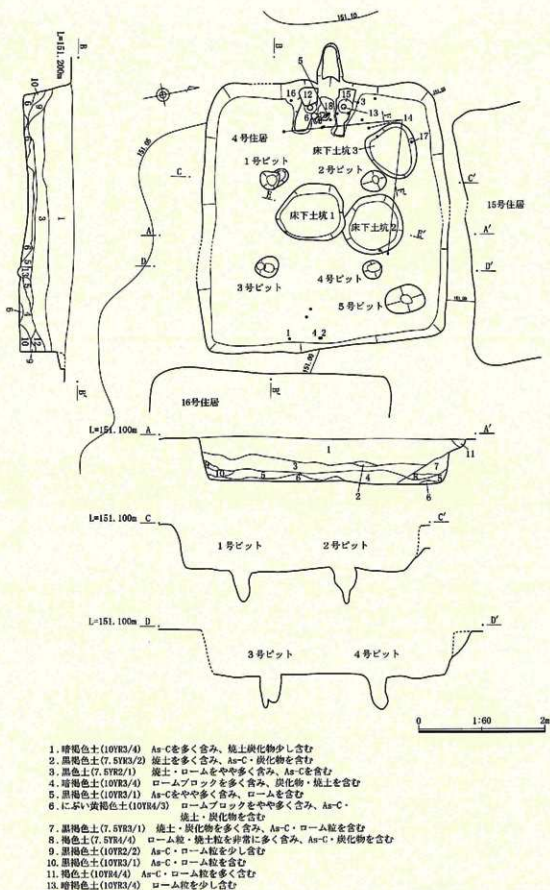
住居の東壁中央付近では、土師器環がややまとまった形で出土している（1・2・4）。

土師器環（1～10）は内面に放射状暗文を施したものが多く、浅めのもの（1～7）と深めのもの（8～10）に分けられる。これらの中で（1）は内面見込み部分に×字状の暗文を持つことが注目される。この×字状の暗文は、他の住居からも少数ながら出土しており、時期的な関連も含めて考慮が必要である。

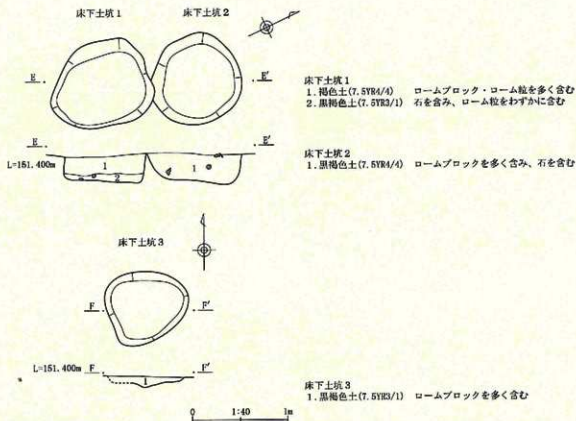
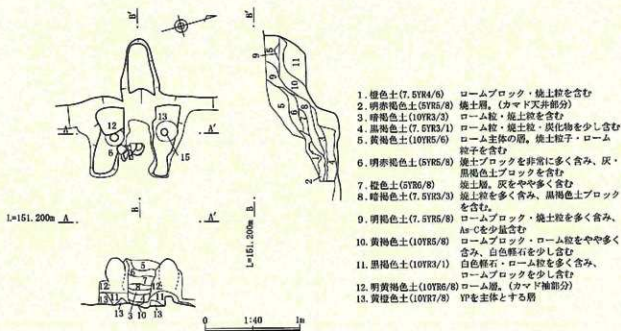
（11）は内斜状にやや長く外反する口縁を持ち、内面には暗文が施されていない。これは脚部を失っているが、台付甕であろう。

（18・19）は手捏ね土器である。（19）は内外面に細かい暗文を施している。

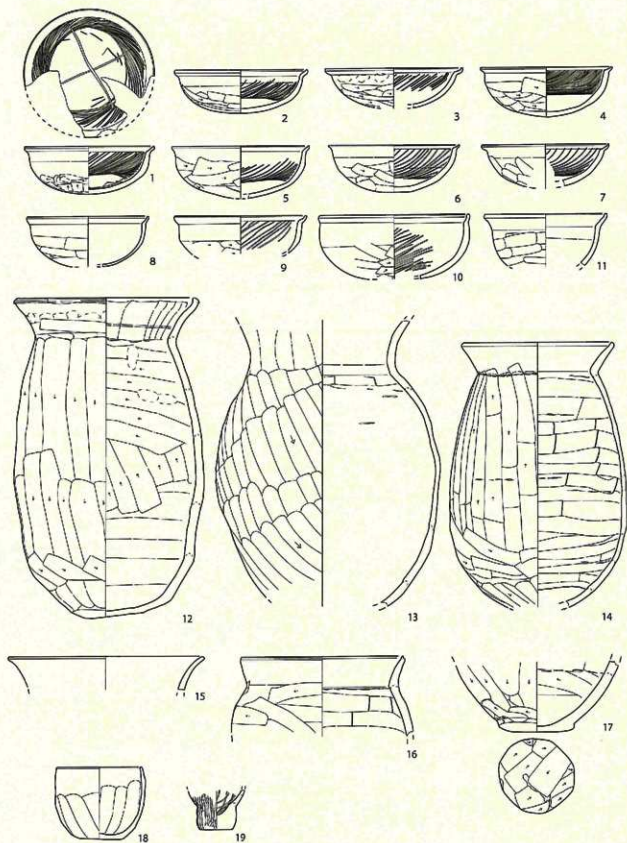
出土した遺物の特徴から、古墳時代中期5世紀代の住居であると考えられる。



第12図 4号住居平面図・断面図(S=1/60)

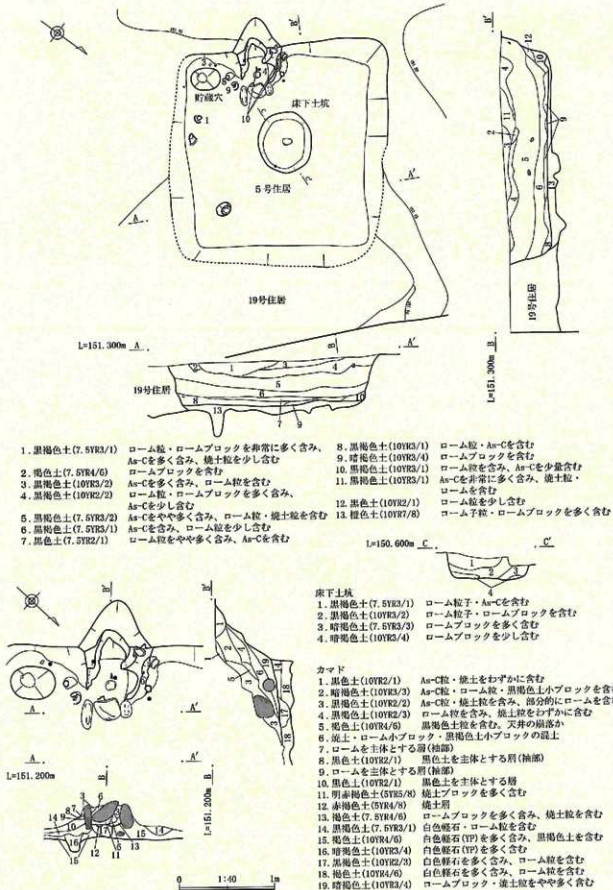


第13図 4号住居カマド・床下土坑平面図・断面図(S=1/40)

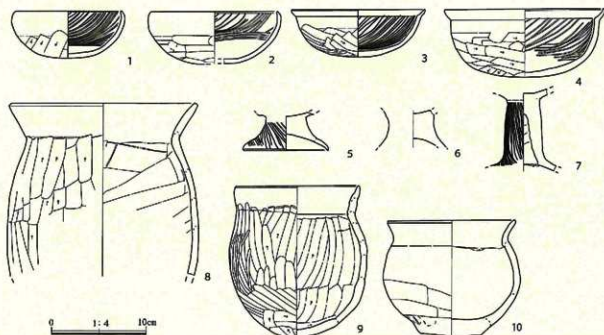


第14図 4号住居出土遺物(S=1/4)

0 1:4 10cm



第15図 5号住居平面図・断面図(S=1/60 カマド平面図・断面図 床下土坑断面図(S=1/40)



第16図 5号住居出土遺物(S=1/4)

5号住居

調査区中央部北東寄りにある3.5m×3.45mのほぼ正方形のプランを呈する住居で、19号住居と重複関係にあり、当住居のほうが新しい。柱穴は住居北東コーナー部分にビット状の穴が見られるが、他の3基は確認できなかった。

南西壁中央部にカマドを設置しており、カマド焚口に向かって左側に長軸44cm・短軸36cm・深さ52cmの貯蔵穴が掘られている。カマドの主軸方位はN-53°-Eで、袖の端部に一對の袖石が置かれており、焚口に向かって左側の袖から落下した形で天井石が見られる。遺物は焚口に向かって右側の袖周辺からは小型甕(10)が、焚口中央部からは土師器杯(4)が、左側の袖周辺及び貯蔵穴周りからは土師器杯(3)・甕(8)・小型甕(9)がそれぞれ出土している。

出土遺物を見ると土師器のみで須恵器の存在は認められなかった。器種を見ると、内湾口縁の杯(1・2)・内斜口縁の杯(3・4)が出土しており、いずれも内面に放射状暗文を施している。内斜口縁の杯では比較的小型のもの(3)と大型で深いもの(4)に再分類が可能である。高杯(5~7)は、短脚の個体(5・6)と長脚の個体(7)に細分可能で、(5・7)には外面に暗文を施している。甕はやや長胴気味の(8)と丸胴の小型甕(9・10)が存在する。

出土した遺物の特徴から、古墳時代中期5世紀代の遺構であると考えられる。

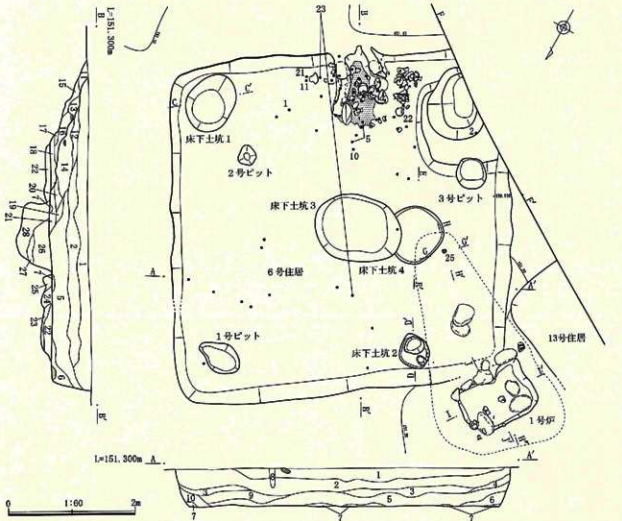
6号住居

調査区中央部南東部に5.4m×5.4mの正方形を呈する住居で、古墳時代の石組のがである1号炉と重複関係にあり当住居のほうが古い。南東壁中央南寄りの位置にカマドが設置されており、主軸方位はN-121°-Eである。

柱穴の掘り込みを持つビットは1号から3号まで3基確認されているが、それぞれの位置関係が柱の位置としては不自然であり、これらを柱穴として認識することはできない。

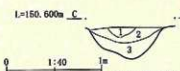
床下土坑は住居の中央部に2基(床下土坑3・4)、南東コーナー部分に1基(床下土坑1)、北西コーナー付近に1基(床下土坑2)存在するが、これらのうち床下土坑2は入り口施設に伴うものである可能性が高い。

カマドは両袖が住居壁と接する位置に一對の袖石を配置しており、焚口付近にももう一對配置していたらしい。焚口に向かって右側の袖は袖石が失われているが、左側の袖では袖石が元の位置に残っている。



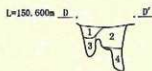
1. 黒褐色土(7.5YR3/1) As-Cを非常に多く含み、焼土を少し含む
2. 黒褐色土(10YR2/2) As-Cを多く含み、焼土・炭化物・ローム粒を含む
3. 暗褐色土(10YR3/3) As-Cをやや多く含み、ローム粒を含む
4. 暗褐色土(7.5YR3/4) ローム粒を多く含み、As-Cを含む
5. 黒褐色土(7.5YR2/2) As-C・ローム粒を含み、ロームブロックを少し含む
6. 黒褐色土(10YR2/2) As-C・ローム粒・焼土を含む
7. 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒・ロームブロックを含む
8. 暗赤褐色土(5YR3/2) As-Cを多く含み、ローム粒を含む
9. 黒褐色土(7.5YR3/1) As-C・ローム粒を多く含み、ロームブロック・焼土を少し含む
10. 黒色土(7.5YR2/1) As-C・ローム粒を少し含む
11. 黒褐色土(7.5YR3/1) ローム粒・焼土を多く含み、As-C・炭化物を含む
12. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒・ロームブロックを多く含み、As-C・炭化物・焼土をやや多く含む
13. 暗褐色土(10YR3/4) As-C・ローム粒・ロームブロックを多く含み、焼土・炭化物を含む
14. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒・ロームブロック・焼土を多く含み、As-C・炭化物を含む

15. 褐色土(10YR4/6) ローム粒・焼土を非常に多く含む
16. 褐色土(10YR4/4) ローム粒・焼土を非常に多く含み、As-C・焼土ブロックを含む
17. 暗褐色土(7.5YR3/3) ローム粒を多く含み、焼土ブロック・焼土粒を含む
18. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒・焼土を多く含み、As-C・炭化物を含む
19. 黒褐色土(7.5YR3/1) ローム粒・As-Cを含み、焼土を少し含む
20. 黒褐色土(7.5YR3/2) As-Cを多く含み、ローム粒・焼土を少し含む
21. 暗褐色土(10YR3/3) As-C・ローム粒・焼土を少し含む
22. 黄褐色土(10YR5/8) ローム粒子・ロームブロック・黒色土ブロックを多く含む
23. 褐色土(10YR4/6) YPを多く含み、ローム粒を少し含む
24. 明黄褐色土(10YR6/8) ロームブロックを含み、白色軽石を少し含む
25. 黒褐色土(7.5YR3/1) 白色軽石を多く含む
26. 暗褐色土(7.5YR3/4) ローム粒・ロームブロックを非常に多く含み、黒色土ブロック・白色軽石を少し含む
27. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒・ロームブロックを多く含む
28. 褐色土(10YR4/6) ローム粒・ロームブロックを非常に多く含み、白色軽石を少し含む



床下土坑1 C-C'

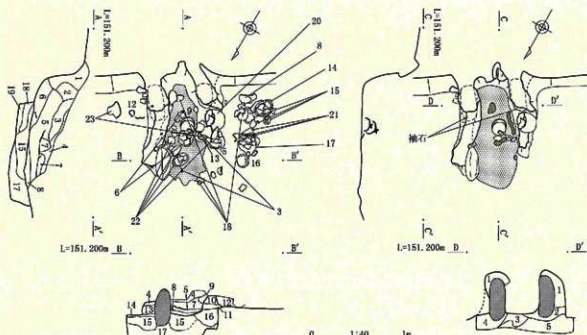
1. 黒褐色土(7.5YR3/2) As-C・褐色粒をわずかに含む
2. 黒褐色土(7.5YR3/2) 1層に臥しているが色味がやや暗い
3. 黒褐色土(7.5YR3/1) 褐色粒をわずかに含む



床下土坑2 D-D'

1. 黒褐色土(7.5YR3/1) 褐色粒を微量含む
2. 黒褐色土(7.5YR2/2) ローム粒をやや多く含む
3. 黒褐色土(7.5YR3/2) ロームブロックを多く含む
4. 黒褐色土(7.5YR3/1) ローム粒を微量含む

第17図 6号住居 1号炉平面図・断面図(S=1/60) 床下土坑1・2断面図(S=1/40)



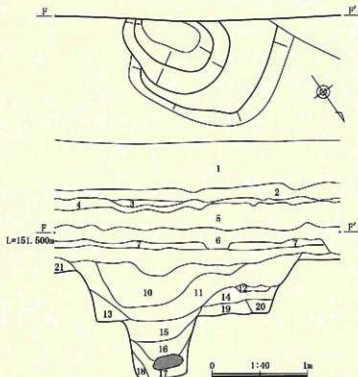
カマダA・B

1. 暗褐色土(10YR3/4) 焼土ブロック・ロームブロックを多く含む
 2. 暗褐色土(10YR2/4) ローム粒を多く含む、黒色土ブロックを含む
 3. 褐色土(10YR4/6) 焼土粒・焼土ブロックを含む、As-Cをわずかに含む
 4. 黒褐色土(10YR2/2) ローム粒を含み、焼土小ブロックをわずかに含む
 5. 黒褐色土(10YR2/2) 焼土をわずかに含む、軟土ブロックを多く含む
 6. 焼土を主体とし、黒褐色土・ロームを多数に含む層
 7. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 凝土に粘土を含み、灰を多く含む
 8. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 7層に粘るが、灰を多く含む
 9. 褐色土(10YR4/4) 崩れたカマダ材、10層と同じ
 10. 褐色土(10YR4/4) 黒色土ブロックを含む(上部)
 11. 黒褐色土(10YR2/2) ロームブロックを含む(上部)
 12. 黒褐色土(10YR2/2) 4層とはほぼ同じ

13. 褐色土(7.5YR4/6) As-C・ローム粒・ロームブロックを含む
 14. 暗褐色土(7.5YR3/4) ローム粒子・As-Cを含む
 15. 褐色土(10YR4/6) ロームブロック・YPを含む
 16. 黄褐色土(10YR5/6) ローム粒・白色軽石をやや多く含む
 17. 褐色土(10YR4/4) ロームブロック・白色軽石を含む
 18. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒を含む
 19. 黒褐色土(7.5YR3/1) ローム粒をやや多く含む、ロームブロックを少し含む

カマダD

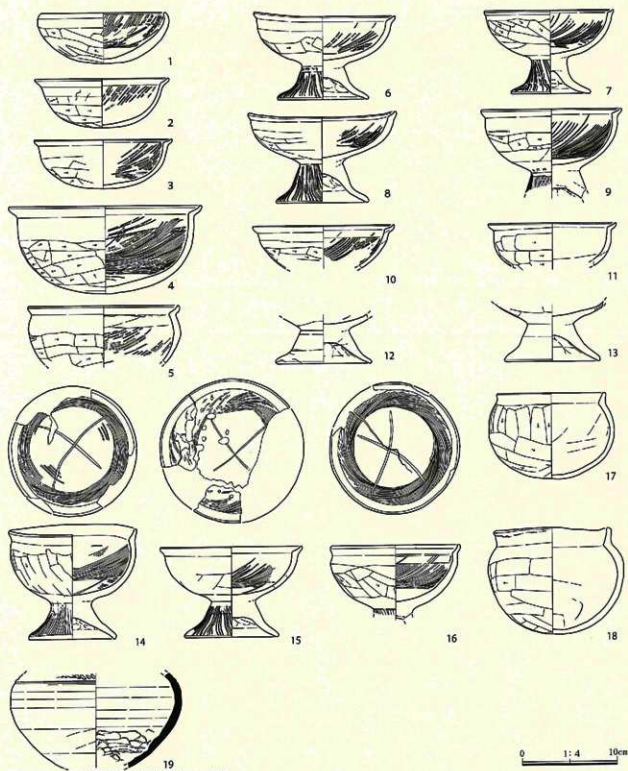
1. 黄褐色土(10YR5/6) ローム主体(上部)
 2. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒・白色軽石を含む
 3. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒を含む
 4. 黒褐色土(7.5YR3/1) ローム粒をやや多く含む、ロームブロックを少し含む
 5. 黄褐色土(10YR7/8) ロームを主体とし、YP・黒色土ブロックを含む



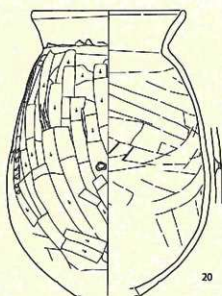
貯蔵穴F-F'

1. 暗褐色土(10YR3/3) 小礫・鉄屑などを含む。(表土)
 2. 褐色土(10YR4/6) 白色軽石を多く含む、褐色粒子・鉄分を含む
 3. 明赤褐色土(5YR5/8) As-B・褐色粒を含み、鉄分が下層に沈着している
 4. 明赤褐色土(5YR3/6) As-Bを非常に強く、粘性なし
 5. As-B層
 6. 黒褐色土(10YR3/2) As-Cを多く含む
 7. 灰黄褐色土(10YR4/2) As-Cを多く含む、FAを含む
 8. 暗褐色土(7.5YR3/3) As-Cを多く含む、FAを多く含む
 9. 黒褐色土(7.5YR3/2) As-Cを含み、焼土・炭化物・ローム粒を少し含む
 10. 黒褐色土(7.5YR2/2) ロームブロックをまばらに含む、As-Cをわずかに含む
 11. 黒褐色土(7.5YR2/2) As-Cをわずかに含む
 12. 暗褐色土(7.5YR3/3) As-Cをやや多く含む、焼土ブロック・灰を少し含む
 13. 黒褐色土(7.5YR3/1) 黒色土の含有が多く、ローム粒をわずかに含む
 14. 黒褐色土(7.5YR3/2) As-Cをわずかに含む
 15. 黒褐色土(7.5YR3/1) ロームブロックをまばらに含む
 16. 黒褐色土(7.5YR3/1) ローム粒をわずかに含む
 17. 褐色土(7.5YR4/3) ローム粒を非常に多く含む
 18. 黒褐色土(7.5YR2/1) ロームブロックをわずかに含む
 19. 暗褐色土(10YR3/4) As-Cを多く含む、ローム粒・ロームブロックを少し含む
 20. 暗褐色土(7.5YR3/4) ローム粒子・As-Cを含む
 21. 黒色土(7.5YR2/1) As-Cをやや多く含む

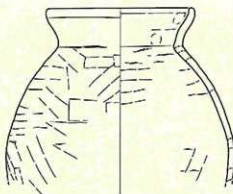
第18図 6号住居カマダ平面図・断面図(S=1/40) 貯蔵穴平面図・断面図(S=1/40)



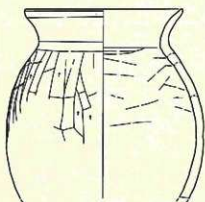
第19図 6号住居出土遺物①(S=1/4)



20



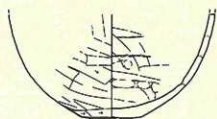
22



21

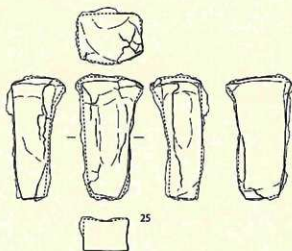


23



24

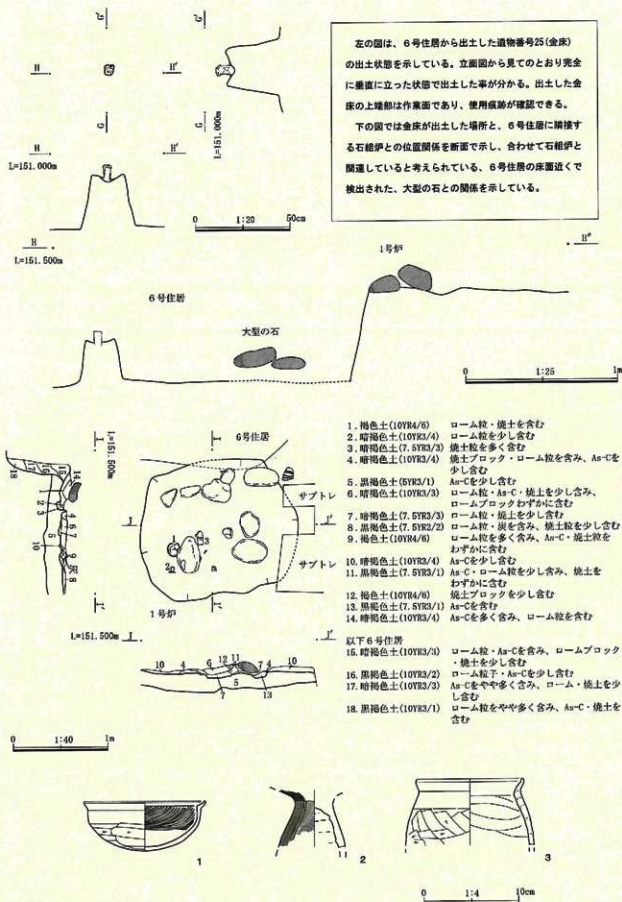
0 1:4 10cm



25

0 1:3 10cm

第20図 6号住居出土遺物②(S=1/4・1/3)



第21図 金床出土状況平面図・断面図(S=1/20・1/25) 1号炉平面図・断面図(S=1/40) 出土遺物(S=1/4)

カマドの右側の袖に隣接して、住居の南西コーナー部分には貯蔵穴が掘られている。貯蔵穴は平面形が長軸90cm、短軸60cmの隅丸方形を呈し、住居の主軸方向に長軸を持っている。深さは約70cmで、底面は平坦に仕上げられている。貯蔵穴の断面を観察すると底に近い位置から大型の円礫が検出されており、石の大きさ等を考慮すると、カマド右袖の袖石が落下した可能性が高い。

カマドの燃焼部及び右袖脇の貯蔵穴周辺から大量に遺物が出土している。

右袖の袖石を外した袖の残存部分に土師器甕(20)が口縁部を下に伏せられたような形で置かれ、更に近接して高坏の脚部(13)と鉢状を呈し内面に暗文を施した大型の坏(5)が出土した。この袖周辺とカマド燃焼部内からは内斜口縁で内面に暗文を施した坏(3)・坏部が内斜口縁で坏部内面及び脚部外面に暗文を施した高坏(6)・小型甕(18)・甕(22)等が出土し、貯蔵穴周辺からは高坏(8・14・15・16)・小型甕(17)・甕(21)が出土している。

また住居中央部やや西寄りの地点からは鉄製の金床(25)が出土した。金床は長さ9.6cm、幅は頂部5.0cm・中央部3.6cm・端部2.7cm、厚さは頂部3.8cm・中央～端部2.5cm、重量は486gである。集落内から鍛冶に用いた石製の金床石を検出することは稀にあるが、鉄製の金床が集落から出土するのは初めての例である。

金床の形状は、端部がやや先細る直方体を呈するが、頂部は鍛打に伴う打撃を受けているため潰れてやや広がっている。頂部を観察すると複数方向から打撃を受けていることが何れ、角の部分も若干潰れている。中央～先端部にかけては表面と側面に縦方向の窪みが生じており、主に整形時に生じたものとみられる。側面の窪みについては表面のそれと比べて弱いものである。これらの面に対して裏面には窪みがみられず、ほぼ平坦な作りとなっている。また、縦方向に複数の亀裂が入っており、使用時の打撃が少なからず影響を与えていると思われる。金床が出土した地点は住居床面から約30cm高く、住居検出面からは20～30cm低い。これは金床が住居で使用されていたものではなく、住居がある程度埋まった時点で入った遺物である事を示している。しかし、金床が鍛造時の作業痕を真上にして垂直な状態で出土していることから、住居の埋没過程で偶然混入したものとは考えにくい。

6号住居の北東コーナー部分に重複して1号炉が作られており、この炉は6号住居よりも新しい。また、住居内に炉で使用したと考えられる大型の円礫が落下していることから、金床を含めて炉との関係を考慮する必要があるだろう。

6号住居の遺物の中には内面に暗文を持つ内湾口縁・内斜口縁の坏、同じく坏部内面に暗文を持つ短脚の高坏、小型甕、甕などの土師器の他に、須志器長頸蓋(19)が出土している。また、高坏の内面暗文には4号住居坏の内面に見られたような「X」字の印が施されている個体が3点検出された。また甕(20)の胴部中位には、故意に穿孔したと考えられる穴があけられていた。

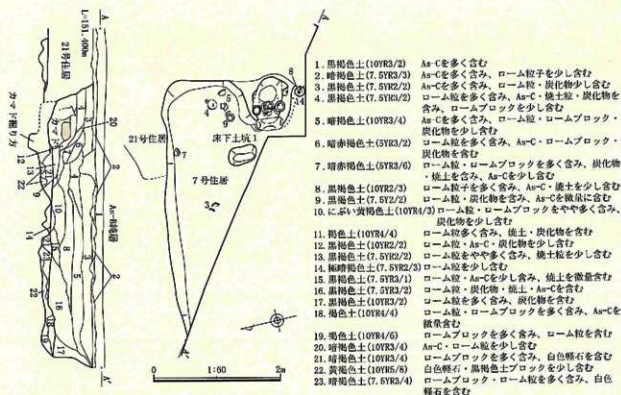
出土した遺物の特徴から、古墳時代中期5世紀前半代の遺構であると考えられる。

1号炉

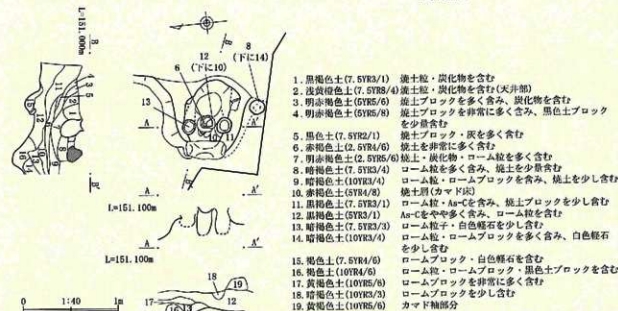
調査区中央やや南西寄りで検出された遺構で、6号住居と重複関係にあり、1号炉の方が新しい。浅く掘り窪められた1.4m×1.6mの隅丸方形プランの内側に長軸20～40cm前後の円礫を配置している。窪みの中からは大量の焼土が検出された。

炉に伴う遺物として内斜口縁で内面に暗文を施した土師器坏(1)と脚部外面に暗文を施した短脚の高坏(2)、そして壺(3)が出土している。これらは後の時代に混入したものとは考えにくいので、遺物から推定される5世紀という年代が遺構の年代に時期に近いと推定される。

炉の位置と6号住居内の大型の石及び金床との関係を見ると、炉の石の端と6号住居内の石との距離は40cmで、それぞれの石の上端の高差は45cmを計測し、更に金床との距離は1.75mで、炉石の上端と金床の上端との高低差は35cmであった。従って炉及び住居内の大型の石そして金床が連動して鍛冶遺構であった可能性は十分考えられるが、1号炉周辺の土と金床周辺の土を水洗し、磁石を用いて精査を行った結果、鍛冶薄片の存在を確認することはできず、これらの有機的な関係を積極的に証明することはできなかった。



1. 黒褐色土(10YR3/2) As-Cを多く含む
2. 暗褐色土(7.5YR3/3) As-Cを多く含む、ローム粒を少し含む
3. 黒褐色土(7.5YR2/2) As-Cを多く含む、ローム粒・炭化物少し含む
4. 黒褐色土(7.5YR3/2) ローム粒を多く含む、As-C・焼土粒・炭化物を含み、ロームブロックを少し含む
5. 暗褐色土(10YR3/4) As-Cを多く含む、ローム粒・ロームブロック・炭化物を少し含む
6. 暗赤褐色土(5YR3/2) ローム粒を多く含む、As-C・ロームブロック・炭化物を含む
7. 暗赤褐色土(5YR3/6) ローム粒・ロームブロックを多く含む、炭化物・焼土を含み、As-Cを少し含む
8. 黒褐色土(10YR2/3) ローム粒を多く含む、As-C・焼土を少し含む
9. 黒褐色土(7.5Y2/2) ローム粒・炭化物を含み、As-Cを微量に含む
10. にがい黄褐色土(10YR4/3) ローム粒・ロームブロックをやや多く含む、炭化物を少し含む
11. 褐色土(10YR4/4) ローム粒を多く含む、焼土・炭化物を含む
12. 黒褐色土(10YR2/2) ローム粒・As-C・炭化物を少し含む
13. 黒褐色土(7.5YR2/2) ローム粒をやや多く含む、焼土粒を少し含む
14. 黒暗褐色土(7.5YR2/3) ローム粒を少し含む
15. 黒褐色土(7.5YR3/1) ローム粒・As-Cを少し含む、焼土を微量含む
16. 黒褐色土(7.5YR3/2) ローム粒・炭化物・焼土・As-Cを含む
17. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒を多く含む、炭化物を含む
18. 褐色土(10YR4/4) ローム粒・ロームブロックを多く含む、As-Cを微量含む
19. 褐色土(10YR4/6) ロームブロックを多く含む、ローム粒を含む
20. 暗褐色土(10YR3/4) As-C・ローム粒を少し含む
21. 暗褐色土(10YR3/4) ロームブロックを多く含む、白色輝石を含む
22. 黄褐色土(10YR5/6) 白色輝石・黒褐色土ブロックを少し含む
23. 暗褐色土(7.5YR3/4) ロームブロック・ローム粒を多く含む、白色輝石を含む



1. 黒褐色土(7.5YR3/1) 焼土粒・炭化物を含む
2. 淡黄褐色土(7.5YR8/4) 焼土粒・炭化物を含む(天井部)
3. 明赤褐色土(5YR5/6) 焼土ブロックを多く含む、炭化物を含む
4. 明赤褐色土(5YR5/8) 焼土ブロックを非常に多く含む、黒色土ブロックを少し含む
5. 黒色土(7.5YR2/1) 焼土ブロック・炭を多く含む
6. 赤褐色土(2.5YR4/6) 焼土を非常に多く含む
7. 明赤褐色土(2.5YR5/6) 焼土・炭化物・ローム粒を多く含む
8. 暗褐色土(7.5YR3/4) ローム粒を多く含む、焼土を少し含む
9. 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒・ロームブロックを含み、焼土を少し含む
10. 赤褐色土(5YR4/8) 焼土(カマド灰)
11. 黒褐色土(7.5YR3/1) ローム粒・As-Cを含み、焼土ブロックを少し含む
12. 黒褐色土(5YR3/1) As-Cをやや多く含む、ローム粒を含む
13. 暗褐色土(7.5YR3/3) ローム粒・白色輝石を少し含む
14. 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒・ロームブロックを多く含む、白色輝石を少し含む
15. 褐色土(7.5YR4/6) ロームブロック・白色輝石を含む
16. 褐色土(10YR4/6) ローム粒・ロームブロック・黒色土ブロックを含む
17. 黄褐色土(10YR5/8) ロームブロックを非常に多く含む
18. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックを少し含む
19. 黄褐色土(10YR5/6) カマド軸部分

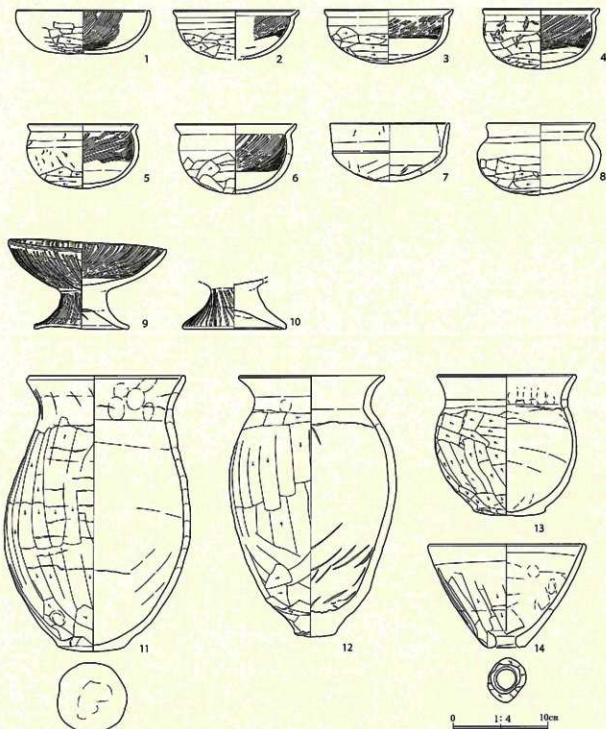
第22図 7号住居平面図・断面図(S=1/60) カマド平面図・断面図(S=1/40)

7号住居

調査区南東端に存在する住居で21号住居と重複関係にあり、当住居のほうが新しい。

住居の大半は調査区外にあるため詳細は不明であるが、北壁の残存部分の長さが3.96mあり、東壁にカマドが作られているが、その主軸ラインがコーナーより1.62m南であるため、東の壁中心よりもやや北寄りにカマドを構築していることがわかる。柱穴は検出されなかった。

カマドは焚口両袖に袖石を配置し、やや大型の礎を用いて天井石としている。カマドの主軸はN-110°-Eで、残存状態は良好である。燃焼部中央床面には坏部を欠いた土師器高坏の脚部が、上下逆向きに据えられて支脚としており、その上に土師器甕(12)が配置されている。(12)の口縁上には土師器坏(6)が蓋のように置かれており、その右脇には甕(11)が配置されている。このことから、当住居のカマドは甕二本掛けの構造であった



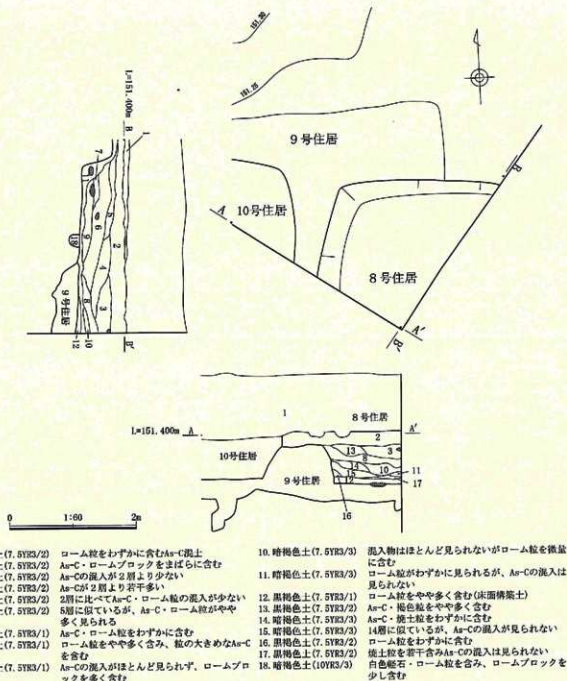
第23図 7号住居出土遺物(S=1/4)

ことがわかる。甕(12)の左には小型甕(13)が置かれているが、これは火にかけたものではなく袖の上に置かれていたものである。カマド右袖の右側(南側)には貯蔵穴があったと推定されるが、調査区外にあるために確認できなかった。右袖と壁との境に甕(14)が置かれ、その上にやはり蓋のように坏(8)が置かれていた。

住居から出土した遺物を概観すると、土師器杯類として内湾口縁のものが1点、内斜口縁のものが5点(2~6)、横做坏が1点(7)出土しており、高坏はカマドの支脚として使用されていた個体(10)とカマド左袖脇で出土した個体(9)がある。横做坏以外の坏内面と高坏の坏部内外面及び脚部外面には暗文が施されている。

甕(11・12)は若干長期化が進んでおり、(12)の底部は厚く突起している。

出土した遺物から見て7号住居の年代は5世紀後半代であろう。



第24図 8号住居平面図・断面図(S=1/60)

8号住居

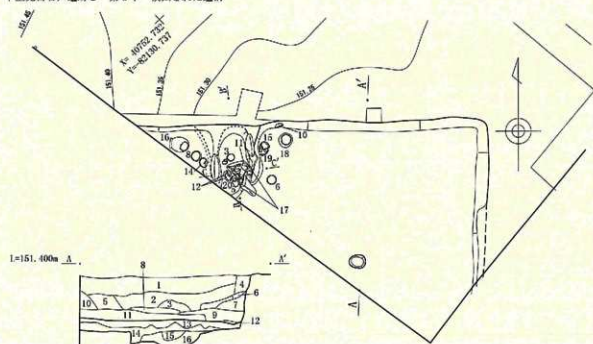
調査区中央西寄り南端に存在する住居で9号住居と重複するが当住居のほうが新しい。

住居プランの大半は調査区外であるため詳細は明らかではないが、北壁の残存部分が2.4m、西壁の残存部分は1.5mである。柱穴は確認されず、遺物は少ない。覆土の状況は他の住居に近く、同じ時期の遺構であろう。

9号住居

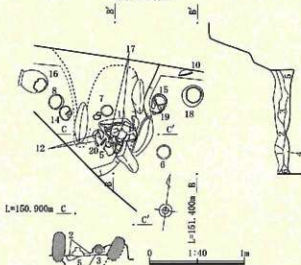
8号住居・10号住居に重複して作られており、これらの中で最も古い住居である。8・10号住居より深く掘られて構築されているため平面形状はよく残っており、北壁に設置されたカマドも残存している。しかし、住居の大半が調査区外にあるため規模は明らかでない。北壁の残存部分は5.88m、東壁は2.52mである。

掘り方にピット状の穴が見られるが、床面では柱穴を確認できなかった。カマド周辺を中心に、大量の遺物が出土している。



1. 黒褐色土(7.5YR3/2) As-C・ローム粒をやや多く含む
2. 黒褐色土(7.5YR3/1) ロームブロックを多く含む, As-C混土
3. 黒褐色土(7.5YR3/2) 1層によりAs-Cの混入が少ない
4. 黒褐色土(7.5YR3/2) As-C・ローム粒をわずかに含む
5. 黒褐色土(7.5YR3/1) As-C・ローム粒をわずかに含む
6. 黒色土(7.5YR2/1) ロームの混入が少ない, As-C混土
7. 黒褐色土(7.5YR3/2) As-C・ローム粒をわずかに含む
8. 暗褐色土(10YR3/4) 僅かにローム粒を非常に多く含む
9. 黒褐色土(7.5YR3/2) As-C・ローム粒をまばらに含む
10. 黒褐色土(7.5YR3/1) As-C・ローム粒・ロームブロックをわずかに含む

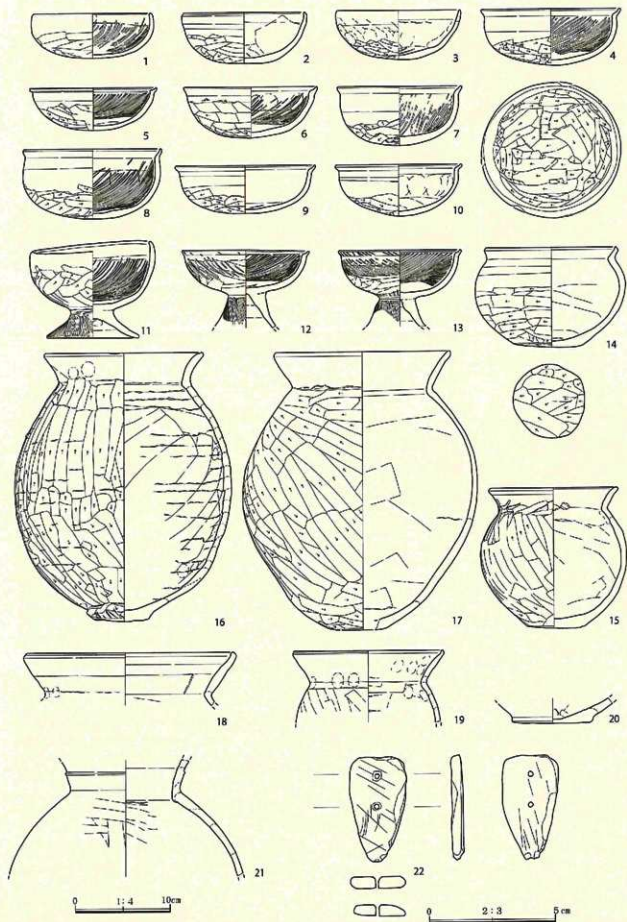
11. 暗褐色土(7.5YR3/3) 10層に似ているが、やや明るみがある
12. 黒色土(10YR4/6) ロームブロック・ローム粒を多く含む、黒色土ブロック・白色軽石を含む
13. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックを多く含む、ローム粒を含み、白色軽石を散在に含む(振り方)
14. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックをやや多く含む、ローム粒・黒色土ブロック(を含む)振り方)
15. 明黄褐色土(10YR4/6) ロームブロックを非常に多く含む、ローム粒・白色軽石を含む(振り方)
16. 黒色土(7.5YR2/1) 白色軽石を少し含む(振り方)



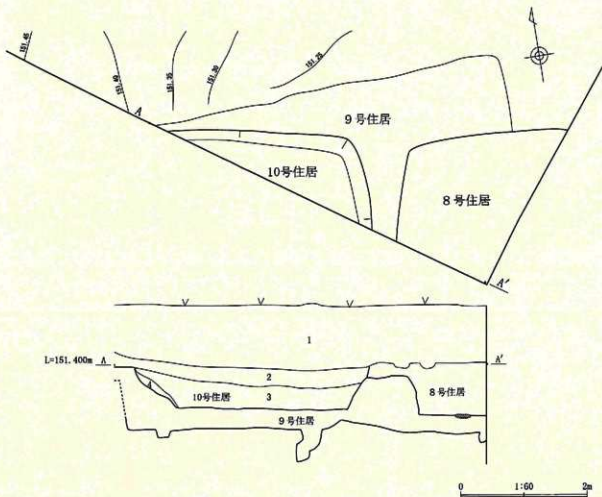
1. 明赤褐色土(5YR5/8) 焼土層
2. 暗褐色土(7.5YR3/4) ローム粒・ロームブロックを多く含む、焼土・黒色土ブロックを少し含む
3. 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒・白色軽石を含み、ロームブロックを少し含む
4. 褐色土(10YR4/6) ロームブロック・焼土ブロック・黒色土ブロック・ローム粒を含む
5. 黄褐色土(10YR5/8) ロームを主体とし、黒色土ブロックを少し含む
6. 褐色土(10YR4/6) ローム・黒色土ブロックを含む

第25図 9号住居及びカマド平面図・断面図
(S= 1/60・1/40)

カマドの右袖脇では土器の置き台とも推定される甕の口縁部(18)・小型甕(15)・坏(6)等が出土している。出土した遺物を概観すると、土師器坏は10個体が実測可能で、これらは内湾口縁は3個体(1~3)あり、内面に暗文を施すタイプと施さないタイプに細分される。内斜口縁は7個体(4~10)あり、やはり内面の暗文を施すもの・施さないものがある。高坏はいずれも短脚で、坏部の形態が内湾口縁のものと同内斜口縁のものがあり、坏部内面及び脚部外面に暗文を施す。甕は7号住居のものと比較してみると、さほど長胴化が進んでいないことがわかる。甕(21)は段口縁を持つ。須恵器・横椀杯は出土していない。また、剣形の滑石製模造品(22)が出土している。出土した遺物の特徴から5世紀前半代の住居であろう。



第26図 9号住居出土遺物(S=1/4 2/3)



1. 表土(Aa-B層等も含まれる)
2. 暗褐色土(7. STR3/3) しまり・粘性やや弱く、As-Cをまばらに含む
3. 暗褐色土(7. STR3/3) 1層に収まっているが、As-Cの混入が少なく、炭片を多く含む
4. 暗褐色土(7. STR3/3) しまり・粘性弱く、As-C・ローム粒はほとんど含まない

第27図 10号住居平面図・断面図(S=1/60)

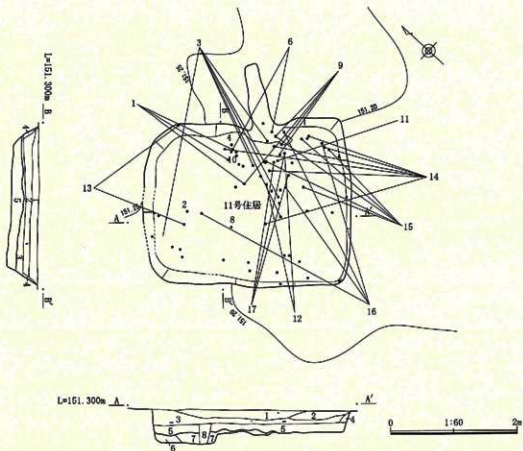
10号住居

8号住居・9号住居に隣接している住居で、9号住居と重複関係にあり、当住居のほうが新しい。8号住居と同様にカマド・柱穴等は検出されず、遺物は小片のみである。覆土の組成を見ると、他の住居と変わらないので、ほぼ同じ時期の遺構であると推定される。

11号住居

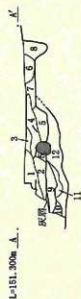
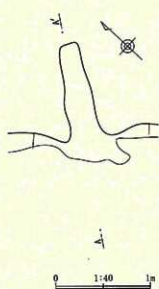
調査区中央付近で検出された住居で、2.64m×3.30mの方形を呈する。北東壁中央付近にカマドを設置している。カマドは主軸方位がN-47°-Eで、袖石と推定される円礫が一組確認されているが、袖の構造は明確ではなかった。出土遺物の中で、土師器等は内斜口縁で内面に暗文を施したもの(1~6・8)と施さないもの(7)があり、他に暗文を施した高坏(11・12)甕・小型甕(9・10・14~17)等が出土している。折り返し口縁を持つ壺(13)は、他の遺物と比較して古い要素を持っていることから混入品であろう。

出土した遺物の組成を見ると横俵坏・須恵器を伴っていないが、甕の長胴化が若干始まっている傾向にあり、古墳時代中期5世紀代の遺構であると考えられる。



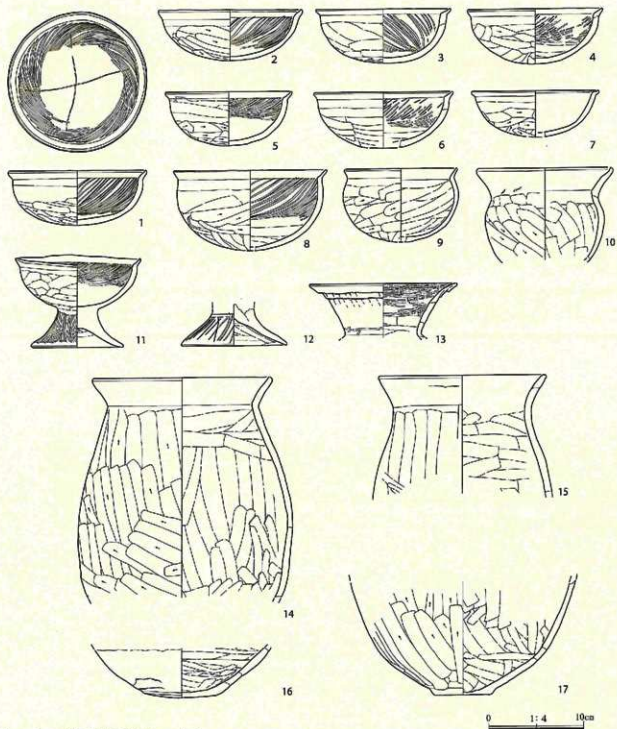
SFA-A'

1. 黒褐色土(7.5YR3/2) As-C・ロームブロックをやや含む
2. 黒褐色土(7.5YR3/1) しまり・粘性や弱く、1層にAs-Cの混入が少ない
ロームブロックをまばらに含む
3. 黒褐色土(7.5YR3/1) しまり・粘性弱く、As-Cをやや多く含む、ローム粒をまばらに含む
4. 黒色土(7.5YR2/1) しまり・粘性弱く、混入物の少ない黒色土(壁からの崩落上?)
5. 黒褐色土(7.5YR3/1) 上面が硬化し床面を形成。As-Cの混入少なく、ローム粒をわずかに含む
6. 暗褐色土(7.5YR3/4) しまり・粘性あり。TPを含み、ロームブロックを少し含む
7. 暗褐色土(10YR3/4) しまり・粘性あり。白色軽石を含む
8. 黒褐色土(5YR3/1) しまり弱い、粘性あり。As-Cを多く含む、ローム粒を少し含む

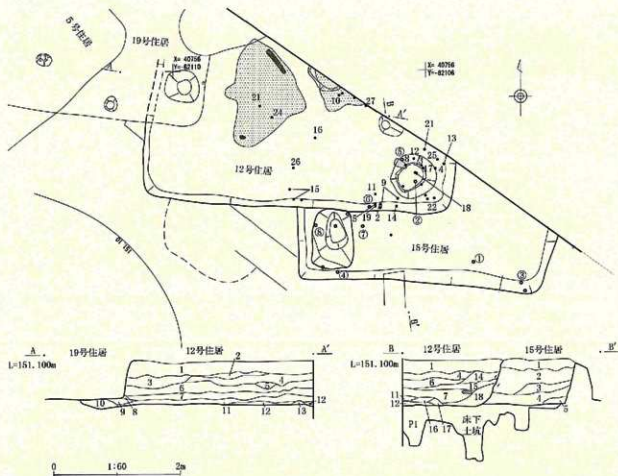


1. 黒褐色土(5YR3/1) ローム粒・ローム小ブロック・As-Cを含み、焼土をわずかに含む
2. 黒褐色土(10YR2/3) As-Cを含み、ローム粒をわずかに含む
3. 黒色土(10YR2/1) As-C粒・焼土粒を含む
4. 暗褐色土(10YR2/3) As-C粒・焼土粒をわずかに含む
5. 黒色土(10YR2/1) As-C粒を含み、焼土をわずかに含む
6. 黒褐色土(10YR2/2) As-C粒を多く含む、ロームを含む
7. 黒褐色土(10YR2/2) ローム・焼土などのカマド材を多量に含む
8. 黒褐色土(10YR2/3) カマド材のローム粒・ロームブロックを多く含む
9. 明赤褐色土(5YR5/6) しまりあり、粘性無い焼土層
10. 黒褐色土(5YR3/1) しまり・粘性あり。As-Cを多く含む。
11. 暗褐色土(7.5YR3/4) しまり・粘性あり。As-C・焼土ブロックをやや多く含む、ローム粒子を少し含む
12. 暗褐色土(10YR3/3) しまり・粘性あり。As-Cを多く含む、ローム粒を含む

第28図 11号住居平面図・断面図(S=1/60)カマド平面図・断面図(S=1/40)



第29図 11号住居出土遺物(S=1/4)



12号住居

1. 黒褐色土(7.5YR2/2) As-C・ローム粒を多く含む
2. 黒褐色土(7.5YR3/2) As-C・ローム粒・炭化物を含む
3. 黒褐色土(10YR3/1) As-Cを多く含む、ローム・炭化物を含む
4. 暗褐色土(10YR3/4) ロームブロック・ローム粒を多く含む、As-C・焼土・炭化物を含む。
5. 暗褐色土(7.5YR3/3) As-C・ロームを多く含む、焼土・炭化物を含む
6. 黒褐色土(7.5YR3/1) As-C・ロームを含み、焼土を少し含む
7. 黒褐色土(7.5YR3/3) As-C・焼土を多く含む、炭化物・As-Cを含む
8. 暗褐色土(10YR3/3) ローム・炭化物を含む、As-C・焼土を少し含む
9. 暗褐色土(7.5YR3/3) As-C・ローム粒・焼土・炭化物を含む
10. 暗褐色土(7.5YR3/4) ローム粒・焼土・炭化物を多く含む、As-C・ロームブロックを少し含む

15号住居

1. 黒色土(7.5YR2/1) As-Cを多く含む、ローム粒を少し含む
2. 黒褐色土(7.5YR3/1) As-Cを多く含む、ローム粒を含む
3. 暗褐色土(7.5YR3/4) As-Cを多く含む、ローム粒・焼土を含む
4. 暗褐色土(7.5YR3/3) As-C・ローム粒を多く含む、焼土を少し含む
5. 黒褐色土(7.5YR2/2) As-C・ローム粒を含み、ロームブロックを少し含む

11. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒・焼土を含み、As-C・ロームブロック・炭化物を少し含む
12. 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒・焼土を多く含む、炭化物を含む
13. 暗赤褐色土(5YR3/4) 焼土粒・焼土ブロックを多く含む、炭化物・ローム粒を含む
14. 暗褐色土(7.5YR3/4) ローム粒・ロームブロック・As-Cを多く含む、焼土・炭化物を微量に含む
15. 黒褐色土(7.5YR3/2) As-C・焼土・炭化物を含む、As-C・ロームブロックを多く含む、As-C・焼土・炭化物を含む
16. 暗褐色土(7.5YR2/2) ローム粒・焼土・炭化物を多く含む、As-C・ロームブロックを含む
17. 暗赤褐色土(5YR3/4) 焼土粒を、ローム粒・炭化物を含む
18. 暗褐色土(7.5YR3/4) ローム粒を非常に多く含む、As-C・焼土・炭化物を少し含む

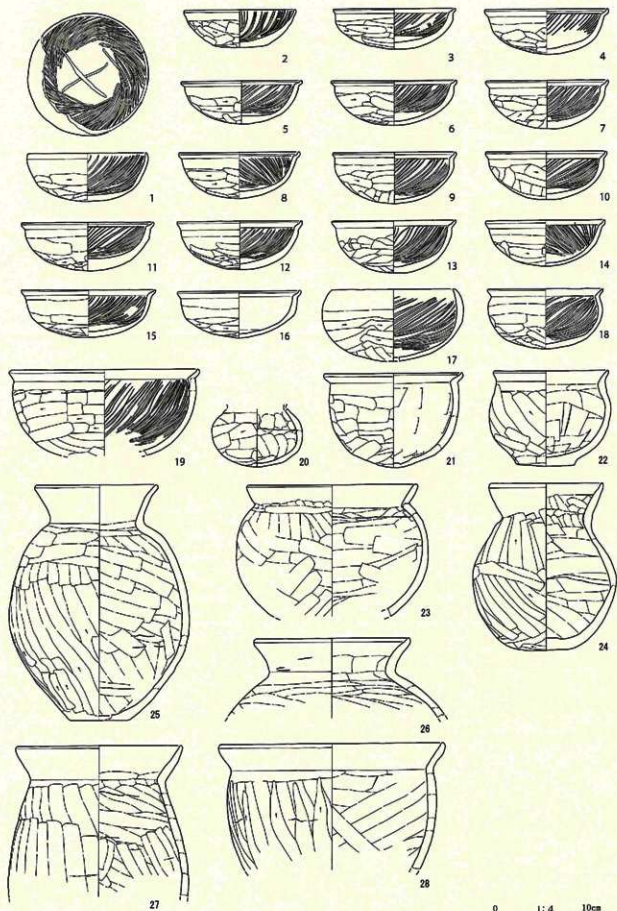
第30図 12号住居・15号住居平面図・断面図(S=1/60)

12号住居

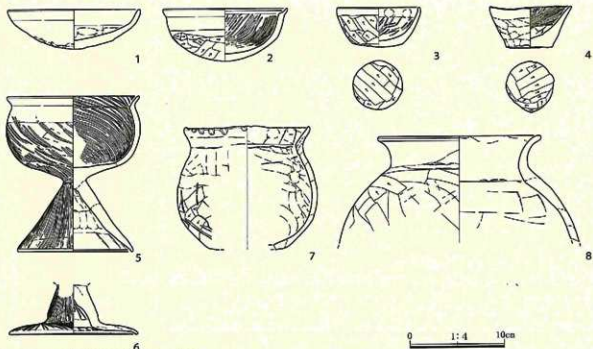
調査区北壁沿いのやや東寄りに存在する住居で、15号住居・19号住居と重複関係にあり、15号住居より新しく、19号住居より古い。

住居プランの北半は調査区外にあるため確認することができず、西壁の北側とその周辺は19号住居と重複しており、壁の立ち上がりがほとんど確認できなかった。床面に炭化材・焼土が多く分布しており、焼失住居と考えられる。

柱穴・カマドは確認されなかったが、残存している南東コーナー部分に土坑があり、貯蔵穴と推定されることから、東壁にカマドが設置されていたものと考えられる。



第31図 12号住居出土遺物(S=1/4)



第32図 15号住居出土土遺物(S=1/4)

住居の規模は大半が削平されているため確認しにくいですが、残存している南壁を計測すると4.9mを測る。

遺物の出土状況を平面図(第30図)で見ると、12号住居と15号住居の重複部分では2軒の遺物が交錯しているため、どちらに所属するのかわりにくい状況になっている。そこで第30図では1・2のように普通の数字は12号住居出土遺物、①②のように丸で囲った数字は15号住居の出土遺物という形で分類した。

遺物は住居南東の貯蔵穴と思われる土坑周辺から集中して出土している。また土坑の中からは底に近いレベルから内斜口縁の坏(18・6)が出土している。また住居の中央部分の炭化材や炭が分布している床面からは、完形の小型甕(24)が出土した。

住居内から出土した遺物を概観すると、土師器坏は内湾口縁のもの(1・2)と内斜口縁のもの(3~16)に分類されるが、(16)以外には全て内面に放射状暗文が施されている。また内湾口縁の(1)は見込みの中央部に「X」字の暗文が施されている。

内湾・内斜口縁の坏それぞれ坏部が深く丸い大型品(17~19)が存在し、いずれも内面に暗文を施している。暗文の施し方を見ると、大型品も小型品も丁寧である。また、口縁部を欠いているが丸底の埴(20)が出土しているが、埴の胴部の外面には暗文は施されておらず、ヘラケズリ調整である。

小型甕は丸胴気味で底部外面が円形のもの(21)と平らな底部を作っているもの(22)、やや長胴の甕で口縁部が長いもの(24)の3種類が存在する。

甕(25・27)は胴部にやや長胴化の傾向が見られ、大型の瓶(28)を伴っている。

出土した遺物から、住居の時期は古墳時代中期5世紀中葉であると考えられる。

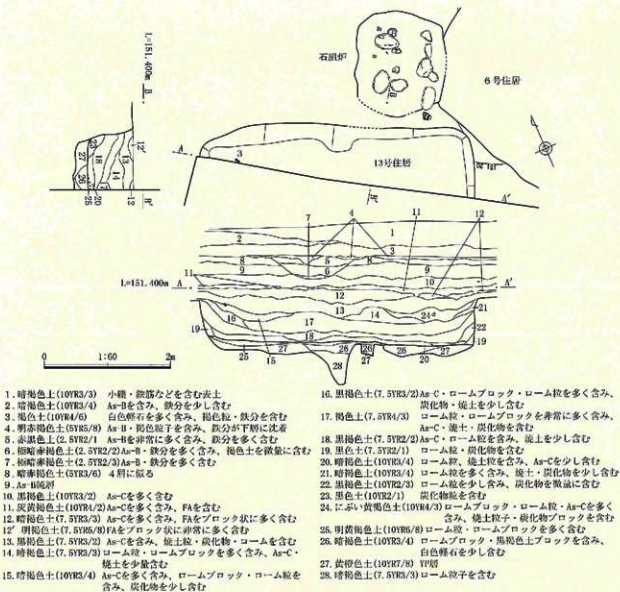
15号住居

12号住居の東に重複して建てられ、住居の大半は調査区の外にあり、残存部分の西半は12号住居に壊されている。残存している南壁は4.15mを計測し、12号住居よりも若干小さい。

住居の壁の平面的な傾きを見ると、重複している12号住居及び19号住居とはほぼ同じ向きであるが、15号住居の南に存在する4号住居とは若干異なっており、更に19号住居と重複している5号住居とは大きく異なる。

当遺跡では8~10号住居の3軒、また13・20号住居の2軒のように重複または近接する住居の平面的な傾きが同一な例が見られるため、集落の変遷を考える上で興味深い。

遺物は内湾・内斜口縁の坏(1・2)の他、手づくね土器(3・4)、台付甕(5)、短脚の高坏(6)、小型甕(7)、丸胴の甕(8)が出土している。5世紀前半代の住居であろう。



第33図 13号住居平面図・断面図(S=1/60) 出土遺物(S=1/4)

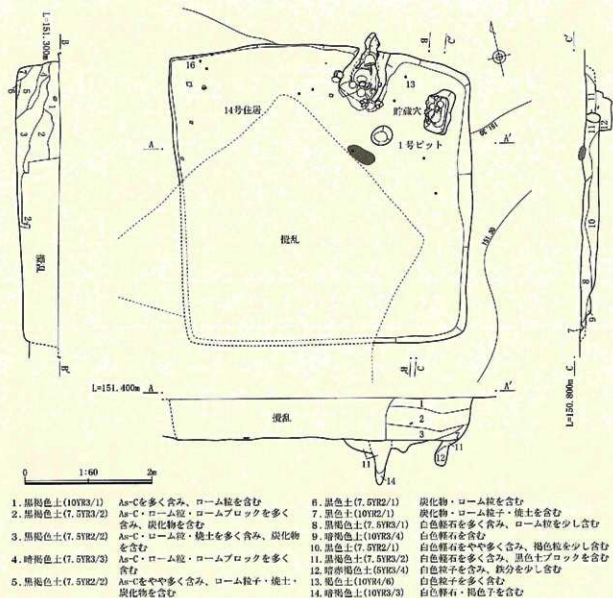
13号住居

調査区中央南端に存在する住居で、6号住居・1号炉に隣接する。住居の大半は調査区外であり、北東壁のみが確認できる。床面より炭化材・焼土が出土しており、焼失住居と考えられる。

残存する北東壁は4.18mを計測し、その平面的な傾きは隣接する6号住居とは異なるが、6.3m東に存在する20号住居に近い。

検出された部分を見る限り柱穴は確認されず、カマドの存在も不明である。貯蔵穴も確認されていない。

遺物は床面の調査区境界付近から短脚で外面に暗文を施した高坏の脚部(3)が出土し、覆土中からは内面に暗文を施した大型の内斜口縁の坏(1)と、同じく内面に暗文を施した内斜口縁の坏(2)が出土している。遺物から見た住居の年代は5世紀である。



第34図 14号住居平面図・断面図(S=1/60)

14号住居

調査区中央西寄りに存在する住居で、1号住居と重複し当住居のほうが新しい。住居の南西部分を近代の攪乱によって失っているが、北壁中央やや東寄りに設置されたカマドと、その東側の住居コーナー部分に掘られた貯蔵穴は、極めて良好な状態で残存している。

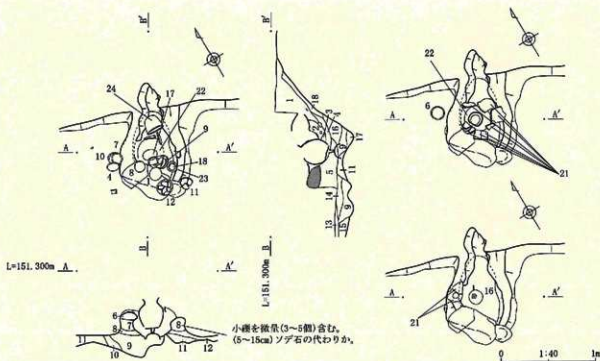
住居の規模は南北4.59m・東西4.74mのほぼ正方形で、床面の南西部分の大半を攪乱に削られているため、柱穴と推定されるビットは1基(1号ビット)のみである。1号ビットは住居床面より約70cm掘り込まれており、しっかり作られた4本柱の構造であったと推定される。

残存している北壁の方位を見ると、N-11°-Eで、わずかに東に傾いている。この傾きはやや遠い住居であるが、18m東に作られている4号住居に近い。ちなみに14号住居は北壁にカマドを設置しているが、4号住居は西壁にカマドを設置している。

カマドの主軸方位はN-30°-Eで住居の壁の傾きよりやや東に強く傾いている。

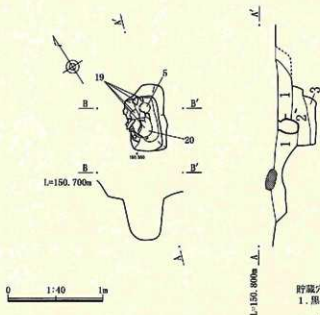
燃焼部中央には脚部先端を少し欠いている高坏(16)が支脚として設置され、その上に胴部が丸胴からわずかに長胴化の傾向を持ち、脚部下半から若干突起した形の底部を持つ甕(22)が口縁部まで残った形で残存していた。

カマド規模は、設置されている甕の口縁部の中心から住居の壁までの距離が44cmあり、更に28cm壁の外に煙道



1. 褐色土(10YR4/6) 黒色土小ブロックを含む
2. 褐色土(10YR4/6) 炭土粒をわずかに含む(天井部)
3. 暗褐色土(10YR3/4) 焼土粒・灰を多く含む
4. 凝土を主体とする層、炭化物を含む
5. 黒褐色土(10YR2/2) 焼土を含む
6. にぶい黄褐色土(10YR4/3)焼土ブロック・黒色土ブロックを含む
7. 褐色土(10YR4/6) ローム主体の層、焼土粒子を多く含む
8. 暗褐色土(7.5YR3/4) As-C、ローム粒子を含む
9. 黒褐色土(7.5YR2/1) TP・焼土を多く含む
10. 明黄褐色土(10YR6/6) 白色軽石を多く含む、鉄分を含む

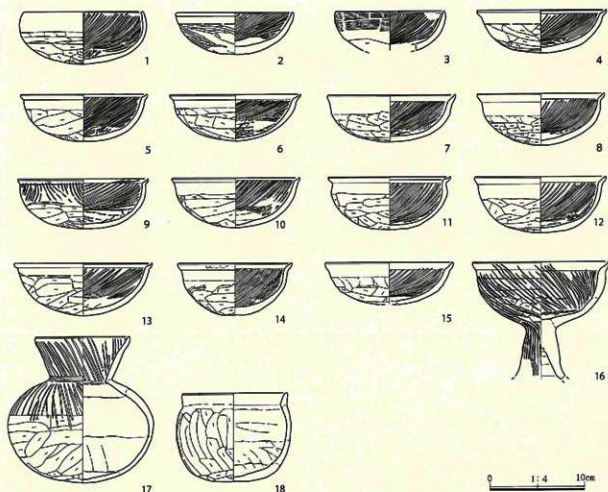
11. 褐色土(10YR4/6) 白色軽石・黒色土ブロックを含む
12. 黒褐色土(10YR3/2) 白色軽石を含み、ロームブロックを少し含む
13. 黒色土(10YR2/1) As-C、炭化物粒子を含む
14. 暗褐色土(10YR3/4) 白色軽石・ロームブロックをやや多く含む、焼土粒子を少し含む
15. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 白色軽石を含む
16. 暗褐色土(7.5YR3/4) 凝土・ローム粒を含み、白色軽石を少し含む
17. 黒褐色土(10YR3/2) ロームブロック・焼土を含む
18. 暗褐色土(7.5YR3/2) 焼土を含み、ローム粒子を少し含む



貯蔵穴

1. 黒褐色土(7.5YR3/2) 白色軽石を多く含む、黒色土ブロックを含む
2. 暗赤褐色土(5YR3/4) 白色粒子を含み、鉄分を少し含む
3. 褐色土(10YR4/6) 白色粒子を多く含む

第35図 14号住居カマド平面図・断面図(S=1/40) 貯蔵穴平面図・断面図(S=1/40)



第36図 14号住居出土土遺物①(S=1/4)

が突出している。袖の先端には袖石が設置されており、その間隔は52cm（内法32cm）で、袖石の住居内側の端部から甕の口縁中心までは40cmを計測する。すなわちカマドの焚口の内側端部から煙道の先まで、カマドの全長は1.12mで、燃焼部の最大幅は40cmである。また袖石の上には天井石が乗せられていた。

更にこの住居で特筆されるのは、カマド及びカマド東の貯蔵穴内より大量の遺物が出土したことである。

特にカマド内に設置された甕（22）の北に隣接した燃焼部と煙道の境付近から、倒れたような形で甕（24）が出土したことが注目される。

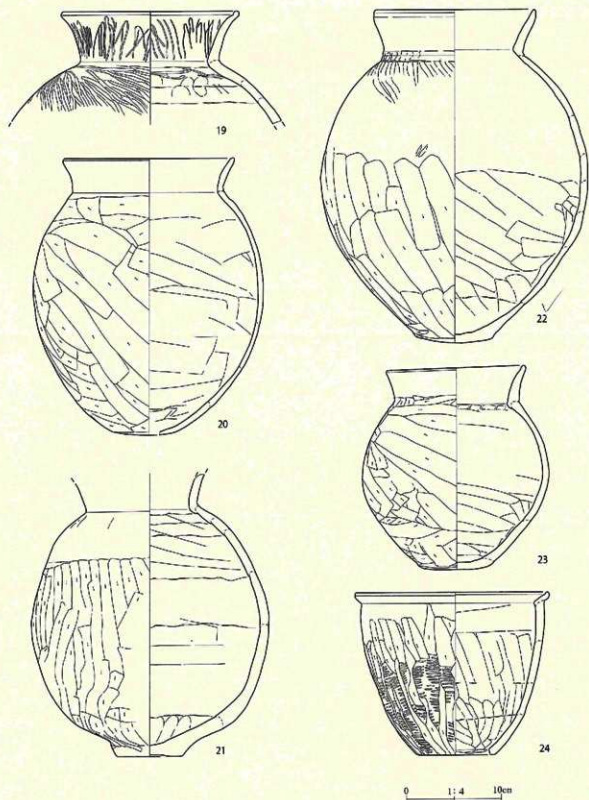
この甕は単孔で口縁部が若干反しており、胴部はややふくらみを持った形状を呈しているが、胴部外面に平行タタキ目が施されており、その後ヘラケズリ調整を行っている。日本国内で生産される土師器甕の作り方や若干異なっていることから、韓式系土器が韓式系土器の影響を強く受けた製品であることがわかる。群馬県内において完形品の韓式系土器が、使用状態あるいは使用状態に近い形で検出されるのは極めて稀なことである。

出土遺物を概観すると、土師器環には内湾口縁のもの（1～3）、内斜口縁のもの（4～15）があり、全てほぼ同じ大きさで大型の品は存在しない。いずれも内面に放射状暗文を施している。支脚の高坏（16）は坏部が内斜口縁で、内外面に暗文を施し、脚部外面にも暗文を施している。埴（17）は口縁部内外面及び胴部上縁に暗文を施す。

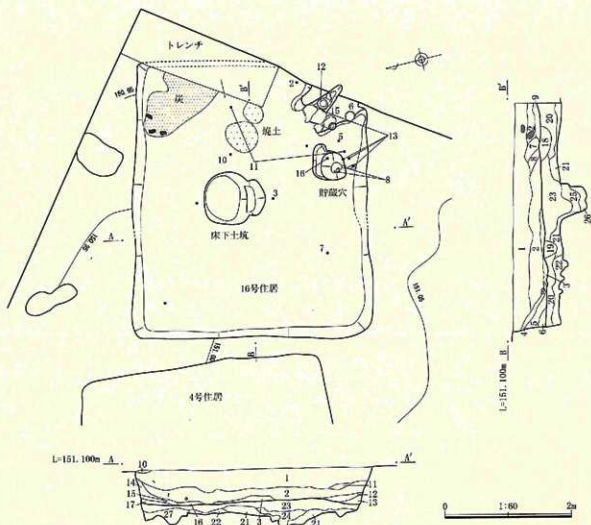
カマドに据えられていた甕（22）の上には、これを保護するように破砕した（21）が閉むように置かれていた。（22）と右袖の間にはやや小型の甕（23）の口縁に重ねるように小型甕（18）が乗せられていた。支脚は無かったが、2木掛けのカマドである。また天井石の上には土師器環（1・8・12）が伏せて置かれたような形で検出されている。

貯蔵穴からは坏（5）と口縁部内外面及び肩部に暗文を施し、口唇部がわずかに内湾する壺（19）と甕（20）が出土した。

出土した遺物から見て、5世紀前半から中葉にかけての住居であると考えられる。



第37図 14号住居出土遺物②(S=1/4)



- | | | | |
|--------------------|---------------------------|--------------------|-----------------------------|
| 1. 暗褐色土(10YR3/3) | As-Cを多く含み、ローム・焼土・炭化物を含む | 14. 赤褐色土(5YR4/6) | 焼土粒・焼土ブロックを非常に多く含み、炭化物を含む |
| 2. 黒褐色土(7.5YR3/2) | As-C・ローム粒を含み、炭土・炭化物を少し含む | 15. 暗褐色土(7.5YR3/3) | ローム・焼土・炭化物を少し含む |
| 3. 黒褐色土(7.5YR2/2) | 炭化物を多く含み、As-C・ローム粒を少し含む | 16. 暗赤褐色土(5YR3/4) | 焼土ブロック・焼土粒を多く含み、炭化物・ロームを含む |
| 4. 黒褐色土(5YR3/1) | 焼土を多く含み、As-C・ローム・炭化物を含む | 17. 黒褐色土(5YR3/1) | ローム粒・焼土を数粒含む |
| 5. 黒色土(7.5YR2/1) | As-Cをやや多く含み、焼土・炭化物・ロームを含む | 18. 暗褐色土(10YR3/4) | ローム粒・ロームブロックを多く含む |
| 6. 黒褐色土(5YR2/1) | As-C・ローム・焼土を含む | 19. 黒褐色土(7.5YR3/1) | 白色軽石を少し含む |
| 7. 暗褐色土(7.5YR3/8) | 焼土ブロック・焼土粒・炭化物を含む | 20. 暗褐色土(7.5YR3/3) | 白色軽石を多く含み、ローム粒を含む |
| 8. 暗褐色土(7.5YR3/3) | As-C・ロームを含み、炭土を少し含む | 21. 褐色土(10YR4/6) | 白色軽石を多く含む |
| 9. 暗褐色土(7.5YR3/4) | ローム・焼土・炭化物を含む | 22. 黄褐色土(10YR5/8) | 白色軽石をやや多く含む |
| 10. 暗褐色土(7.5YR3/3) | As-Cを多く含み、FAを含む | 23. 黒褐色土(10YR3/2) | 白色軽石を多く含む |
| 11. 黒褐色土(7.5YR3/1) | ローム・As-Cを含み、炭土を少し含む | 24. 暗褐色土(10YR3/4) | 白色軽石・ローム粒を多く含む |
| 12. 黒褐色土(7.5YR2/2) | ローム・炭化物・焼土を含む | 25. 暗褐色土(7.5YR3/3) | 白色軽石をやや多く含む、ロームブロック・ローム粒を含む |
| 13. 暗褐色土(10YR3/4) | ローム・焼土を含み、焼土層を含む | 26. 暗褐色土(7.5YR3/4) | ローム粒を少し含む |
| | | 27. 黄褐色土(10YR7/8) | ロームブロック・白色軽石を多く含む |

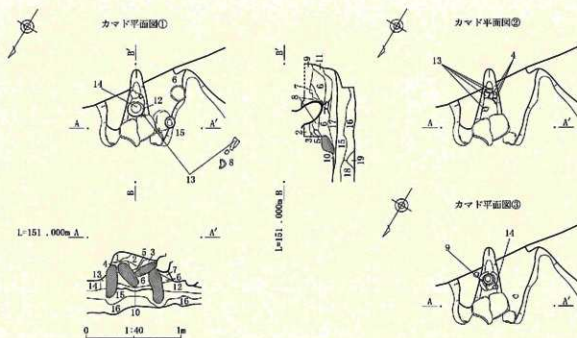
第38図 16号住居平面図・断面図(S=1/60)

16号住居

調査区北西端で検出された住居で北東壁が調査区外にあるため不明であるが、他の部分はほぼ完全な形で残っている。北東壁と南東壁のコーナー部分にカマドが作られているいわゆる隅カマドの住居である。

住居の壁の方位はN-103°-Eで、推定される北東壁の位置から割り出した東西壁の間隔は4.35m、残存している南北壁間は3.72mを計測する、若干東西間の長い隅丸方形を呈している。

掘り方を見ると、住居中央部分に床下土坑を設置しているが、土坑以外の掘り方底の上に約30cm土を盛ってつき固めて貼り床としている。



1. 黒褐色土(7.5YR3/2) しまり・粘性あり。焼土ブロック(φ0.2~0.5cm)をやや多く含む、As-Cを少し含む
2. 黒褐色土(5YR3/1) しまりやや強く、粘性あり。焼土粒・焼土ブロック(φ0.2cm)を含む、As-Cを少し含む
3. 赤褐色土(2.5YR4/8) しまり強く、粘性強い焼土層(天井部)
4. 明赤褐色土(10YR6/6) しまり・粘性強いローム層(カマド材)
5. 暗赤褐色土(5YR3/4) しまり・粘性弱く、焼土を非常に多く含む
6. 黒褐色土(7.5YR3/2) しまり・粘性があり、焼土を多く含む、ロームブロック(φ0.2cm)を少し含む
7. 黒褐色土(5YR2/1) しまり・粘性があり、焼土・ローム粒・ロームブロック(φ0.5cm)を含む
8. 赤褐色土(5YR4/8) しまりはややあるが、粘性強い。焼土・灰を非常に多く含む
9. 赤褐色土(5YR2/1) しまり強く粘性ややあり。焼土・焼土ブロック(φ0.2~0.5cm)を少し含む
10. 暗赤褐色土(5YR3/4) しまり強く粘性なし。焼土・灰を多く含む
11. 赤褐色土(2.5YR4/8) しまり強く粘性強い。焼土層
12. 暗褐色土(7.5YR3/4) しまり強く粘性ややあり。ロームブロック(φ0.3cm)・黒色土ブロックを含む(下面住居層)
13. 暗褐色土(10YR2/3) しまり・粘性あり。ローム粒・ロームブロック(φ0.5cm)を含む、焼土を少し含む
14. 暗褐色土(10YR3/4) しまり・粘性あり。ローム粒・焼土をやや多く含む
15. 黒褐色土(5YR3/1) しまりやや強く粘性強い。灰を含む
16. 暗褐色土(7.5YR3/4) しまり強く粘性あり。白色礫石を多く含む
17. 明赤褐色土(5YR5/8) しまりややあるが、粘性弱い。焼土層(灰)
18. 黒褐色土(7.5YR3/1) しまり・粘性あり。ローム粒・白色礫石を含む
19. 暗褐色土(10YR3/4) しまり・粘性あり。ロームブロック(φ1.0~3.0cm)を多く含む

第39図 16号住居カマド平面図・断面図(S=1/40)

住居の南東コーナー部分に作られたカマドは主軸方位がN-130°-Eで、住居の対角線の軸よりも少し北へ向かって開口している。袖の住居内側先端部には礎石があり、その上に天井石が乗せられていたが、中心で半分に割れ焚口部分に落下している。

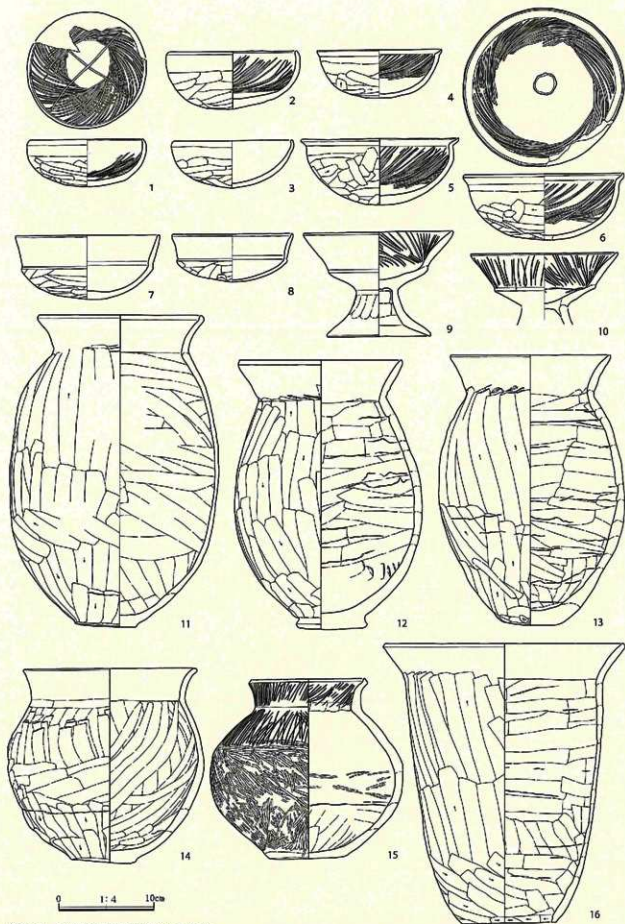
燃焼部中央には土師器甕(12)が焚口方面に若干倒れるような形で検出され、周囲にはその甕を支えるように甕(14)の破片が多く假かされていた。支脚は検出されなかった。

カマド右袖上には外面及び内縁部内外面に暗文を持つ土師器壺(15)が出土しており、更にその奥の壁際には内斜口縁の大型土師器杯(6)が置かれていた。この杯は体部内面に放射状暗文を施しており、見込み中央部に円形の穴が故意に開けられていた。甕のように使用されたのであろうか。

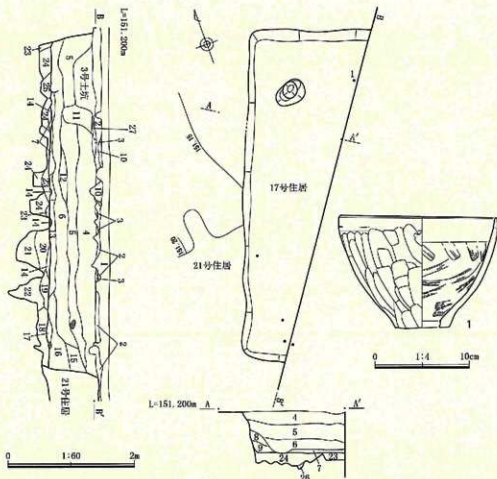
カマドの焚口右脇には貯蔵穴が掘られており、貯蔵穴内からは模倣杯(8)と甕(13)が出土している。

出土遺物を概観すると、内湾口縁の杯は3点(1~3)実測可能であったが、(1・2)は内面に放射状暗文を施し、更に(1)は見込みに「X」字の暗文を入れている。内斜口縁の杯には小型のもの(4)と大型のもの(5・6)があり、いずれも内面に放射状暗文を施している。高杯は短脚で、杯部内面にのみ暗文を施すもの(9)と、内外面に施すもの(10)に分けられる。

甕(11~13)は他の住居と比較して長胴化が少し進んでいるが、やや小型の甕(14)は丸胴である。また大型で短口の甕を伴っている。出土した遺物から見て5世紀後半代の住居であろう。



第40図 16号住居出土遺物(S=1/4)



- | | |
|---|--|
| <p>1. 黒褐色土(10YR3/2) As-Cを多く含み、ローム粒を微量含む</p> <p>2. 灰黄褐色土(10YR4/2)As-C・ローム粒・炭化物を少し含む</p> <p>3. に近い黄褐色土(10YR4/3)As-Cをやや多く含み、ロームを少し含む</p> <p>4. 黒褐色土(10YR3/1) As-Cを多く含み、ローム・炭化物を少し含む</p> <p>5. 黒褐色土(7.5YR2/2) As-Cをやや多く含み、ローム粒・ロームブロックを含み、炭化物を微量含む</p> <p>6. 暗褐色土(7.5YR2/3)ローム粒・ロームブロック・As-Cを含み、焼土・炭化物を少し含む</p> <p>7. 黒色土(7.5YR2/1) 焼土・炭化物を含み、ローム・As-Cを少し含む</p> <p>8. 黒褐色土(7.5YR3/1) As-C・ローム粒・焼土を少し含む</p> <p>9. 黒褐色土(5YR2/1) ローム・As-Cを少し含む、焼土を微量含む</p> <p>10. 黒褐色土(7.5YR3/2) As-Cを含み、炭化物を微量含む</p> <p>11. 黒褐色土(10YR3/2) As-Cをやや多く含み、ローム粒を少し含む</p> <p>12. 黒褐色土(7.5YR2/2) ローム粒をやや多く含み、ロームブロックを少し含む</p> <p>13. 黒褐色土(5YR2/1) As-Cを含み、焼土・炭化物・ロームを少し含む</p> <p>14. 褐色土(7.5YR4/6) ローム粒・ロームブロックを多く含む</p> <p>15. 暗褐色土(10YR3/3) ロームを多く含み、As-C・炭化物を含む</p> | <p>16. 黒褐色土(10YR3/1) ローム・As-Cを含み、炭化物を少し含む</p> <p>17. 明赤褐色土(5YR5/8) 焼土層</p> <p>18. 褐色土(10YR4/6) ローム粒を多く含み、ロームブロックを含む</p> <p>19. 暗褐色土(7.5YR3/3) ロームブロックを含み、白色軽石・ローム粒を少し含む</p> <p>20. 褐色土(10YR4/4) 白色軽石・ローム粒を多く含み、ロームブロックを少し含む</p> <p>21. 暗褐色土(7.5YR3/4) 白色軽石を含み、ロームブロック・ローム粒を微量含む</p> <p>22. オリブ褐色土(2.5Y) 白色軽石・ロー多く含み、黒色土ブロック・粘土ブロックを少し含む</p> <p>23. 黒褐色土(7.5YR3/2) ローム粒を多く含み、ロームブロック・白色軽石を含む</p> <p>24. 暗褐色土(7.5YR3/4) 白色軽石を含み、黒色土ブロックを少し含む</p> <p>25. 黄褐色土(10YR5/8) ロームブロックを多く含み、ローム粒・白色粒を含み、黒色土ブロックを少し含む</p> <p>26. 褐色土(10YR4/4) 白色軽石・ローム粒を少し含む</p> <p>27. 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒・As-Cを少し含む</p> |
|---|--|

第41図 17号住居平面図・断面図(S=1/60 出土遺物実測図(S=1/4)

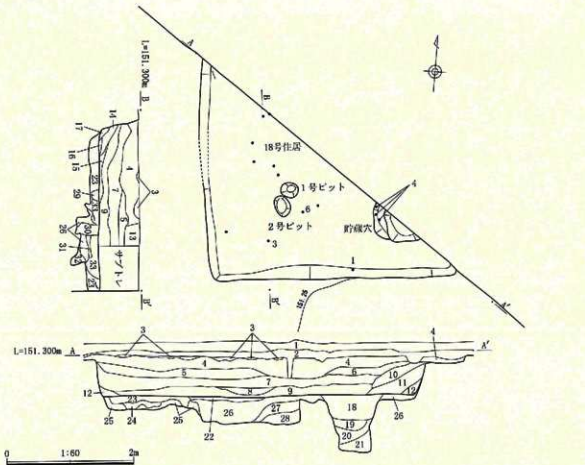
17号住居

調査区南東端に存在する住居で、21号住居と重複関係にあり当住居のほうが新しい。住居の大半は調査区東壁の外にあるため規模を確定しにくい、残存している北西壁が6.00mあるので、1辺6m前後の方形住居であったと推定される。

柱穴と推定されるピットが北西壁と北東壁のコーナー付近に存在し、掘り方底から18～20cm土を盛り上げて床面としている。

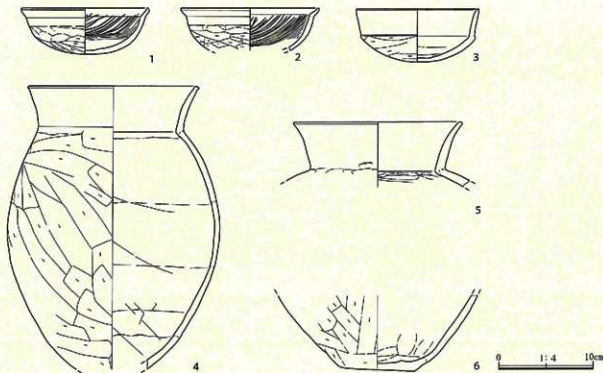
実測し得た遺物は土師器瓶(1)1点のみで調査区の境界付近の床面から出土した。瓶は単孔でやや小型の製品であり、底部から緩やかに内湾しながら口縁部に至っている。口縁部は直立気味である。

遺物の点数が少ないため住居の時期を確定するのは困難であるが、古墳時代中期5世紀代の遺構であると推定される。



- | | | | |
|--------------------|---------------------------------------|--------------------|---------------------------------|
| 1. 黒褐色土(10YR3/2) | As-Cを多く含む。鉄分をまばらに含む | 17. 暗褐色土(7.5YR3/4) | ローム粒・As-Cを含む。焼土粒を微量含む |
| 2. 灰黄褐色土(10YR4/2) | As-Cを多く含む。ローム粒・焼土・炭化物を少し含む | 18. 黒褐色土(7.5YR3/1) | ローム粒子をやや多く含む。As-C・焼土を少し含む |
| 3. 暗褐色土(10YR3/3) | FAを多く含む。As-Cを含む | 19. 暗褐色土(10YR3/4) | ローム粒・ロームブロックを少し含む |
| 4. 暗褐色土(7.5YR3/3) | As-Cを多く含む。ローム粒・FA・炭化物を少し含む | 20. 黒褐色土(10YR3/1) | ローム粒を少し含む |
| 5. 黒褐色土(7.5YR3/2) | As-C・ローム粒・焼土を含む。炭化物を少し含む | 21. 黒褐色土(7.5YR3/1) | ローム粒を少し含む |
| 6. 暗褐色土(10YR3/4) | As-Cをやや多く含む。ロームブロック・ローム粒を含む。炭化物・焼土を含む | 22. 明黄褐色土(10YR6/8) | ローム粒・ロームブロックを多く含む(貼床) |
| 7. 暗褐色土(7.5YR3/3) | ローム粒・ロームブロックを多く含む。As-Cを含む | 23. 暗褐色土(7.5YR3/4) | ローム粒・ロームブロックを多く含む。白色軽石・炭化物を少し含む |
| 8. 黒褐色土(10YR2/2) | As-C・ローム粒を含む。ロームブロック・焼土・炭化物を含む | 24. 黒褐色土(7.5YR3/2) | 白色軽石を多く含む。ローム粒を少し含む |
| 9. 黒褐色土(7.5YR2/2) | ローム粒を多く含む。焼土・As-Cを少量含む | 25. 褐色土(10YR4/6) | ロームを主体とする層 |
| 10. 暗褐色土(10YR3/4) | 焼土を多く含む。As-C・ローム・炭化物を含む | 26. 暗褐色土(10YR3/4) | ローム粒・ロームブロックを多く含む。白色軽石を含む |
| 11. 黒褐色土(7.5YR3/1) | As-Cを多く含む。ローム粒・炭化物を含む | 27. 暗褐色土(7.5YR3/3) | ローム粒・ロームブロックを多く含む。白色軽石を少し含む |
| 12. 黒褐色土(10YR2/2) | As-C・ローム粒・焼土を少し含む | 28. 黒褐色土(5YR3/1) | ローム粒・白色軽石を少し含む |
| 13. 暗褐色土(10YR3/4) | As-Cを多く含む。焼土・FAを含む | 29. 暗褐色土(10YR3/3) | ローム粒を多く含む |
| 14. 暗褐色土(7.5YR3/3) | ロームブロックをやや多く含む。ローム粒・As-C・炭化物・焼土を少し含む | 30. 黒褐色土(10YR3/1) | ローム粒を多く含む。白色軽石・ロームブロックを少し含む |
| 15. 黒色土(7.5YR2/1) | As-C・ローム粒・焼土を含む | 31. 黒色土(7.5YR2/1) | 白色軽石を少し含む |
| 16. 暗褐色土(10YR3/3) | ローム粒を多く含む | 32. 暗褐色土(7.5YR3/1) | ローム粒を少し含む。ロームブロックを含む |
| | | 33. 暗褐色土(10YR3/3) | ロームブロック・ローム粒を多く含む。As-Cを含む |

第42図 18号住居平面図・断面図(S=1/60)



第43図 18号住居出土遺物(S=1/4)

18号住居

調査区北壁の中央やや西寄り存在する住居で、住居の北壁と東壁は完全に調査区外にあり、西壁も調査区の外にあるため住居の規模を確認することが難しい。南壁は調査区北壁の手前でわずかに北へ曲がるような兆候を示しているため、コーナー部分である可能性が高く、恐らくここから住居の壁の長さを確定することができるであろう。残存している西壁の長さは1.74m、南壁は2.40mあり、1辺3m前後の方形のプランと考えられる。

住居床面を見ると、南西コーナー部分の内側に、柱穴と考えられるピットが2基検出されている。また住居の南東コーナーと予想される地点に、平面が隅丸方形で底が平坦な土坑が掘られている。これは形状や掘削された位置から見て貯蔵穴であると考えられる。床面における土坑の大きさは1辺が48cm前後の方形で、深さは90cmあり、底では床面のプランより若干小さくなって1辺40cmの方形を呈している。この土坑が貯蔵穴だとすれば、検出はされていないが、東壁にカマドを設置した住居であることが予想される。

遺物は内斜口縁を持ち、内面に放射状暗文を施した坏（1・2）と模倣坏（3）、やや長胴化が進んだ甕（4・5・6）が出土している。出土した遺物から見て、5世紀後半代の住居であろう。

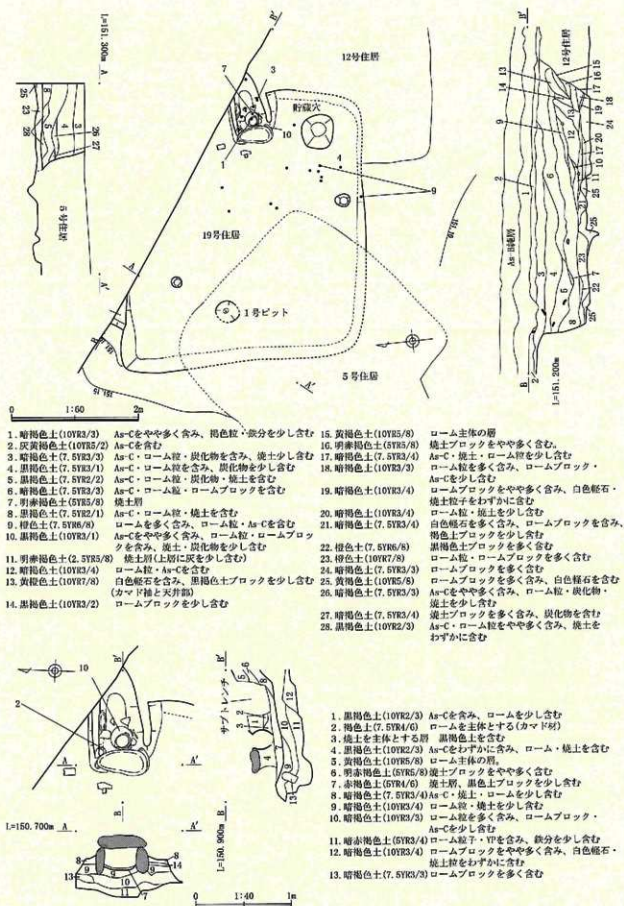
19号住居

調査区北壁中央に存在する住居で、5号住居・12号住居と重複し、5号住居より古く、12号住居より新しい。

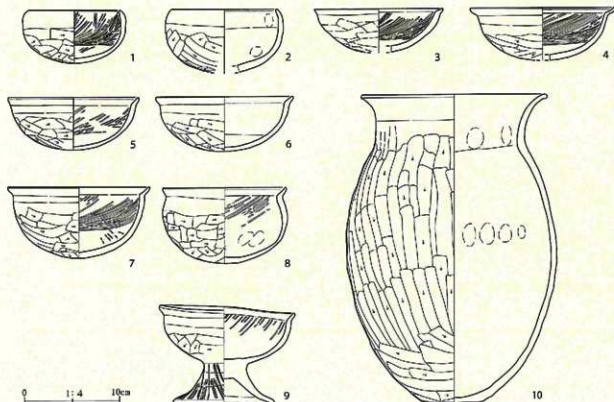
東壁の北半と北壁の大部分が調査区外にあるため住居の規模が確認しにくいだが、残存部分を測定してみると、南北3.78m、東西4.08mの方形プランであったことが分かる。東壁中央やや西寄りにカマドが設置され、カマド右袖脇には貯蔵穴が掘られている。床面からピットは検出されているが、柱穴と認定できる位置では無い。

カマドは主軸方位がN-83°-Eで住居の壁の角度よりも少し変えて設置されている。袖には左右2個袖石が据えられており、天井石が残り、やや長胴気味の土師器甕（10）が据えられていた。また、甕（10）の下からは支脚として高坏（9）が上下逆向きに置かれていた。これは短脚で内斜口縁の坏部を持ち、坏部内面と脚部外面に暗文を施している。

他の遺物として内斜・内湾口縁の坏が多く出土（1～8）しており、内湾口縁（2）・内斜口縁（6）以外は内面に放射状暗文を施している。模倣坏は無く、5世紀中葉の住居であろう。



第44図 19号住居平面図・断面図(S=1/60) カマド平面図・断面図(S=1/40)



第45図 19号住居出土遺物(S=1/4)

20号住居

調査区中央南東寄り存在する住居で、縄文時代の25号住居及び古墳時代前期の24号住居、更に古墳時代中期の23号住居と重複し、当住居の方が新しい。また22号住居は当住居の南西に近接しているが重複関係は無い。

住居の南西コーナー部分周辺は調査区外にあるため確認することができなかった。住居の残存部分の壁を計測してみると、南北4.50m、東西4.68mのほぼ正方形を呈していることが分かり、壁の掘削方向から見た住居の主軸方向はN-119°-Wである。

住居の床面には炭化物・炭化材・焼土が広く分布しており、焼失住居であったと推定される。

住居の南壁中央部分にカマドを設置している。当遺跡内で南壁にカマドを設置している住居は20号住居の他には5号住居と、可能性を考えれば23号住居の2軒のみであり、どの方向から住居に出入りするかなどを考慮してみれば、少数派であると言えることができる。

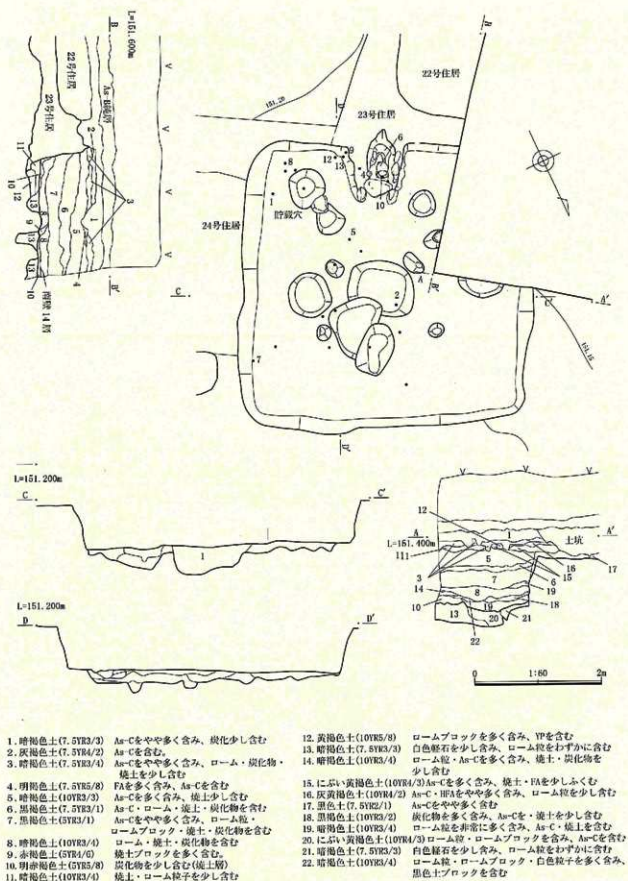
カマドの主軸方位はN-116°-Wで、壁の方位に沿った形でカマドを設置していることが分かる。

袖には複製の石を入れて袖石としており、焚口部分には天井石も残存していた。

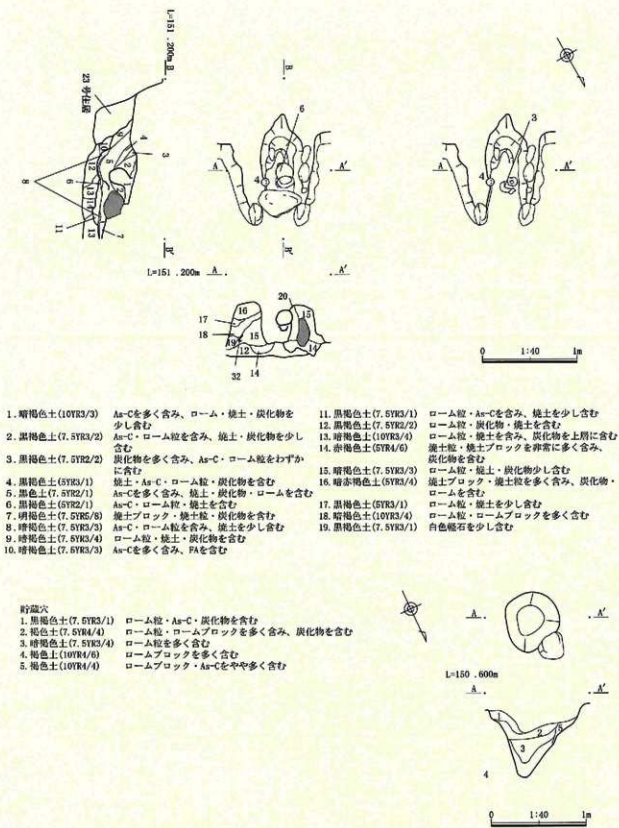
天井石の奥には土師器壺(6)が口縁部を焚口側にして倒れるような形で出土している。壺(6)を取り上げた下からは、短脚でL字型に口縁部が広がる高坏(3)が口縁部を下にして、置かれて、更にその隣には(3)によく似た形の高坏(4)がやはり口縁部を下にして置かれていた。(3)は口縁部内外面に暗文を施しているが、(4)はナデ調整のみである。また両方とも脚部には暗文が見られない。高坏が置かれた位置を見ると燃焼部中央のラインより右と左に、燃焼部を分けるような形で配置されていることから、それぞれ支脚として利用していたと考えることができ、壺2本掛けのカマドとして利用されていたのであろう。

貯蔵穴はカマド左袖の脇にあり、径48cmのやや崩れた円形で、深さは床面から76cmを計測する。断面は逆三角形状を呈し、底がややすばまっている。

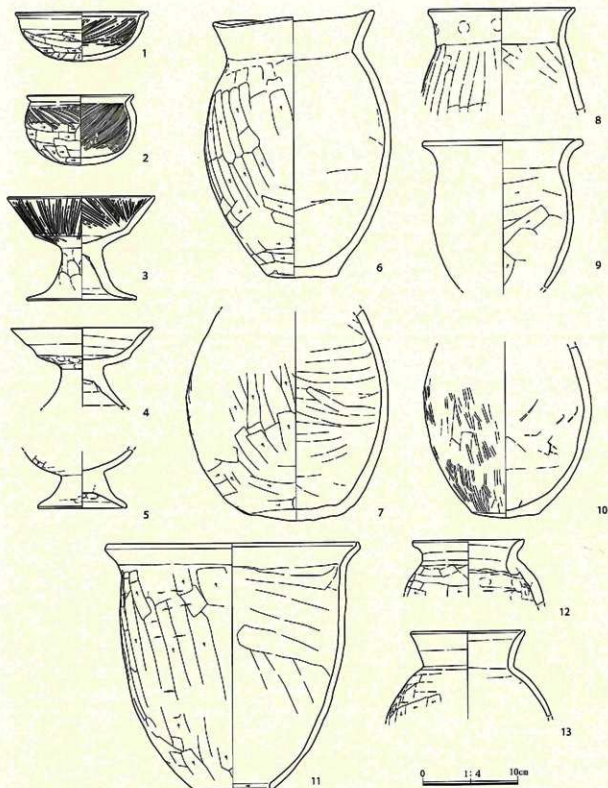
他の遺物を見ると、内斜口縁の坏は浅いものと丸胴状で深いものの2種があり、双方とも内面に放射状暗文を施している。壺はカマドに掛かっていた(6)は平底気味で、やや長胴化が始まった形態を呈しており、単孔で、やや膨らみ気味に胴部が立ち上がる甌を伴っている。遺物から見て5世紀中葉の住居であろう。



第46図 20号住居平面図・断面図(S=1/60)



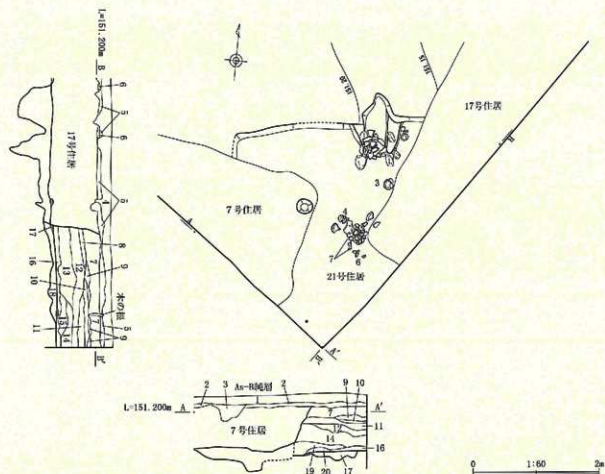
第47図 20号住居カマダ・貯蔵穴平面図・断面図(S=1/40)



第48図 20号住居出土遺物(S=1/4)

21号住居

調査区南東コーナー部分に存在する住居で、7号住居・17号住居と重複関係にあり、当住居が一番古い。東壁及び南壁は調査区外にあるため確認できなかった。また北壁の東半と西壁の大部分はそれぞれ17号住居及び7号住居に破壊されており、住居の規模を示すデータは得られなかった。カマド西脇の、最も残存している部分の南北長が3.54mを計測していることから、一辺3mを超える規模の住居であったと考えられる。



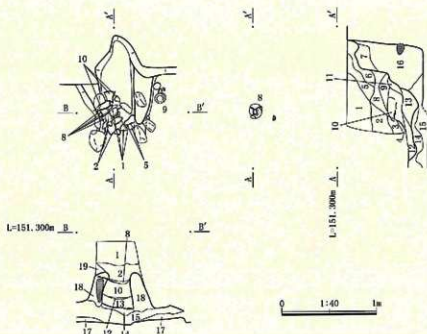
1. 黒褐色土(10YR3/2) As-Cを多く含む。
2. 暗褐色土(7.5YR2/3) As-Cを多く含む、ローム粒を少し含む
3. 黒褐色土(7.5YR2/2) As-Cを多く含む、ローム粒・炭化物を少し含む
4. 黒褐色土(10YR3/2) As-Cを多く含む、ローム粒を幾分か含む
5. 灰黄褐色土(10YR4/2) As-C、ローム粒、炭化物を少し含む
6. 濃い黄褐色土(10YR4/3) As-Cをやや多く含む、ローム粒子少し含む
7. 暗褐色土(7.5YR2/3) As-Cを多く含む、炭化物・焼土・ローム粒を含む
8. 黒褐色土(7.5YR2/2) As-Cを含み、焼土ブロック・炭化物・ローム粒を少し含む
9. 黒褐色土(7.5YR3/2) As-Cを含み、ロームブロック・炭化物を少し含む
10. 黒褐色土(7.5YR3/1) As-Cを少し含む、焼土・炭化物をわずかに含む
11. 暗褐色土(7.5YR3/4) ロームブロック・As-Cを多く含む
12. 黒褐色土(5YR3/1) ローム粒子・As-Cを多く含む、ロームブロック・焼土を少し含む
13. 黒褐色土(10YR3/2) As-C・ロームブロックをやや多く含む、ローム粒を含み、暗褐色土ブロックを少し含む
14. 暗褐色土(7.5YR3/3) As-Cを含み、ローム粒・ロームブロック・黒褐色土ブロックを少し含む
15. 暗褐色土(7.5YR2/3) As-C・ローム粒を少し含む、炭化物をわずかに含む
16. 暗褐色土(7.5YR3/3) ローム粒・As-Cを少し含む、炭化物・焼土・粒土ブロックをわずかに含む
17. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒・IPを含む。(掘り方)
18. 褐色土(10YR4/6) ローム粒子・ロームブロック・黒褐色土ブロックを多く含む、白色軽石を含み、焼土をわずかに含む(掘り方)
19. 暗褐色土(7.5YR3/3) ローム粒子を少し含む。
20. 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒を多く含む、白色軽石を少し含む

第49図 21号住居平面図・断面図(S= 1/60)

カマドは北壁に設置されているが、左袖から住居コーナーにかけて貯蔵穴が存在しないことから、右袖脇に掘られていたものと推定される。またカマドの中心軸のラインが住居西壁より2.28mであることから、北壁にカマドの設置されている東西の位置は、住居の中心よりも東寄りであったことが予想される。

住居壁の傾きから見た主軸方位は、N-5°-Wであり、ほぼ南北方向であったことが分かる。

カマドの主軸はN-3°-Wで、住居壁の傾きとほとんど変わらない。袖の構造を見ると、焚口側の先端部だけでなく、袖と壁の間にも袖石を入れて構築されており、更にこの2石の間を外側から押さえ込むように1対の袖石が据えられており、計6石確認されている。天井石及びカマドで使用されていた壺は、使用時の位置に残



- | | |
|---|--|
| 1. 黒褐色土(5YR2/1) As-Cを多く含む、ローム粒を少し含む | 13. 黒褐色土(7.5YR3/2) ローム粒・凝土・As-Cを少し含む |
| 2. 暗褐色土(7.5YR3/4) As-C・ローム粒を含み、焼土を少し含む | 14. 暗褐色土(7.5YR3/4) As-Cを含み、ローム粒・焼土粒を少し含む |
| 3. 明褐色土(7.5YR5/6) ローム粒・ロームブロックをやや多く含む、凝土粒・As-C・炭化物を少し含む | 15. 暗褐色土(10YR3/4) As-Cを含み、ローム粒・ロームブロックを少し含む |
| 4. 褐色土(7.5YR4/4) ローム粒を含み、炭化物を少し含む | 16. 暗褐色土(7.5YR3/3) As-Cをやや多く含む、ローム粒・ロームブロックを少し含む |
| 5. 褐色土(10YR4/4) ローム・黒褐色土の凝土(天井部)を少し含む | 17. 黒褐色土(5YR3/1) As-C・ローム粒を含み、ロームブロックを少し含む |
| 6. 黒褐色土(10YR2/3) 褐色土を含む | 18. 明黄褐色土(10YR5/8) ロームを主体とする層(袖部) |
| 7. 黒褐色土(10YR2/2) As-Cを含む(地山) | 19. 黒褐色土(7.5YR3/2) ローム粒・ロームブロックを含み、As-Cを少し含む |
| 8. 黒褐色土(10YR2/2) ロームブロックを少し含む | |
| 9. 褐色土(10YR4/6) ロームと黒褐色土の凝土(天井部) | |
| 10. 黒褐色土(10YR2/2) 凝土を多く含む | |
| 11. 黒褐色土(10YR2/2) 凝土をわずかに含む。 | |
| 12. 明赤褐色土(5YR5/6) 灰を少し含む(凝土層) | |

第50図 21号住居カマド平面図・断面図(S=1/40)

存していなかった。

カマドの内側燃焼部周辺からは、内斜口縁で内面に放射状暗文を施す土師器環(1・2)と直立的な環部と内外輪部から裾広がり底部を持つ高環(5)、やや長胴化の進んだ甕(8)と丸胴気味の甕(10)が出土している。なお、高環(5)は環部内外面と脚部外面に暗文を施している。

またカマド右袖の手前には内斜口縁の環が、更に住居中央部付近の床面からは、土師器甕(7)が上から潰されたような形で出土しており、その周囲から小型甕(4)と長脚高環の脚部(6)が出土した。この長脚高環の脚部は、軸の部分はヘラケズリ調整のみであるが、椗状に広がった最下部は、外面にのみ暗文を施している。模倣環・須恵器は出土していない。

出土した遺物から見て、住居の年代は5世紀中葉であると考えられる。

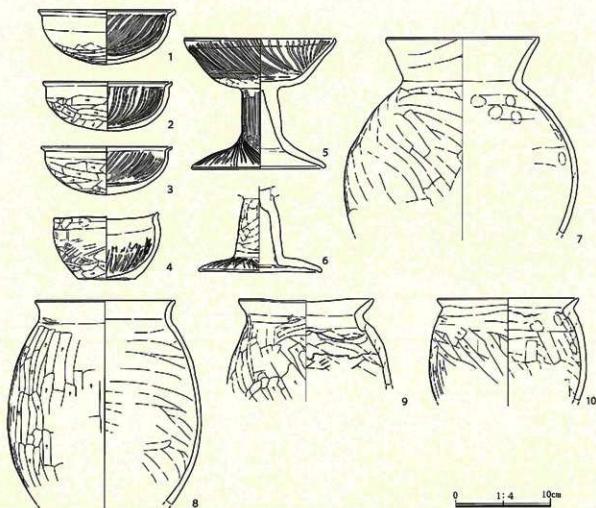
22号住居

調査区南東部に存在する住居で、23号住居と重複関係にあり、当住居の方が新しい。

22号住居周辺は、当遺跡の中では比較的住居が重複して作られている地点であるが、住居の南壁と東壁の一部、更に北壁の大半と西壁の全てが調査区外にあったため、住居の規模を確認することができなかった。そのため調査区南西部分を若干掘り広げて南東コーナー部分を検出し、住居の東壁の長さを知ることができた。

南北壁間の距離計は3.78mを計測し、カマド及び柱穴は確認されなかった。

出土した遺物の中で、滑石製剣(1)は、他の遺物と比較して時期が違いすぎるので、混入遺物と考えられる。(2～5)は、還元炎焼成の須恵器で、(2)は高台を持ち(3～5)は底部回転車切り後無調整である。(6)



第51図 21号住居出土遺物(S=1/4)

は小片で検出された坏で、口唇部先端と底部を失っているが、他の遺物と比較すると若干古い様相を示している。

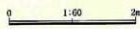
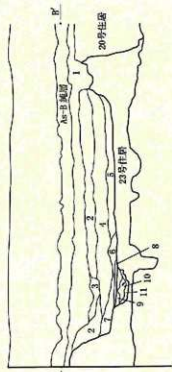
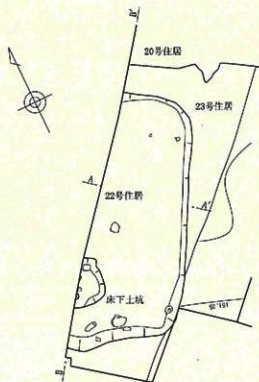
(2) から (5) の酸化炎焼成の坏が遺構の時期を示していると思われ、10世紀台の遺構であると考えられる。

23号住居

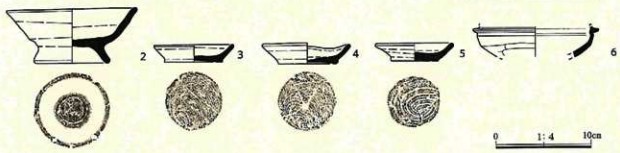
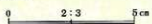
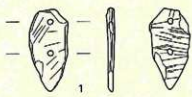
調査区南東部で検出された住居で、20号・21号住居と重複関係にあり、当住居が一番古い。住居の上半は22号住居に削平されており更に住居の南側・北側の大部分は調査区外に存在するため、遺構の規模を確認することができない。柱穴・カマドは確認できなかったが、調査区の南端部分で床下土坑と推定される穴が検出されていることから、南カマドであった可能性もある。また、炭化材・焼土が見られることから、焼失住居と考えられる。

遺物は貯蔵穴と推定される土坑の周囲から大量に出土しており、この周囲にはカマドで使用したと推定される大型の礫が数点見られる。土師器坏は12点検出され、その全てが内斜口縁を持ち、大半が内面に放射状暗文を施している。

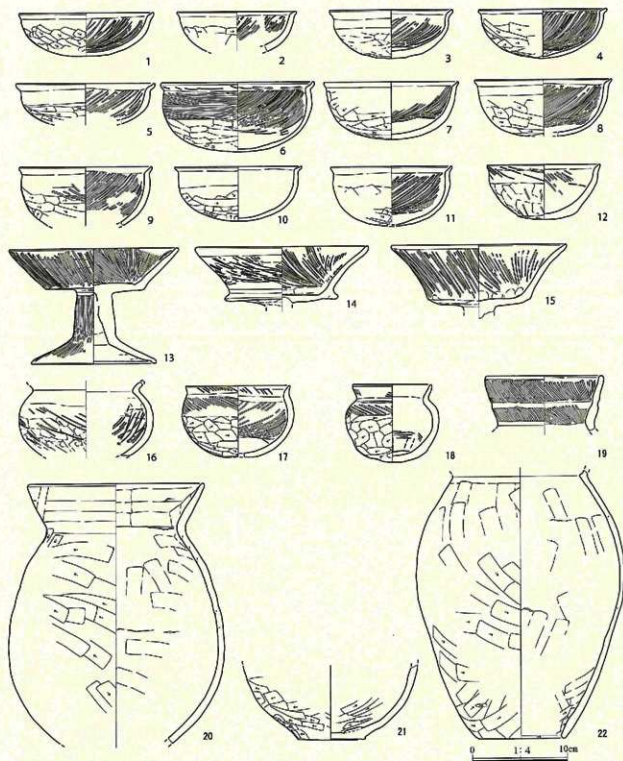
高坏は長脚で坏部口縁が直線的に外反するもの(13)と一旦内湾して口唇部が外反するもの(14・15)に分けられるが、特に後者の(14)は坏部の立ち上がり部分に隆帯で突起を表現している。小型甕(16～18)は内外面に暗文を施しており、口縁部のみであるが内外面2段に暗文を施した埴と考えられる土師器も出土している。甕は長胴化がさほど進んでいない(20)。出土した遺物から、5世紀前半代の遺構であると考えられる。



1. 暗褐色土 (7.5YR3/3) As-Cをやや多く含む、炭化物を少し含む
2. 黒褐色土 (7.5YR3/2) As-Cをやや多く含む、ローム粒をわずかに含む
3. 灰褐色土 (7.5YR4/2) As-C・ローム粒・炭化物を少し含む
4. 暗褐色土 (10YR3/3) As-Cを含み、ローム粒・焼土を少し含む、炭化物をわずかに含む
5. 暗褐色土 (10YR3/4) As-Cを含み、ローム粒・焼土・炭化物を少し含む
焼土を多く含む、As-C・ローム粒を含む
6. 黒褐色土 (7.5YR3/1) As-C・ローム粒を少し含む、炭化物を微量含む
7. 暗褐色土 (10YR3/3) As-C・ローム粒を少し含む、炭化物を微量含む
ロームブロック・As-Cを多く含む、焼土・粘土ブロックをわずかに含む
8. 黒褐色土 (7.5YR3/1) As-C・ローム粒を多く含む、焼土・炭化物を微量含む
ローム粒・ロームブロックを多く含む、焼土を含み、As-C・炭化物を少し含む
9. 暗褐色土 (7.5YR3/4) As-C・ローム粒を多く含む、焼土・炭化物を微量含む
ローム粒・ロームブロックを多く含む、焼土を含み、As-C・炭化物を少し含む
10. 褐色土 (10YR4/4) As-C・炭化物を少し含む
11. 灰褐色土 (7.5YR6/2) As-C・焼土を少し含む(粘土層)



第52図 22号住居平面図・断面図(S=1/60) 出土遺物(S=1/4)



第54図 23号住居出土遺物(S=1/4)

4. 浅間B軽石 (As-B) 下の遺構

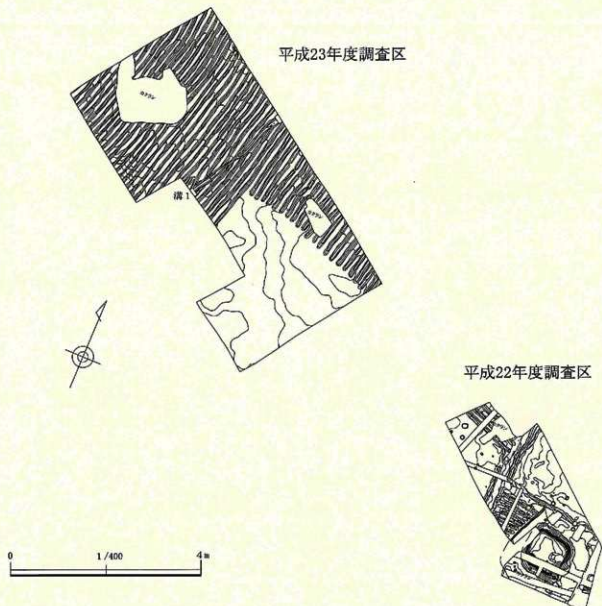
当遺跡では、現地表面から50cm程度掘り下げると、As-Bの層に当たる。As-Bは調査区内全域から検出された。As-Bの厚みは平均して30cm程度、厚い部分では40cmを越す所もあり、高崎市街地に残存している平均的なAs-Bの数倍から十倍近い厚さである。

畝の上端は、土圧の影響も考えられるが概ね平坦であり、畝の頂部と畝間の底との差は、平均して3cm程度であり、高低差がある所でも5cmから8cmである。

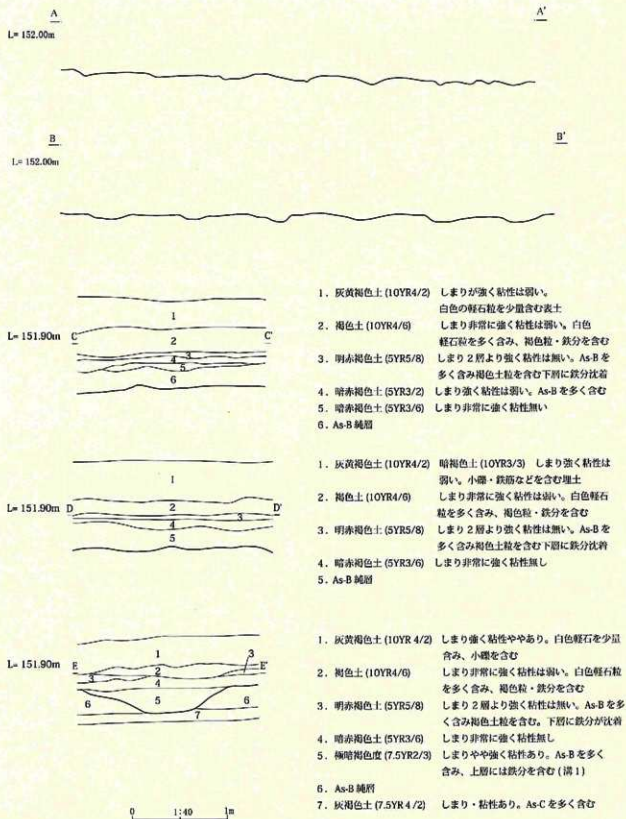
As-Bは遺跡全体から検出されたが、畝及び畝間は調査区の南東部分に存在しない所がある。ここにもAs-Bが残っていたことから、後世の擾乱によって削り取られたのではなく、最初から無かったことが想定される。この畝の空白地帯については、畝の掘削方向は違うが、下里見宮谷戸第1次調査で検出された1号畝と3号畝の西に広がる空白地帯にそのまま繋がっていく可能性もある。(第55図参照)

また、この空白地帯の北に存在する畝群と、空白地帯の西に広がる畝群では、畝の幅や畝間作り方が若干異なっている点が注目される。畝の幅は空白地帯の西では40～45cmであるのに対し、空白地帯の北では30cmと狭くなっている。

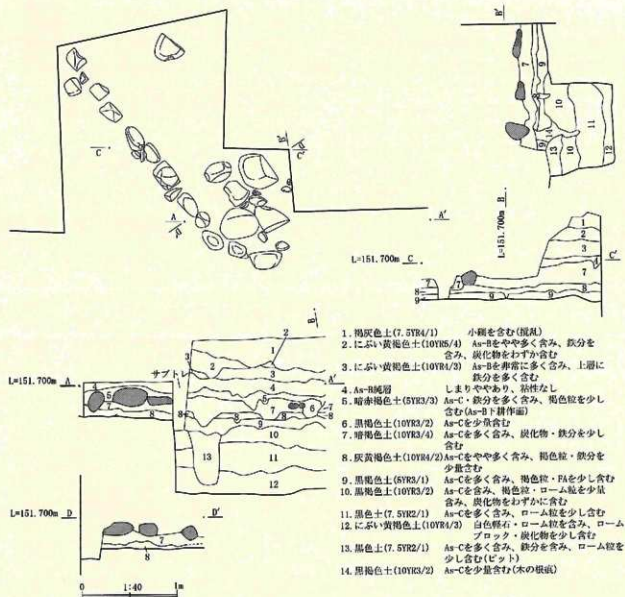
調査区中央を南北に溝1が掘削されているが、As-Bの上から掘削された、後の時代の遺構であることが分かる。



第55図 平成22年度及び23年度As-B下層検出状況(S=1/400)



第57図 As-B下島跡エレベーション図・セクション図(S=1/40)



第58図 配石状遺構平面図・断面図(S=1/40)

配石状遺構

調査区北東隅で列状に石を組んだ遺構が検出された。調査区北側を少し広げてみたが、配石は更に北へ続いているようであり、全貌はつかめなかった。

拡張した範囲内で配石の長さは約3mある。配石の南に展開しているAs-B下の畝との関係は、石がある部分では畝間が止まっており、更に配石より西の畝間は石を避けて若干西に曲がって掘削されているように見える。配石と畝間が接する地点では、石の並びが逆J字状に曲がり再び北へ向かって3石置かれている。この石と石の間隔は32cmあり、石組の溝のようにも見えるが、石の間の土を掘削した痕跡が無く、東側の3石の北には石を据えた跡が残っていないので、破壊されてこの形になったのではないことが分かる。

土層断面を見ると、配石の上にはAs-Bの純層が乗っており、畝と配石が同じ時代の遺構であることが分かる。すなわち配石は、As-B下の畝に伴う施設であると推定されるが、何のために作られたのか、何を目的とする施設なのかは全く分からない。今後の類例の増加を待ちたい。

5. まとめ

As-B下の畝跡について

当遺跡からはAs-B下の畝跡が検出されているが、畝と同一時期の住居は検出されなかった。22号住居は、当遺跡で検出された竪穴住居跡の中では唯一の平安時代のものであるが、住居の覆土中からAs-Bの堆積は確認されず、土器から見てもAs-Bの降下時期とは時間幅が感じられる。

下里見宮谷戸遺跡の1次調査では11世紀中葉から後半に作られた竪穴建物跡が検出されているが、住居の機能を停止してから少し時間が経過した後As-Bが降下したことが指摘されているので、As-B下で検出された畝跡と同一時期の集落は恐らく遺跡の周辺に展開しているのであろう。

また、今回の調査で認識されている調査区南東の畝及び畝間の存在しない空白地帯は、空白地帯北側に掘られた畝間の南端のラインが直線的に並んでおり、空白地帯西側の畝間のラインと合わせて見ると、方形の区画を呈していることが分かる。

1次調査では畝を耕作する際にかつて存在していた竪穴住居跡の窪みを避けるように畝が配置されていたことが指摘されているが、当遺跡においては一番近い時期の住居と推定される11号住居の上にも畝が作られている。

恐らく当遺跡においては、畝が作られない空白地帯には畝以外の別の施設が存在していたのではないだろうか。

鉄製金床について

6号住居の覆土中から鉄製の金床が出土した。報告の中でも述べたが、この遺物は6号住居の埋没過程の中で覆土中に入ったものであり、6号住居で使用されていたものではない。従って埋没中の住居に放棄したと見ることもできるが、打ち直しができる「鉄」としての貴重性、あるいは国内で出土している鉄製金床の数の少なから見ても「廃棄」を考慮する必要は無いであろう。

また金床の出土した位置・出土状況を見ると、作業点である上面を上にして垂直に立っており、偶然に垂直状態で出土したと考えるより、近接する1号がを利用して半分埋没した住居の窪みを利用して、鍛冶作業を行ったと見る方がより合理的である。

金床の構造を見ると、作業点である上端部に対し下端部は若干細くなっている。この状態で地面に置いて鍛冶を行ったとすれば、恐らく金床は地面に埋没してしまうであろう。

従って、使用時にはよい木に打ち込んだか、木材で挟み込んだ状態で、これを台として作業したと考えるのが妥当である。

金床出土地点の断面をその意識を持って観察したが、残念ながら木材の痕跡を認識することはできなかった。

また、ここで鍛冶を行ったとすれば周囲に鍛造薄片が散っているであろうと考えられたため、金床周辺の土を洗浄し、磁石を使用して薄片を探したが、砂鉄は多く残っているものの、鍛造薄片は検出できなかった。

国内における鉄製金床の出土例として、岡山県総社市で発掘された5世紀後半代の帆立貝式古墳である随庵古墳の割竹形木棺内から、大量の鉄製品と共に鉄製のはさみ・槌・金床など鍛冶の道具一式が出土した例があり、他にも古墳の副葬品として数例見られるが、その数は非常に少ない。また集落内で鍛冶遺構が検出される場合、金床は鉄製ではなく石製である。

当遺跡では金床の出土と共に、近接する14号住居カマドの上から、完形の韓式系土器の甌が出土したことに注目したい。

遺跡の南東には、同じ鳥川沿いの丘陵上に剣崎長瀬西遺跡が存在しており、この遺跡からは、破片ではあるが数十片の韓式系土器や日本最古級の鉄製轡、金製垂飾付耳飾など渡来人と関係の深い遺物が大量出土し、渡来人の集落として認識されている。

当遺跡で出土した、国内としてはあまり例の無い鉄製金床の存在や、木の台に金床を嵌め込んで利用する可能性が高い特殊な使い方が想定されることなどから、下里見宮谷戸遺跡も剣崎長瀬西遺跡と同様に、渡来人と関係の深い遺跡である可能性も否定できないのではないだろうか。

足門東屋敷間遺跡

第1章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

足門東屋敷間遺跡（以下当遺跡）は、榛名山（標高1448m）東南麓の標高170m付近に位置する。当地域は、標高600m付近を頂部とする相馬ヶ原扇状地の裾野付近に該当し、周辺一帯は南東方向への開けた緩斜面地である。また、当遺跡北方約500mに、相馬ヶ原扇状地を水源とする染谷川が南東流する。なお、扇状地上では、河川現流路のほか、大小幾多の谷地形の存在が窺われ、ほとんどが形成や埋没の時期が不明であるが、過去の地理環境復元の際は注意を要する。

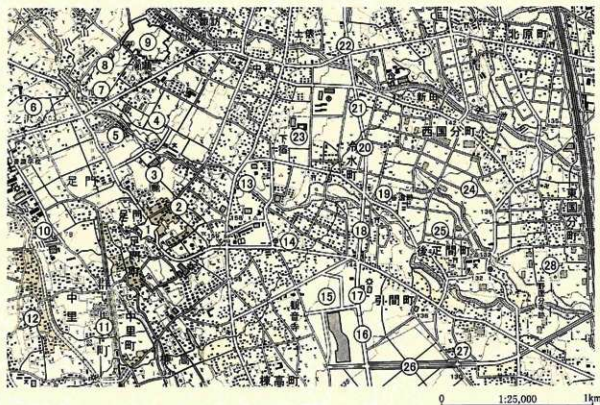
以上の通り、当地域は、榛名山の至近に位置し、基盤形成をはじめ、常に火山活動の影響下にあったことは容易に理解される。特に、榛名山の6世紀代における2回の大規模な噴火は、当時の人々に甚大な災害をもたらしており、関連遺跡の調査でその一端が明らかとなっている。一方で、噴火の際に堆積したテフラ層は、当時の地表面を瞬時に覆ったため、通常の発掘調査で確認困難な水田跡や畠跡などの確認を容易にするばかりでなく、時期決定の根拠としても重要な役割をなしている。

第2節 歴史的環境

足門東屋敷間遺跡（1・以下当遺跡）周辺の遺跡を、主に染谷川上・中流域について概観する。

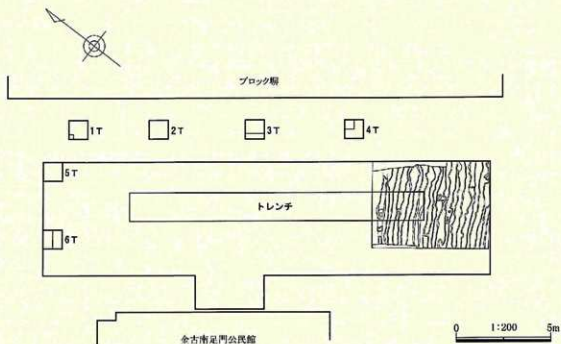
当遺跡近隣では、縄文時代中期頃より、遺物が少量確認されるようになり、明確な遺構確認は皆無だが、当時、何らかの生業活動があったことは明らかである。足門寺屋敷遺跡（3）では、As-C下から古墳時代初頭の堅穴住居跡1軒及び畠跡が確認されており、現段階では最も古い時期の遺構確認例である。なお、周辺地域では古墳時代初頭における居住域は、標高125m付近にとどまり、特に水源が限定される標高160m以上の地への進出は、生産基盤となる水田耕作地開発に要する技術的境界から困難であったと考えられている。こうした中、足門寺屋敷遺跡例は、際立って上流域での確認となり、特異である。ただし、近年、棟高遺跡群（15）の調査で、標高143m付近で、4世紀代の墓塚が確認され、関連する集団について居住域の所在など、問題が投げられている。5世紀後半頃、染谷川左岸標高145m付近に有力豪族（首長）の居館（北谷遺跡19）が築かれ、周囲の遺跡では堅穴住居跡が多数確認されるなど、山麓開発が本格的に開始されたと理解されている。ただし、6世紀初頭とされる榛名山噴火を契機として、居館及び住居の多くは廃絶したと判断され、染谷川上・中流域では、その後1世紀近く確認遺構が激減する。一方、噴火当時堆積したIr-FA層を手がかりに、当時の畠跡が広範囲に確認されており、標高200m付近まで達していることが判明している（庚申遺跡7・金古安良田遺跡9）。さらに確認例は少ないが、小規模な谷地で狭小な水田跡が認められており、畠同様に標高200m付近に達することが金古安良田遺跡の調査で判明した。6世紀末～7世紀前半頃、標高145m前後の地域に居住域が再び出現し、運動するように、染谷川上流域一帯に群集墳が構築される。当遺跡近隣では、鶴巻・寺屋敷両古墳群（2・5）を含む区域で円墳11基、染谷川対岸の如來古墳群（4）では円墳4基が調査されている。8世紀後半、標高130m～125m付近に上野国分僧寺及び尼寺が築かれ、すぐ南東に上野国府の存在が想定されるなど、染谷川中・下流域には古代上野国の政治・文化の中心地が営まれ、周辺地域では、8世紀～11世紀に該当する遺構の確認例は多い。一方で、当遺跡近隣の染谷川上流域では、8世紀以降の遺構確認例は皆無に等しく、依然、居住域としての土地利用はなされなかったようである。このことは、榛名山火山活動が6世紀中葉頃まで継続したこともあり、一定標高以上の地域では、以後長きにわたり、山麓開発に対し、物理面・精神面ともに影響を与えた可能性も考えられる。なお、畠作地や放牧地、あるいは山林資源供給地としての土地利用の可能性は、痕跡が見出しにくいこともあり、否定できない。

なお、12世紀初頭、天仁元（1108）年とされる浅間山代噴火に伴うAs-B層は、当遺跡周辺一帯でみられ、現耕作土内にも濃密に混入している。近世では、佐渡金山開発に伴い、江戸と越後を結ぶ、三国街道が整備され、当地には17世紀初頭に宿場（金古宿）がおかれた。同宿場について、現存する文書や絵図で往時の状況を窺い知る



- 1 足門東屋敷間道跡 2 鶴巻古墳群 3 寺屋敷・並・鶴巻道跡 4 如来古墳群 5 寺屋敷古墳群 6 金井沢古墳群
 7 庚申道跡 8 庚申古墳群 9 金古安良田道跡 10 足門村西古墳群 11 毘沙門古墳群 12 屋敷古墳群 13 東久保古墳群
 14 北塚保佐古墳群 15 棟高道跡群 16 西二社免道跡 17 小池道跡 18 諏訪西道跡 19 北谷道跡 20 冷水村東道跡
 21 西園分新田道跡 22 金古北十三町道跡 23 金古町東道跡 24 西園分道跡群 25 後疋間道跡群 26 棟高止久保道跡
 27 引間六石道跡 28 上野園分僧寺

第1図 周辺の遺跡図



第2図 調査箇所位置図

ことが可能である。

第2章 検出された遺構

第1節 調査の概要

建物部分について、トレンチを掘削したところ、対象地北半部について、基本層序2層以上は失われており、遺構の確認は皆無であった。対象地南端付近で、基本層序2層上に黒色土が残存しており、該当部を中心として、上層から掘り込まれた時期不明の耕作痕が認められた。このため、遺構確認部を拡張し、記録保存目的の発掘調査へ移行した。なお、建物予定部分の開発面積は148㎡、うち発掘調査面積は60㎡である。

基本層序

- 1層 黒褐色土 (10YR2/3)、粘性なく、As-Bを濃密に混入する。公民館施設施工以前の耕作土である。
- 2層 褐色土 (7.5YR4/4) 粘性。上層に向け漸移的に色調暗くなり、調査区南端部では上層に黒色土およびAs-Cの混入がみられる。
- 3層 褐色土 (10YR4/4) 粘性乏しく硬い。砂性。
- 4層 褐色土 (10YR4/4・4/6) 砂性。

※2層以下は、榛名山を由来とする泥流層（下限は約5000年前か）に比定される。

第2節 確認された遺構

畝跡 (第3図)

幅・深さとも一定しない小規模な溝跡が連続して構築され、耕作跡と判断される。同溝跡について、確認面で計測すると、上幅40cm～30cm、深さ15cm～10cm、を測り、北東-南西方向に走行する。各溝跡間は、40cm～20cmをはかる。当耕作跡の埋没土は、基本層序1層と同様のAs-Bを濃密に混入する黒褐色土で、また、埋没土内からの出土遺物は皆無であった。

当遺構の性格について、溝の掘削が比較的深くしっかりとしており、牛蒡や人参など根の長い根菜類の作付け痕あるいは天地返し痕なども想定可能であろうか。

遺構の時期について、埋没土内にAs-Bが混入することから、同テフラ降下以降の構築は明らかで、また、埋没土の上質や色調が現耕作土と類似することから、当耕作跡は比較的新しい時期の可能性が強く、周囲に中世と明確に判断される資料が皆無であることなどから、近世以降の可能性が考えられる。

第3節 まとめ

今回の調査で、当初予想された、古墳時代の埴輪や畝跡は未確認であった。畝跡について、対象地では、耕土に想定される黒色土が広い範囲で失われており、現状では存在の有無は不明である。古墳について、当区域は、過去の記録や踏査では存在が無いとされているが、東側に鶴巻古墳群が近接し、削平により墳丘を失った未知の古墳が存在することも予想された。ただし、調査区内では、古墳の存在を想定し得る資料は皆無である。

確認遺構は、近世以降と判断される耕作跡で、時期が具体的に判明することを期待したが、十分な資料を得ることができなかった。同様の遺構（近世以降の農耕に伴う各種痕跡）は、周辺地域で少なからず確認され、いずれも、出土遺物が乏しいなど具体的な時期を想定するための判断材料を欠き、埋没土の状況から時期を判断することが多い。しかしながら、同種の遺構は、耕作地としての土地利用を明確に示し、当時における農村の景観を想定する貴重な資料で、今後の類例増加が期待される。

五霊神社古墳

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

平成22年9月に高崎市教育委員会事務局教育部社会教育課（以下、「社会教育課」）より高崎市立東部公民館建設事業が計画された。高崎市教育委員会事務局教育部文化財保護課（以下、「文化財保護課」）では、社会教育課の依頼を受け事業地の埋蔵文化財包蔵地の照会を実施した結果、事業予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地に該当することが明らかとなり、また、事業予定地に北接して6世紀後半の前方後円墳・五霊神社古墳が現存しており、当該事業地内より五霊神社古墳の関連遺構が検出されることが予測されるため、この旨回答した。これを受け、平成23年12月1日に社会教育課より文化財保護法第94条に基づく通知が文化財保護課に提出された。工事計画に基づき、社会教育課と文化財保護課で埋蔵文化財保護について協議を行ったが、社会教育課より事業計画の見直しや変更は不可能との回答を得た。文化財保護課では、埋蔵文化財への工事による影響は不可避との判断により、群馬県埋蔵文化財発掘調査取扱い基準に基づき、記録保存を目的とした発掘調査を実施した。

第2節 調査の方法

発掘調査は、平成23年12月26日から平成24年3月29日まで実施した。発掘調査実施前は現公民館駐車場として利用されていたため、調査開始前にアスファルト舗装および砕石の除去を行った。なお、発掘調査対象面積は約420㎡であったが、発掘調査によって生じる排土の仮置場確保を目的に、調査対象地を東西に区分し、まず西半分から調査に着手した。

発掘調査は、遺構が検出される深度（遺構確認面）まで重機を使用した表土除去作業を行った。遺構確認面では人力により遺構平面プランの検出を行い、遺構の形状や重複関係の確認を行った。遺構確認後は土層観察用ベルトの設定や遺構半裁の方向を決定し、順次人力での掘削を行った。土層観察用ベルトは、各遺構の覆土堆積状況などを観察し、分層作業や写真撮影、断面図化作業を行った後に取り除いた。掘削が完了した遺構はフィルムカメラを用いて35mmモノクロ・カラーリバーサルフィルムおよびデジタルカメラによる記録写真撮影を行った後、光波測距儀や平板測量で平面図および断面図の記録図作成を行った。検出した遺物については、出土状況の記録写真や分布状況の記録図面を作成した後、遺構ごとに取り上げを行った。すべての遺構の調査が完了した後、埋め戻しを行った。

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

五霊神社古墳は高崎市貝沢町に所在する。東側が高崎森状線に隣接し、西側1.3kmのところをJR上越線が走る。東に約500mのところに榛名山東南麓を水源とする井野川が南東流している。井野川の右岸の井野川と市内中心部に広がる高崎台地に挟まれた範囲は、井野川低地帯と呼ばれ台地よりも一段低くなっている。その低地帯も詳細に見ると複数の段丘面に区別できる。この段丘面は、下流域では台地との境界がはっきりしているものの、中流域より北側へ行くと同辺の台地や扇状地との境界が曖昧になるという地形的特色を有している。井野川流域に立地する遺跡の多くは以上のような段丘上で確認される。井野川低地帯の基盤は、下層に約2.1万年前の浅間山の噴火により発生した前橋泥流が厚く堆積し、その上層に旧利根川が流れていたことに由来するとされる砂礫層が積もる。さらに高位段丘には高崎台地と同様に約1.1万年前に堆積した高崎泥流層があり、本遺跡でも現地表面より約1.1m下で高崎泥流層と考えられる黄褐色土を確認している。また、低位段丘では6世紀の榛名山二ツ岳の噴火に関連した泥流堆積物が確認されている。

本遺跡は、井野川低地帯の微高地上に築造された後期古墳で、標高約97mを測る。周辺は北西から南東に向

かつてわずかに傾斜する地形である。

第2節 歴史的環境

周辺の歴史的環境について、主に古墳時代を中心として以下に概観する。

五雲神社古墳が立地する井野川左岸は、『上毛古墳総覧』には周辺に約30基の古墳が掲載されている。しかし木調査の古墳が多いことや近年の開発等で多くが未調査のまま削平されてしまったことなどが原因で、同じ井野川の上流域や下流域の古墳群と比べて実態がやや不明瞭である。現在確認できる古墳のうち、本古墳の前段階として、5世紀後半の聖天山古墳(8)や浜尻宅地後遺跡1号墳(3)、稲荷町Ⅱ遺跡(7)がある。聖天山古墳は本古墳の南東約600mに位置し、径25m前後の円墳であったと推定される。現存していないため詳細は不明だが、主体部に組合式石棺を用いていたと考えられる。浜尻宅地後遺跡1号墳は径約14mの円墳で、周堀内出土の円筒埴輪から5世紀後半と推定される。こちらも既に墳丘は削平されていて主体部も残存していなかった。稲荷町Ⅱ遺跡も墳丘は既になく、周堀のみ確認されているが、円筒埴輪をはじめとして朝顔形埴輪、人物埴輪が出土している。円筒埴輪の特徴から5世紀末～6世紀前半に築造されたものと考えられる。また、本古墳から1kmほど南に位置する貝沢柳町遺跡(9)では古墳時代前期の周溝墓と5世紀代と考えられる埴輪円筒棺2基が出土している。他に上大類北宅地遺跡(11)では貝沢柳町遺跡と同様に古墳時代前期の周溝墓が確認されている。本古墳とおおよそ同時期に築造された古墳としては1kmほど北に浜尻天王山古墳(2)が位置している。本古墳同様、前方部に諏訪神社の社殿が鎮座しているため墳頂部は削平されているが、残存長53mの前方後円墳である。主体部や副葬品等は不明だが、出土埴輪の特徴から6世紀後半の築造であると考えられる。6世紀後半において、井野川中流域の中核を成す首長墓のひとつであったと推定される。



- 1.本道跡 2.浜尻天王山古墳 3.浜尻宅地後遺跡1号墳 4.間原町西遺跡 5.貝沢Ⅰ遺跡 6.稲荷町Ⅰ遺跡
- 7.稲荷町Ⅱ遺跡 8.聖天山古墳 9.貝沢柳町遺跡 10.上大類薬師遺跡 11.上大類北宅地遺跡

第1図 五雲神社古墳周辺遺跡位置図

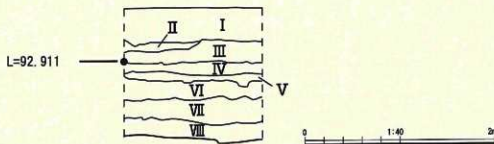
また同時代の集落域に関しては稲荷町Ⅰ遺跡(6)、上大類北宅地遺跡、上大類薬師遺跡(10)で集落が確認されているほか、貝沢Ⅰ遺跡(5)では土器類とともに多くの石製機道具が見つかっており、祭祀遺構であった可能性も考えられる。生産遺跡は閑屋町西遺跡(4)など住居地の西側で多く確認されている。いずれも古墳時代後期の水田跡である。この時代は井野川右岸の微高地上に集落が展開し、その西側に生産域が広がる傾向にある。

第3節 五雲神社古墳について

五雲神社古墳は、『上毛古墳総覧』に高崎市第223号として記載されている東西に主軸を持つ前方後円墳である。墳丘上に五雲神社社殿等の建造物が建てられているため、主に後円部が削平されており、また周辺にも道路や水路がめぐっているため、全体的に墳丘の改変が著しい。『新編 高崎市史 資料編Ⅰ』によると、現況で全長45m以上、前方部前端幅約38.5m、後円部径約34m、くびれ部幅約30mで、2段築成であったと考えられる。墳丘には一部礎が見えられており、礎石が施されていたと想定される。主体部は確認されていないが、角閃石安山岩の加工石材の存在が指摘されており、角閃石安山岩削石積の横穴式石室の可能性が考えられる。周堀は当然想定されるものの、現況の地割りにおいてその痕跡は認められないとしている。副葬品に関しては、1928年(昭和3)に金銅製の耳環2点、直刀の残欠、刀装具、馬具の鞍金具、銅碗が発見され、1930年(昭和5)に東京国立博物館に収蔵された。特に銅碗は市内でも八幡観音塚古墳の4例、石原稲荷山古墳1例と非常に出土例が少ない。いずれも6世紀末に築造された地城の首長墓と考えられる古墳である。また、副葬品の構成が観音塚古墳や同じ井野川の下流域の綿貫観音山古墳と共通している。五雲神社古墳は、浜尻天王山古墳とともに6世紀後半段階における井野川中流域の首長墓のひとつであったといえよう。

第4節 基本層序(第2図)

調査区の南西側において、表土から遺構確認面以下までの土層の堆積状況を確認した。以前東部公民館の駐車場であったため地表面から約0.8mは碎石とAs-A軽石の混入する表土層(I~V層)である。その下黄褐色土でしまり、粘性ともに強い層(VI層)、次いで明黄褐色土層(VII・VIII層、基盤層)の順で堆積する。今回の調査では、調査区南半分において浅間山や榛名山起源の火山灰層は確認されなかったため、VI層を遺構確認面とした。また調査区北側の周堀部分では地表面から約1m下でAs-B軽石の一次堆積層を確認し、これを遺構確認面とした。(第4図参照)



基本層序

- | | | |
|------|-----------------|--|
| I | 砕石 | |
| II | 黒褐色 (10YR 3/2) | As-A説。炭化物、地山黄褐色粒子を含む。しまりやや強、粘性弱。表土・カクラン層。 |
| III | 黒褐色 (10YR 2/2) | As-B説。炭化物、地山黄褐色粒子をやや多量に含む。しまり強、粘性弱。プラスチックのゴミあり。表土・カクラン層。 |
| IV | 灰黄褐色 (10YR 4/2) | As-C説。表土・カクラン層。 |
| V | 黒褐色 (10YR 3/2) | 軽石粒子 (As-A2) 少量を含む。しまり・粘性やや弱。 |
| VI | 黄褐色 (10YR 7/6) | 比較的粘少量。しまり・粘性強。 |
| VII | 明黄褐色 (10YR 7/6) | 赤褐色粒子多量 (I層よりやや多く含む)。粘多量を含む。しまり強、粘性やや弱。 |
| VIII | 明黄褐色 (10YR 6/6) | 赤褐色粒子多量、粘少量を含む。しまり強のため、粘性やや弱。 |

第2図 基本層序

第3章 検出された遺構

第1節 概要

本調査では、五雲神社古墳に伴うと考えられる周堀の一部を検出した。また溝7条、井戸1基、土坑9基、ピット11基を検出した。なお、5号溝、6号溝、3号土坑、4号土坑、12号土坑は調査中に付番したが、その後検討した結果明確に遺構と断定できないため欠番とした。

以下、各遺構について概観する。

第2節 検出された遺構・遺物

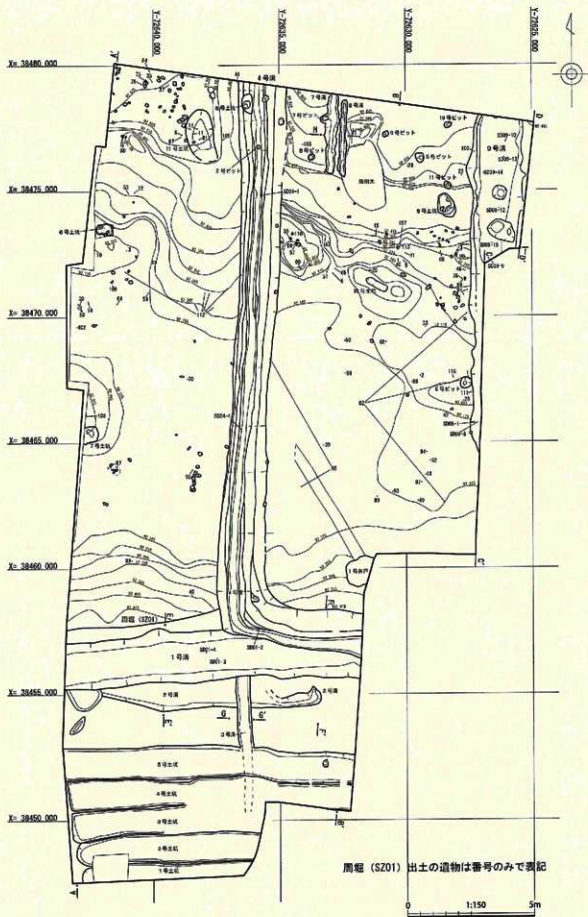
1. 周堀 (SZ01) (第3図、第4図)

調査区の北半で五雲神社古墳に伴うと考えられる周堀の一部を検出した。遺構規模は幅15.0m、深さは一番深いところで0.90~1.00m程度である。堀底は平坦で、緩やかに立ち上がる。As-B軽石の一次堆積は、部分的ではあるが底部より0.10mほど上で確認した。墳丘くびれ部付近の立ち上がりでは、地山面を部分的に掘り窪めてスロープ状になっている。また、中央部分から東側にかけて周堀の立ち上がりが段状になることが確認できた。この段状の立ち上がりは4号溝より西側では確認できなかったが、本古墳の基壇であると考えられる。今回の調査では周堀の南側立ち上がりの外側では中堤や外堀の形跡は見受けられなかった。なお『高崎市史』のなかで葺石が施されていた可能性があるとの指摘があるが、基壇と思われる段状部分において葺石が葺かれたような痕跡は見られなかった。また周堀の覆土中からも葺石と考えられる礫は見受けられず、今回の調査では明確に葺石の存在を確認することはできなかった。

出土遺物は円筒埴輪、形象埴輪、土師器、須恵器である。全体として周堀内全域に散逸しているが、墳丘に近い北側に集中して出土する傾向にある。埴輪はいずれも破片資料であり、全容は把握できない。出土した埴輪の多くが円筒埴輪である。全体として基本的に胎土に結晶片岩を含むものがほとんどであり、滑綿骨針が認められるものもわずかに確認できる。また大粒の石英を含むものも数点だが存在する。突帯の断面形状は台形のもので大半であるが、M字、三角形を呈するものも数は少ないが認められる。透孔は形状等が明確なものが出土していない。

今回掲載した周堀内の出土埴輪は全部で86点である。そのうち1~58が円筒埴輪、59~74が朝顔形埴輪、75~86が形象埴輪である。円筒埴輪は口縁部1点、体部53点、底部4点と体部片の割合が高い。朝顔形埴輪は口縁部5点、体部11点である。1、2、4、18には外面に線刻が認められる。底部片は55が径6.7cm、56が13.5cm、57が10.8cm、58が13.7cmに復元できる。59、60は同一個体で、朝顔形埴輪の口縁部から花卉部にかけての破片である。形象埴輪の中で明確に器種が特定できるものは75の人物埴輪である。右腕と考えられるが肩から脱落しており、さらに手首から先が欠損しているためどのような人物を表現したものかは不明である。他はいずれも器種が特定できないが、調査区北西の墳丘に近い場所から出土した79~81、84は家形または馬形埴輪の破片であると考えられる。79、80、84の外面にはいずれも外面に二重に弧を描くように線刻が入る。81は部分的ではあるが同様の線刻が認められ、また赤彩も確認できる。78、82、83、85、86は器種不明である。78は外面にナデで調整を施した後、紐状の粘土を三重に貼り付けている。断面から中実のつくりであることがわかる。82、83は小片であるが、いずれも外面に線刻が施されており、82には赤彩も認められる。79~81、84と同一器種である可能性が高い。85は外面に刺突痕が並ぶ。86は剥離面に格子状のキザミ目が施される。

87~103は須恵器である。そのうち87~100は斐の破片である。87は底部が1/3程度残存している。巻き上げによる成形で、底部付近に押圧痕が認められる。胎土には肉眼で滑綿骨針の混入が確認できるため、南比企産の可能性が考えられる。88~99は胴部の破片で、いずれも平行線文の叩き具と同心円文の当て具が使用されている。調整の特徴から複数個体の存在が想定できる。なお、98は叩きの後にナデを施しているためか叩き具と当て具の

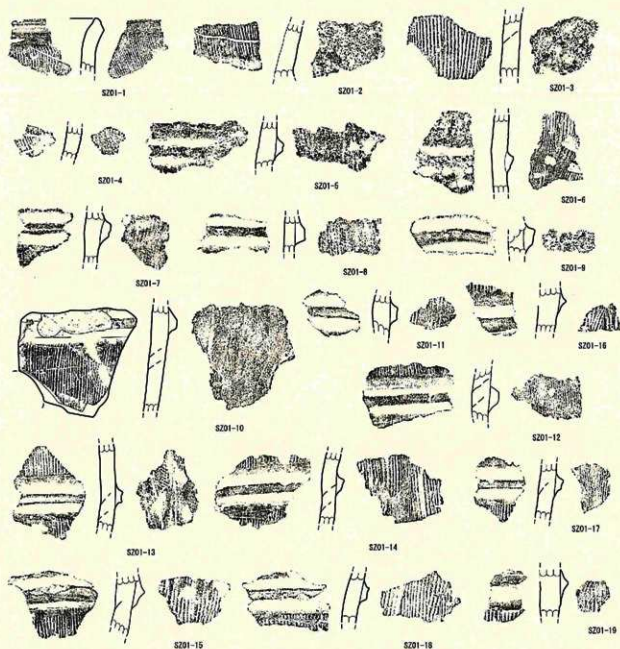


第3図 遺構全体図(S=1/150)

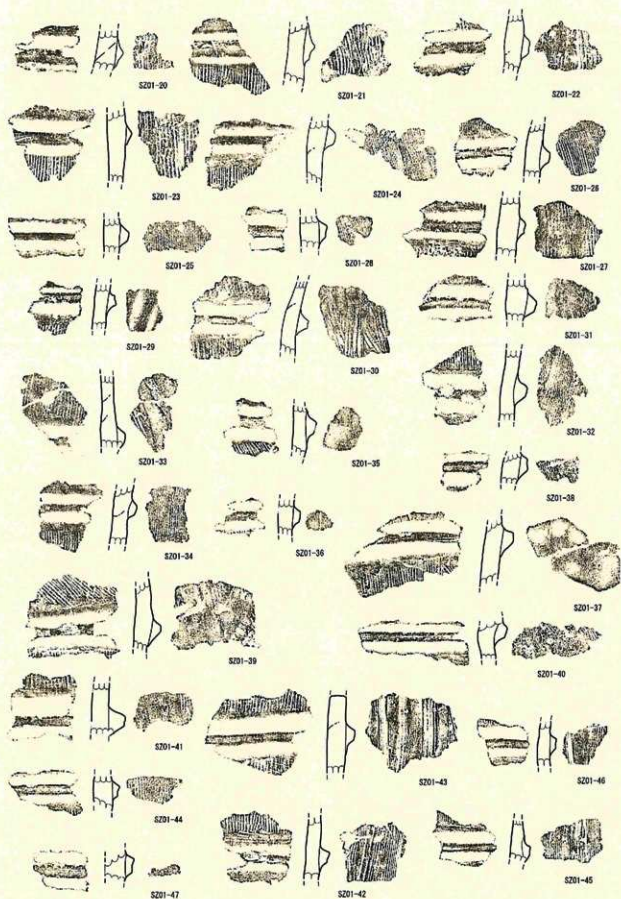
文様が判然としなない。また99は格子文の叩き具の可能性もある。100は大甕の頸部補強帯である。断面形状は矩形で、ナデによって端部が突出する。内面にわずかに同心円文当て具を使用した痕跡が認められる。101は甕の胴部と思われる小片である。外面に波状文と二重沈線が施される。102、103は坏蓋の小片で、接合はしないが同一個体のもと思われる。外面は手持ちへラケズリによる成形である。

土師器は高坏を中心に坏、壺が出土しており、特に北側立ち上りのスロープの両脇、周囲の埴垣よりも一段下がった底部から高坏の脚部が出土している。104～106、108～112は高坏である。105、106は坏部で、特に105は孔径1.6cmの透かしを持つ。他は全て脚部の破片である。器形の特徴から本古墳の築造よりも古い5世紀後半のものと考えられる。113、114は坏身、115は甕、116は壺である。

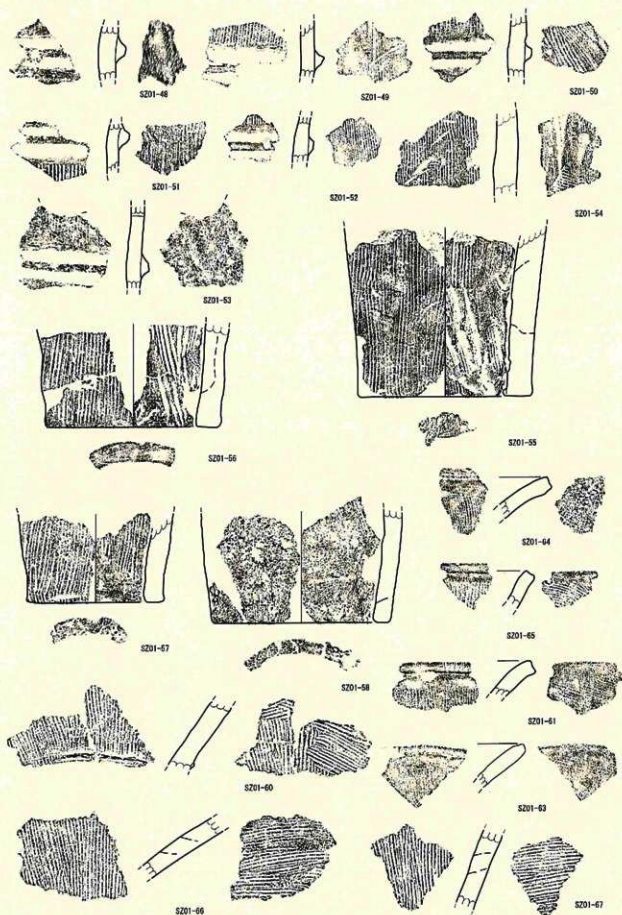
また角閃石安山岩も複数出土している。こぼし大程度の大きさのものが大半を占める。いずれも加工した痕跡が明確に見られないため石室構築材とする積極的な根拠に乏しいが、角閃石安山岩を石室に使用していた可能性は大いにあろう。



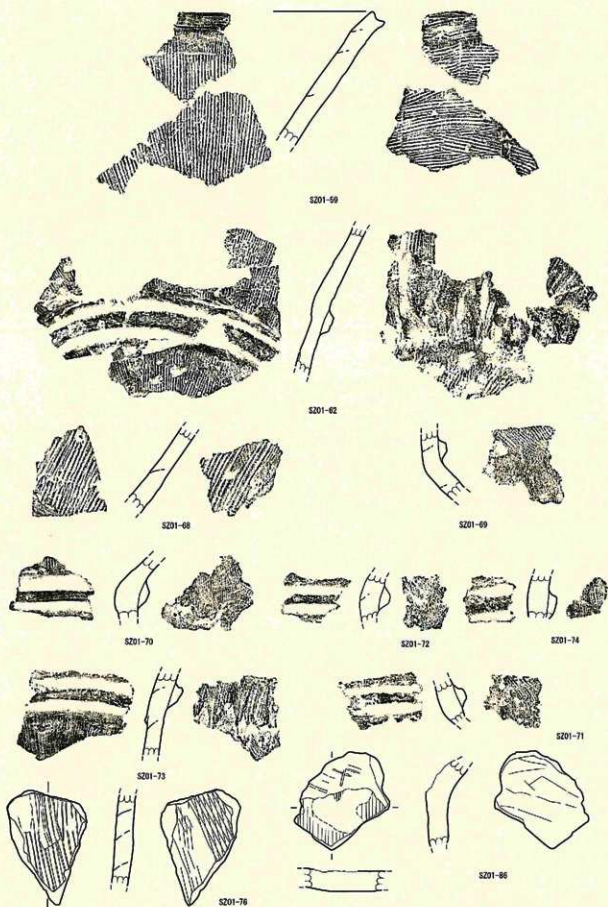
第5図 周埴 (SZ01) 出土遺物①(S=1/3)



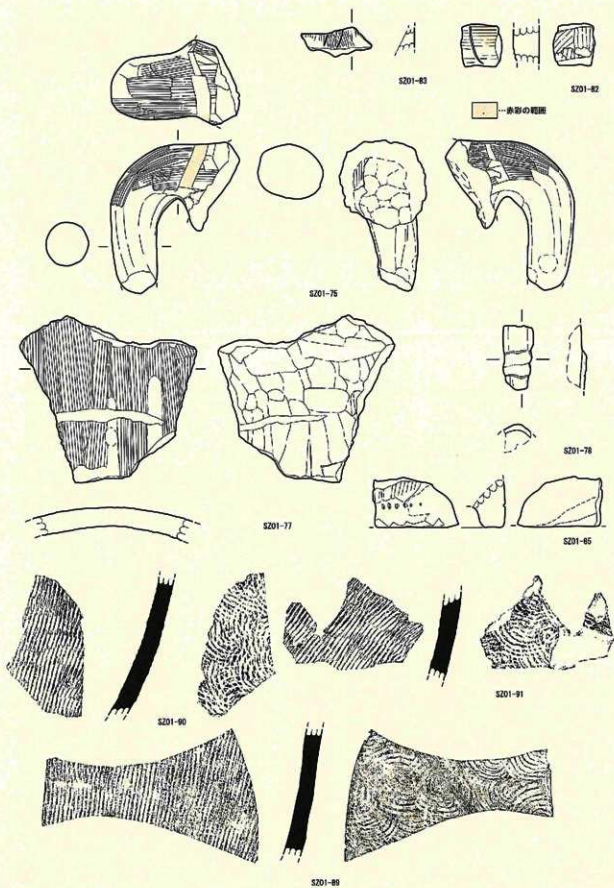
第6図 周堀 (SZ01) 出土遺物②(S=1/3)



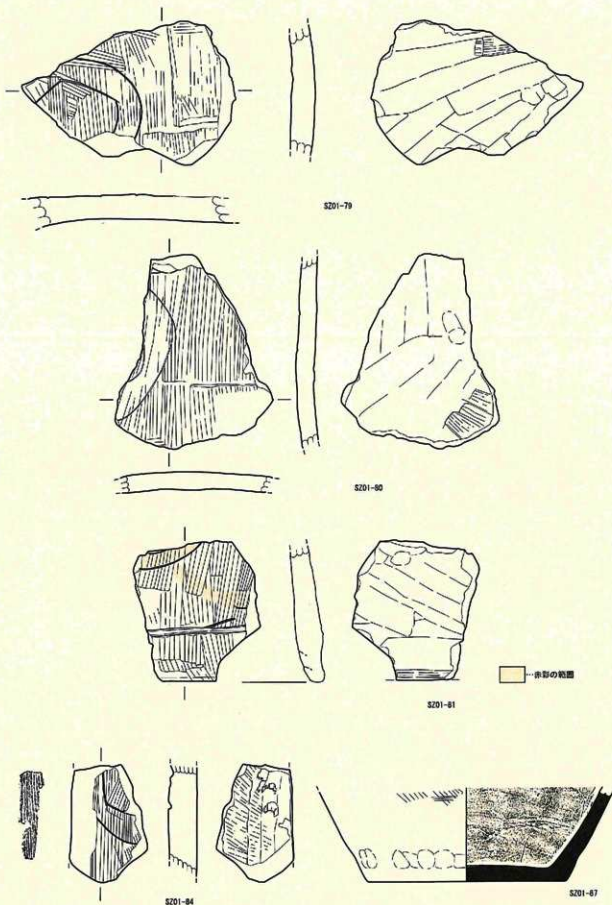
第7図 周堀 (SZ01) 出土遺物③ (S=1/3)



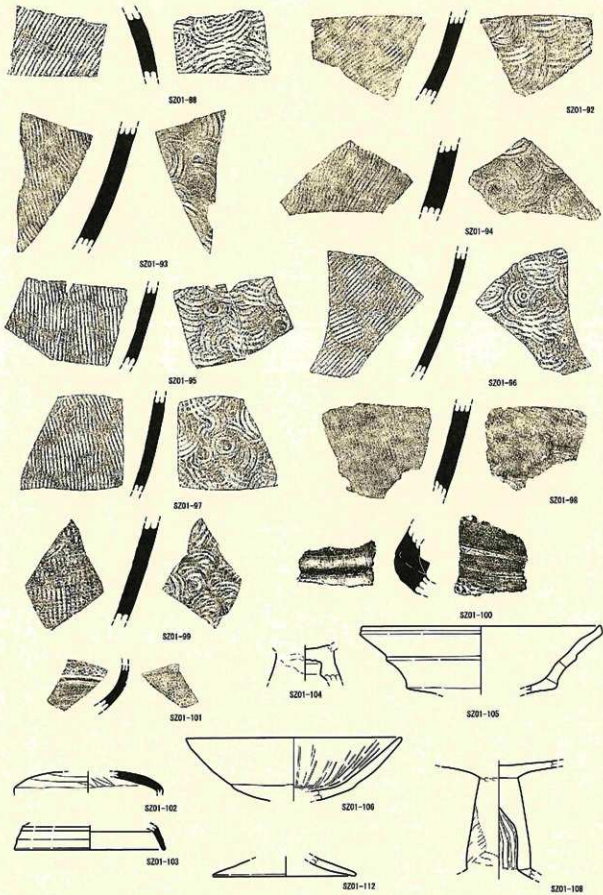
第8図 周堀 (SZ01) 出土遺物④(S-1/3)



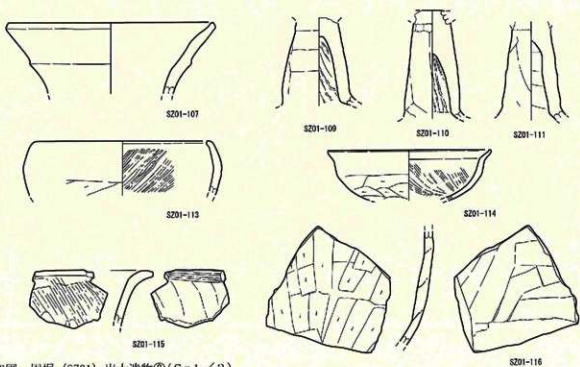
第9図 周堀 (SZ01) 出土遺物⑤ (S=1/3)



第10図 周堀 (SZ01) 出土遺物①(S=1/3)



第11図 周堀 (SZ01) 出土遺物② (S=1/3)



第12図 周堀 (S201) 出土遺物⑧(S=1/3)

2. 溝状遺構

1号溝 (第13図)

調査区南側で検出した。主軸はほぼ東西方向で調査区を横断し、中央で4号溝に切られる。遺構規模は、確認できた範囲で長さ11.00m、幅1.90m、遺構確認面からの深さは0.60mである。周囲のAs-B軽石一次堆積層から掘削されており、覆土にAs-B軽石を含む。以上から遺構の帰属時期は平安時代後期以降であると考えられる。また4号溝に北側を切られているため、掘削時期は4号溝より古い。

覆土上層より円筒埴輪、須恵器、土師器の破片が出土したが流れ込みの可能性が高い。1は円筒埴輪体部、2～4は須恵器である。須恵器はいずれも大甕の破片と思われる。2と4は平行線文の叩き具に同心円文の当て具を使用しており、2の外表面はタタキを施した後には刷り消している。3は格子文の叩き具に青海波文の当て具で調整している。内外面の調整を見る限り、少なくとも2個体以上が存在したと考えられる。

2号溝 (第13図)

調査区南側で検出した。1号溝の南側で、走行方向は南北である。北側の肩を1号溝に切られる。現況の規模は長さ8.40m、幅1.20m、遺構確認面からの深さは0.15mである。周囲のAs-B軽石一次堆積層の面から掘り込んでおり、覆土にAs-B軽石を含む。以上から2号溝は平安時代後期以降に掘削されたものと思われる。また掘削時期は1号溝より古い。出土遺物は流れ込みと思われる円筒埴輪と土師器の小片である。

3号溝 (第13図)

調査区の南側で検出した。走行方向は南北で、2号溝を切り、1号溝に切られる。さらに南側で5号土坑に切られているためか非常に不明確で、南に進むに従って検出できなくなる。規模は確認できた範囲で長さ2.80m、幅1.30m、遺構確認面からの深さは最も深い部分で0.27mである。覆土にAs-B軽石を含む。以上から溝の掘削時期は平安時代後期以降であると考えられる。また遺構の切り合い関係から2号溝より新しく、1号溝及び5号土坑よりも古い。覆土中より円筒埴輪の小片が出土した。

4号溝 (第13図)

調査区のほぼ中央で南北にわたって検出した。東西に走行する1号溝と接するところで走行方向を東に変える。1号溝の北側の立ち上がり部分を掘削しているため、1号溝よりも時代的に新しい。確認できた範囲での遺構規模は南北方向に23.00m、東西方向に4.26mでそれぞれ北と東の調査区外へ延伸する。幅は概ね1.50mだが、底面では0.25mほどになる。遺構確認面からの深さは0.50mである。周囲のAs-B軽石一次堆積層の上から掘削されており、土層中にもAs-B軽石が混入するため、平安時代後期以降に掘削されたものであると考えられる。

4号溝からは円筒埴輪、形象埴輪、土師器が出土したがいずれも小片である。1～4は円筒埴輪である。1～3は体部、4は底部である。底部は径11.8cmに復元できる。5は形象埴輪片で、大きさが3cm程度の小片であるが、外面に粘土紐を貼り付けており、人物埴輪等の衣服の結び目の一部であると考えられる。6は土師器の甕の底部である。底径は6.5cmに復元できる。

7号溝 (第13図)

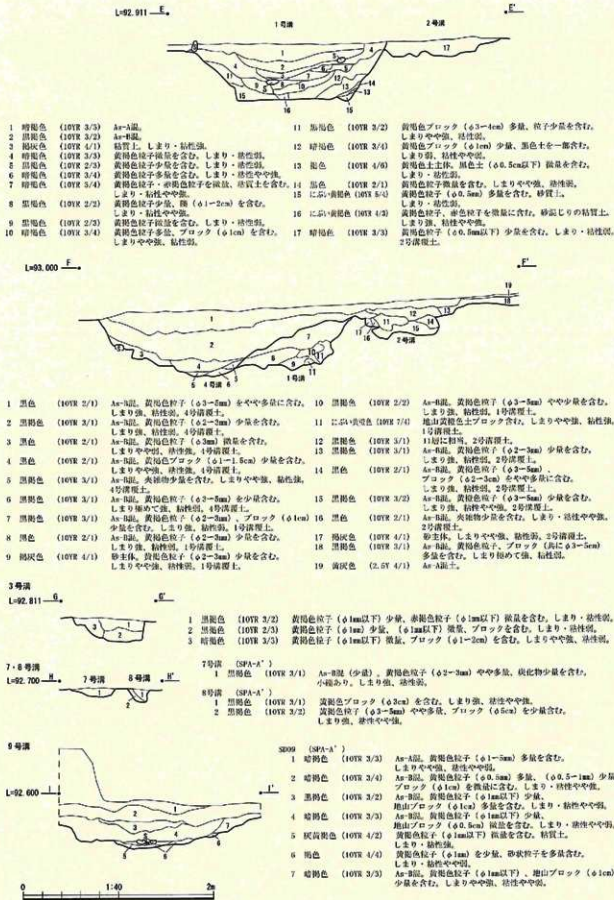
調査区北側で検出した。主軸を南北にとり、北は調査区外へ延伸する。遺構規模は現況で3.10m、幅約0.50m、遺構確認面からの深さは0.08mで南に向かって不明瞭となる。覆土にAs-B軽石を含むため、平安時代後期以降に掘削されたものと考えられる。覆土中より埴輪と土師器の小片が出土した。

8号溝 (第13図)

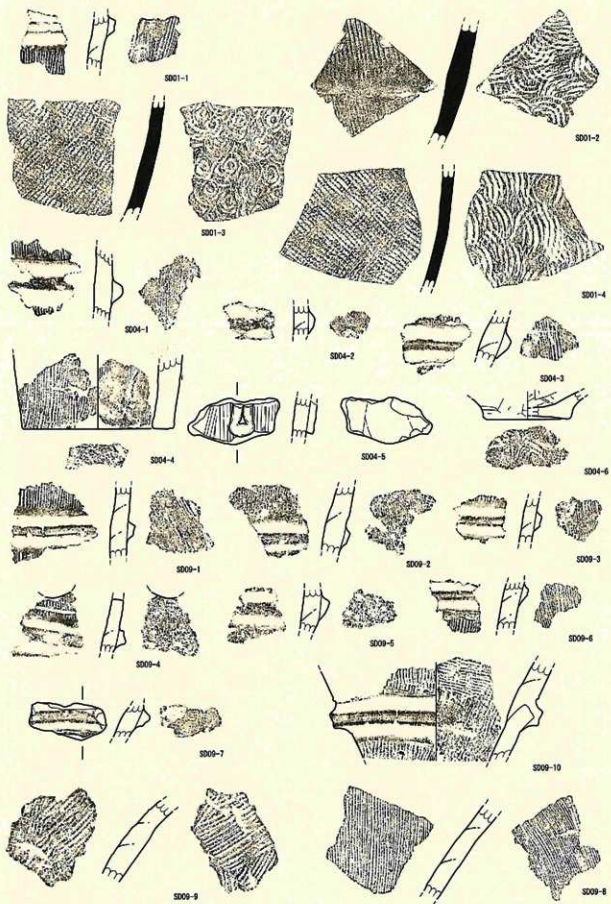
調査区北側、7号溝の東側で検出した。主軸は南北で7号溝と並行する。遺構の規模は全長3.06m、幅0.20～0.30m、遺構確認面からの深さは0.14m、南側で倒木痕に切られているが、その先には延伸しない。覆土中にAs-B軽石を含むため、掘削時期は平安時代後期以降であると考えられる。覆土中より土師器の小片が1点出土した。

9号溝 (第13図)

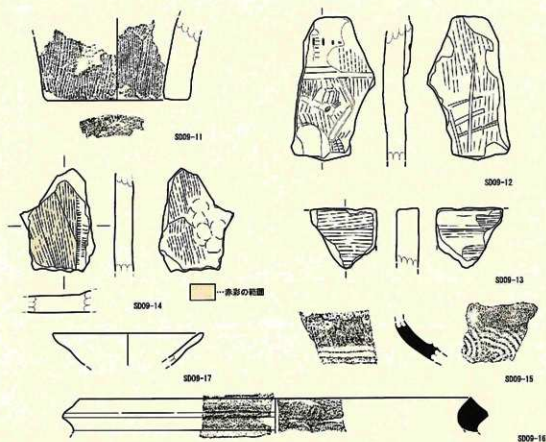
調査区東側で検出した。南北に主軸をとり、規模は現況で13.33m、それぞれ調査区外に延伸する。東側の肩が調査区外のため正確な幅は不明だが、おそらく2.00m前後であろう。遺構確認面からの深さは0.52mである。周囲のAs-B軽石一次堆積層を掘り込んでおり、覆土にもAs-B軽石が混入する。以上より溝の掘削は平安時代後期以降であろう。覆土中からは五雲神社古墳からの流れ込みと思われる円筒埴輪11点、形象埴輪3点、土師器1点、須恵器2点が出土している。また岡化に至らなかったが埴輪、陶磁器片がわずかに出土している。1～6が円筒埴輪体部、7～10が朝顔形埴輪体部、11が円筒埴輪底部である。11の底径は12.6cmに復元できる。12～14は形象埴輪であるがいずれも小片のため器種は特定できなかった。12は外面に刺突痕が並ぶ。14は外面にキザミ目が施されており、盾形埴輪の可能性もある。15、16は須恵器の甕である。15は頸部と考えられ、平行線文の叩き貝と同心川文の当て具で調整されている。また外面に剥落痕が認められる。16は甕の口縁、17は土師器の高坏の脚部である。また溝の北側からこぶし大ほどの角閃石安山岩が複数点出土した。明確な加工痕等は見られなかったが、石室構築石材の可能性が考えられる。



第13図 溝断面図 (S=1/40)



第14図 溝 出土遺物①(S-1/3)

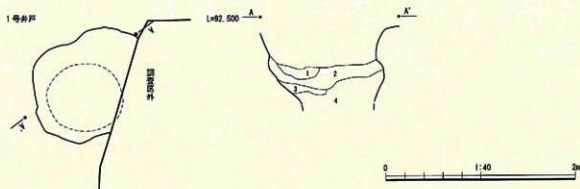


第15図 溝 出土遺物②(S=1/3)

3. 井戸

1号井戸 (第16図)

調査区東側で検出した。東側の上半分と北側の一部が電線埋設のための溝によって壊されている。東側がわずかに調査区外に出してしまうため正確ではないが平面形状は円形であろう。確認できた範囲での遺構規模は径が1.30m、深さに関しては、調査区際で壁の上砂が崩落する恐れがあったため底面まで検出していないが、遺構確認面から約0.80m以上である。覆土はAs-B軽石が混入した黒褐色土が主体である。出土遺物はない。以上より遺構の帰属時期は平安時代後期以降であると考えられる。



SE01 (SPA-a')

- 1 暗褐色 (10YR 3/4) 電源埋設土。As-B混入。しまり・粘性や中強。
- 2 黒褐色 (10YR 3/2) シルト質。黄褐色粒子(φ5mm)多量。礫(φ2-3mm)多量。埋土ブロック状砂を含む。しまりや中弱。粘性强。
- 3 暗褐色 (10YR 3/4) シルト質。黄褐色粒子(φ3mm以下)多量。(φ1mm)少量。砂状粘土多量を含む。しまりや中弱。粘性や中強。
- 4 暗褐色 (10YR 3/3) シルト質。黄褐色粒子(φ1mm以下)少量。砂状粘土多量を含む。しまりや中弱。粘性や中強。

※As-B降下層からの掘り込み。

第16図 井戸 平面図・断面図(S=1/40)

4. 土坑

1～5号土坑 (第17図)

調査区の南半で検出した。いずれも約1.00mの幅で東西に長く、1～4号土坑は調査区の東側に続き、5号土坑は東西に立ち上がり、調査区東側に続く。深さは遺構確認面から0.05～0.10mと非常に浅い。ただし、調査区東側は比較的残りが良いため、遺構の深さは0.40mと多少深くなる。覆土にAs-A軽石を含む。2号土坑から円筒埴輪片が、3号土坑から陶磁器の小片が1点ずつ出土している。帰属時期は近世以降と考えられる。

6号土坑 (第17図)

調査区の北側で検出した。平面形状は不整の隅丸方形で、長軸0.66m、短軸0.48mである。遺構確認面からの深さが0.09mとごくわずかな残存状況であった。南側に送風口を持つ中世の火葬関連施設である。炭や焼土とともにわずかながら骨片が出土している。その他に遺物は確認できなかった。

7号土坑 (第17図)

調査区西側で検出した。遺構確認面は周堀底部の地山面(漸移層)である。同じ面で北側では1号ピットを確認した。平面形状は遺構の半分が調査区外に広がっているため不明である。遺構規模は南北が0.79mで西側調査区外に広がる。遺構確認面からの深さは0.59mである。覆土は黒色土が主体で、暗褐色粘質土下の地山面から掘り込まれている。出土遺物はない。周堀の土層堆積状況を踏まえ、遺構の帰属時期は古墳時代後期以前であると考えられる。土師器の高杯が1点出土した。脚部のみの残存である。内面をナデで調整している。

8号土坑 (第19図)

調査区の北側、4号溝の壁面で検出した。平面形状は楕円形で、遺構の規模は長軸0.76m、短軸0.42m、遺構確認面からの深さは0.54mである。覆土にAs-B軽石を含む。出土遺物はないが、上面に礫が2点据え置かれていた。以上のことから、平安時代後期以降に属するものであると考えられる。

9号土坑 (第19図)

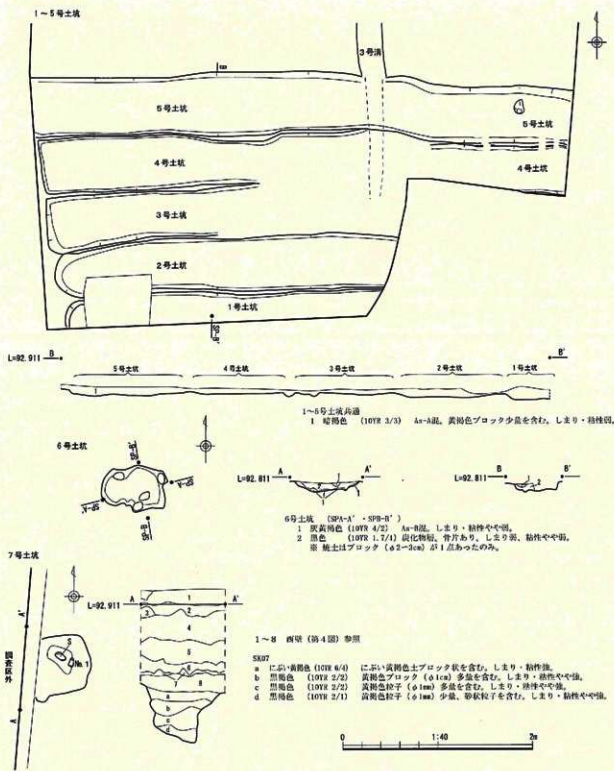
調査区北側で検出した。平面形状は不整の楕円形で、遺構規模は長軸0.98m、短軸0.56m、遺構確認面からの深さは0.20～0.25mである。覆土はAs-B軽石が多く混入する黒褐色土が主体である。円筒埴輪と土師器の小片が出土した。覆土の状況から本遺構は平安時代後期以降に掘削されたものと考えられる。

10号土坑 (第19図)

調査区北側で検出した。平面形状は不整の楕円形で、遺構規模は長軸0.92m、短軸0.25mである。掘り込み自体はごく浅く、遺構確認面からの深さは0.10mである。覆土は一部にAs-B軽石の一次堆積を残すが、基本的にはAs-B軽石の純度の高い混土層が主体である。出土遺物はないが、遺構内からはこぼし大程度の礫約20点を覆土のAs-B軽石混土層中で検出した。礫の中には角閃石安山岩が3点含まれていたが、石室の構築材として使用されたような痕跡は見受けられなかった。礫を故意に設置したというよりは、周堀の傾斜地で偶然窪みに集中したものと考えられる。覆土の状況から遺構の帰属時期は平安時代後期以降であると考えられる。

11号土坑 (第19図)

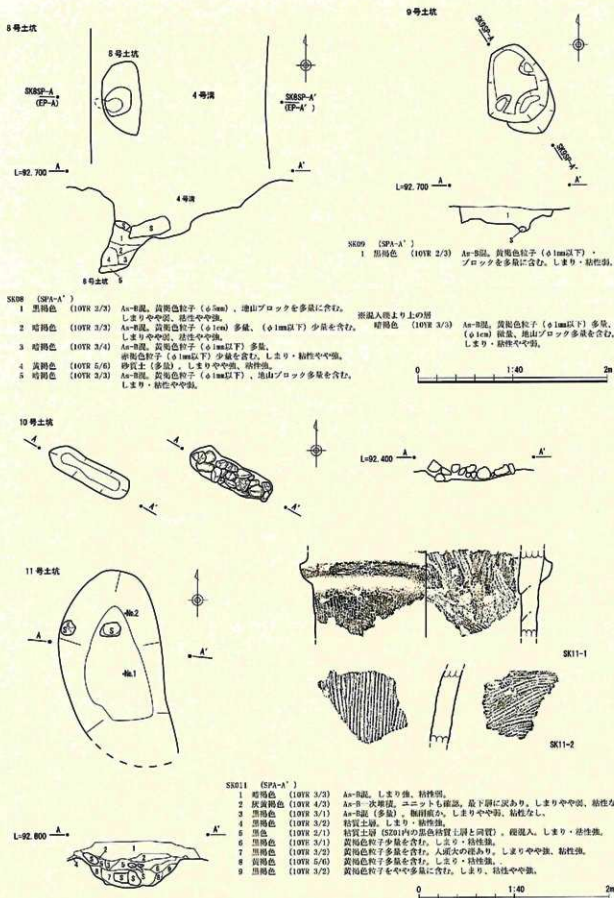
調査区の北側で検出した。平面形状は不整の楕円形で、遺構規模は長軸1.86m、短軸1.10m、遺構確認面からの深さは0.39mである。覆土上層に一部As-B軽石の一次堆積が残る。覆土上層より流れ込みと思われる円筒埴輪と土師器が出土している。遺構の帰属時期は平安時代後期以前に求められ、且つAs-B軽石の降下段階でかなり遺構の埋没が進んでいたものと考えられる。



第17図 1～7号土坑 平面図・断面図(S=1/40)



第18図 7号土坑 出土遺物(S=1/3)



第19図 8～11号土坑 平面図・断面図(S=1/40)・11号土坑出土遺物(S=1/3)

5. ビット

1号ビット (第20図)

調査区西側で検出した。すぐ南側には7号土坑が存在する。形状や規模は、遺構が調査区西側まで広がると思われるため明確なことは不明である。深さは遺構確認面から0.46mである。7号土坑と同様、暗褐色粘質土下の地山面からの掘り込みだが、覆土の主体は地山土が多く混入する暗褐色土である。遺構の帰属時期は古墳時代後期以前であると考えられる。遺構底部より高塚の脚部が1点出土した。縦に半分に分れた状態の1/2のみが出土した。内面は二段の絞りによる成形である。

2号ビット (第20図)

調査区北側で検出した。4号溝の底面で遺構確認をした。平面形状は不整の円形で、径0.14m、遺構確認面からの深さは0.15mである。出土遺物はない。覆土にAs-B軽石が混入していないことから、遺構の帰属時期は平安時代後期以前であり、As-B軽石降下段階には埋設していたと考えられる。

5号ビット (第20図)

調査区の北側で検出した。平面形状は不整の円形で、遺構規模は径0.35m、遺構確認面からの深さは0.34mである。覆土にAs-B軽石は含まない。

6号ビット (第21図)

調査区東側で検出した。周堀の底部で9号溝に近接する。平面形状は不整の円形で、遺構規模は径0.43m、遺構確認面からの深さは0.14mである。覆土にAs-B軽石を含まず、確認面が周堀底部の地山層であることを踏まえると古墳時代後期以前に属するものと考えられる。

7号ビット (第21図)

調査区北側、7号溝の壁面で検出した。平面形状は楕円形を呈しており、遺構規模は径の長軸が0.40m、短軸が0.31mである。遺構確認面からの深さは0.25~0.31mで、覆土にAs-B軽石を含む。出土遺物はないが底面から径0.20mほどの溝が2点出土している。遺構の帰属時期は平安時代後期以降と考えられる。

8号ビット (第21図)

調査区北側で検出した。付近には約1.30m北側に7号ビットがある。平面形状は円形で、遺構規模は径0.23m、遺構確認面からの深さが0.15mである。覆土にAs-B軽石を含む。遺物の出土はない。覆土から帰属時期は平安時代後期以降と考えられる。

9号ビット (第20図)

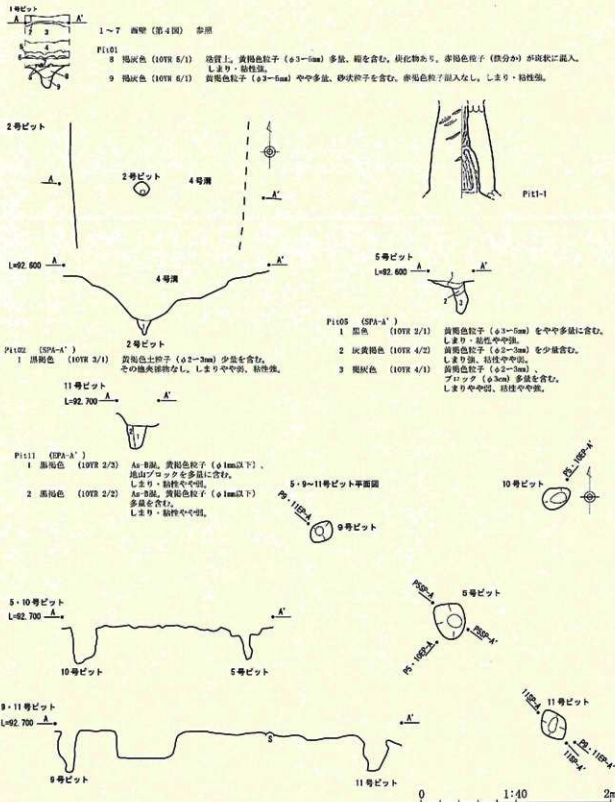
調査区北側で検出した。平面形状は不整円形で、径0.25m、遺構確認面からの深さが0.41mである。出土遺物はない。

10号ビット (第20図)

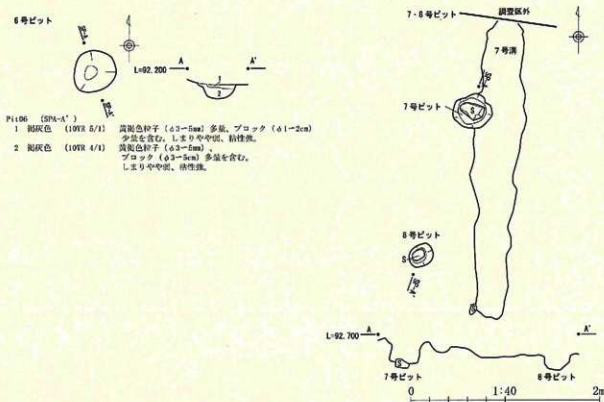
調査区北側で検出した。周辺には5、9、11号ビットがあり、また少し離れたところに7、8号ビットがある。平面形状は不整の円形で、径0.31m、遺構確認面からの深さは0.38mである。出土した遺物はない。9、11号ビットと形状が近似している。

11号ピット (第20図)

調査区北側で検出した。周辺には5、9、10号ピットがあり、また少し西側には7、8号ピットが存在する。平面形状は不整の円形で、径0.30m、遺構確認面からの深さは0.26mである。覆土にはAs-B軽石を含む。出土遺物はない。9、10号ピットと形状が近似している。遺構の帰属時期は平安時代後期以後であると考えられる。



第20図 1・2・5・9~11号ピット 平面図・断面図 (S=1/40)・1号ピット出土遺物 (S=1/3)

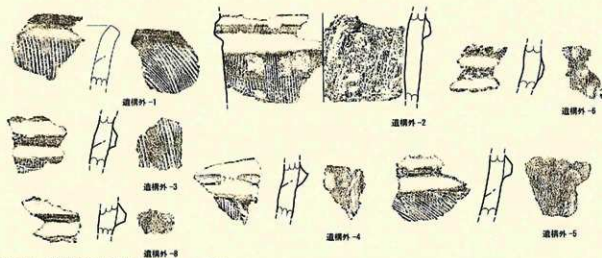


- Pl106 (SP6-A')
- 1 褐色 (10PR 5/1) 黄褐色砂子 (φ3-5mm) 多量、ブロック (φ1-2cm) 少量を含む。しまりやや泥、粘性強。
 - 2 褐色 (10PR 4/1) 黄褐色砂子 (φ3-5mm) ブロック (φ3-5cm) 多量を含む。しまりやや泥、粘性強。

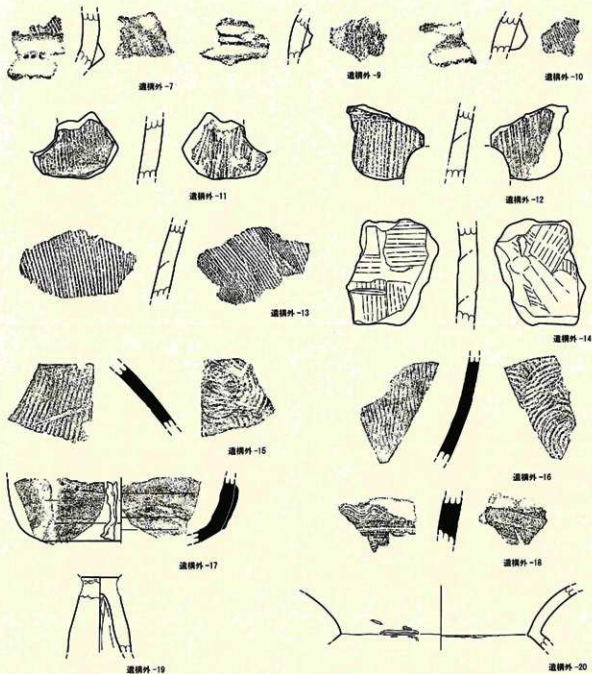
第21図 6～8号ピット平面図・断面図 (S=1/40)

6. 遺構外遺物

本遺跡では遺構外でも遺物の出土があった。そのほとんどが円筒埴輪片であり、墳丘に立て並べられた埴輪が時間の経過とともに崩落または廃棄された後、長い時間をかけて攪拌されたものが覆土中に混入しているものと考えられる。遺物は円筒埴輪12点、形象埴輪1点、須恵器4点、土師器2点が出土した。1～13は円筒埴輪である。円筒埴輪はすべて小片であるため全体を把握できるものはない。13は朝顔形埴輪である可能性が高い。14の形象埴輪は器種不明であるが、器厚や形状から家形埴輪の可能性が考えられる。15～18は須恵器、19、20は土師器である。須恵器はいずれも甕または壺の破片と思われる。17は底部片で外面に断面三角形の貼付痕が残る。18は甕の頭部で、外面に波状文を施す。土師器は甕の頭部と高坏の脚部が出土したがいずれも小片である。



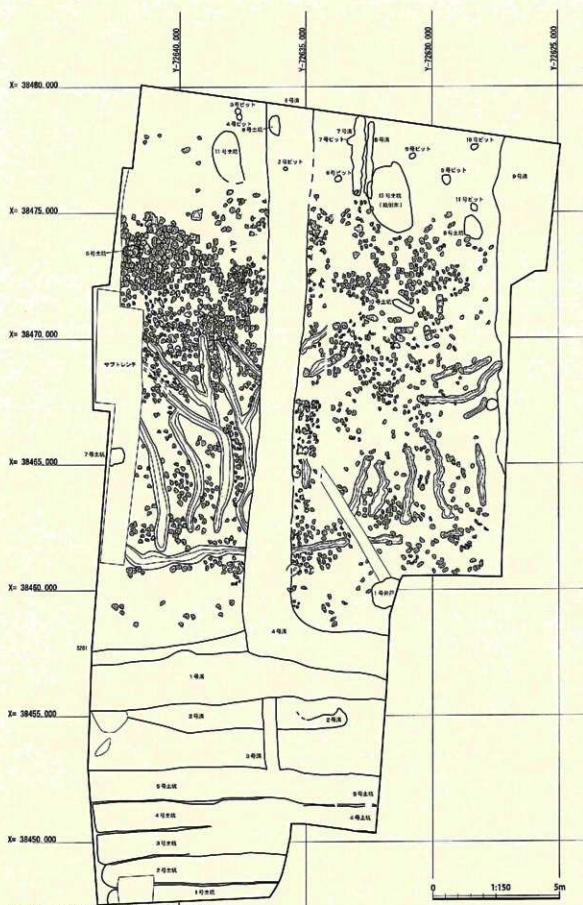
第22図 遺構外出土遺物① (S=1/3)



第23図 遺構外出土遺物② (S=1/3)

7.掘削痕 (第24図)

As・B軽石を除去した段階で径15～30mほどの不整楕円形をした掘削痕を複数確認した。掘削方向に統一性はなく、連続するものはほとんどない。掘削痕と同様に、As・B軽石を覆土とする筋状の浅い掘り込みも検出した。こちらも形状や掘削方向に統一性がないため、計画的に掘り込まれたものであるとは断言できない。いずれもAs・B軽石降下前後に掘り込まれた可能性が考えられる。また、周地南側の立ち上がり付近で確認した筋状の浅い掘り込みは東西方向に走行し、この掘り込みから南側には掘削痕は確認できなかった。この溝状の掘り込みは区画溝の役割を果たしていた可能性が考えられよう。



第24図 掘削痕 平面図 (S=1/150)

第4章 まとめ

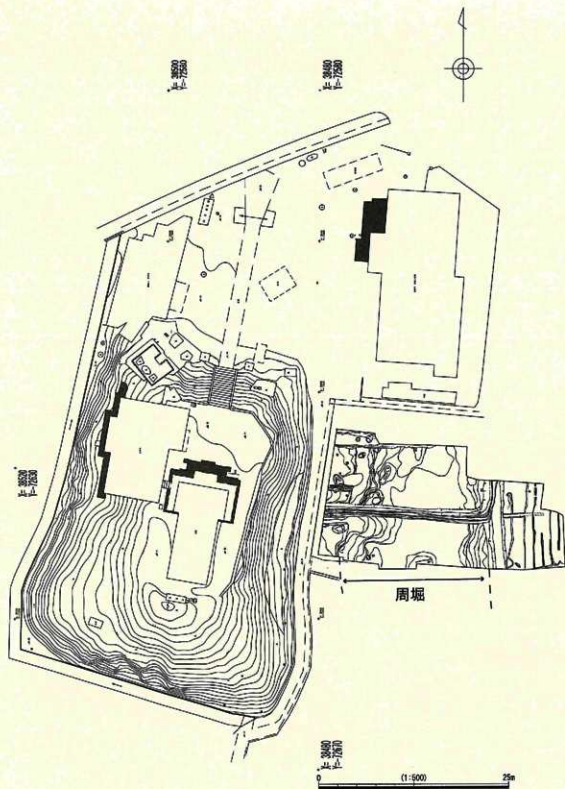
今回の調査では、五霊神社古墳の周堀が幅約15m、深さ約1mであることを確認した。浅く、立ち上がりが緩やかであり、堀底が平坦であるという特徴は、五霊神社古墳と同じ井野川の下流域に存在する綿貫観音山古墳にも見られる。墳丘側では周堀から墳丘への立ち上がりが確認でき、一部段状になっていることからこの部分が墳丘の基壇部であると考えられる。以上より本古墳は現況の全長を上回る規模の前方後円墳であったと想定される。また第3章第2節でも述べたように、調査区の北西で地山面が部分的に掘り残されスロープ状になる箇所がある。このスロープは現況で墳丘のくびれ部に相当する位置にある。あくまでも推測であるが、墳丘の内外を繋ぐ通路のような役割を持っていた可能性が示唆される。

出土遺物に関しては、その多くが円筒埴輪片であるがほとんどが破片資料であるため、全容を把握することは不可能である。円筒埴輪の突帯断面形状は台形が主体である。底部の出土は少数ではあるが、底部調整のものは見受けられない。出土埴輪の多くは結晶片岩を含んでいることが肉眼で確認でき、一部には大粒の結晶片岩を含むものも存在する。群馬県藤岡市周辺で製作された埴輪の指標となる海綿骨針は肉眼では確認できなかったが、立地や同時期の周辺の古墳における埴輪の供給等を踏まえると、本古墳の埴輪も藤岡市周辺の埴輪窯で製作された可能性が高い。また形象埴輪の中に二重円文の線刻を持つものや赤彩で弧を描くものが複数見られるが、綿貫観音山古墳でも家形埴輪と馬形埴輪に同様の特徴を持つものが存在している。綿貫観音山古墳は6世紀後半に井野川下流域、現在の高崎市綿貫町に築造された全長約100mの前方後円墳である。石室に角閃石安山岩を使用し、銅製の水瓶をはじめとした豪華な副葬品や埴輪群を持つ。また、本古墳と同じ井野川中流域に築造された浜尻天王山古墳でも二重に弧を描いた馬形埴輪の可能性のある埴輪が報告されており、井野川を通じた首長間の関係性が想定できる。さらに周堀中から出土した須恵器片を見ると大甕の頸部補強帯部分の破片、加えて手持ちヘラケズリで調整された坏蓋が出土している。大甕の補強帯は6世紀中頃、須恵器の手持ちヘラケズリによる成形は6世紀後半以降に比定されている。補強帯は断面形状から6世紀後半から末にかけての特徴を有しており、須恵器に関しても概ね6世紀後半の年代幅の中で収まるものである。他にも周堀中から出土した角閃石安山岩は石室の構築材と考えられ、この点でも綿貫観音山古墳、浜尻天王山古墳と共通し、市史に記されている年代観とも矛盾しない。出土遺物から五霊神社古墳の築造年代を比定するならば6世紀後半となろう。

今回の調査は周堀の形状や墳丘の復元には至らなかったが、一部分ではあるが周堀の規模を確認したこと、また墳丘の基壇と考えられる立ち上がりを確認したことは成果であるといえる。全容の解明については今後の調査に期待したい。

(参考文献)

- 田中広明 1993 「埴輪帯のある大甕の生産と流通」 『埼玉考古』第30号
 高崎市史編さん委員会 1999 『新編 高崎市史 資料編Ⅰ 原始古代Ⅰ』
 梅澤重昭・徳江秀夫 1998 『綿貫観音山古墳Ⅰ』
 梅澤重昭・徳江秀夫 1999 『綿貫観音山古墳Ⅱ』
 杉山香作ほか 2004 「塚田Ⅱ遺跡の調査」 『国立歴史民俗博物館研究報告』第120集
 中里正康 2008 「埴輪生産地の推定復元 ―混入物による上野地域の様相―」 『群馬考古学手帳』第18号
 藤野一之 2009 「群馬県における古墳時代須恵器編年」 『群馬・金山丘陵霊跡群Ⅱ ―管ノ沢遺跡(須恵器霊跡群・古墳群)・巖穴山古墳の発掘調査報告―』
 藤野一之 2009 「北関東型須恵器の成立と展開」 『群馬・金山丘陵霊跡群Ⅱ ―管ノ沢遺跡(須恵器霊跡群・古墳群)・巖穴山古墳の発掘調査報告―』



第25図 五霊神社古墳周堀想定図 (S=1/500)

抄 録

ふりがな	しもきとみやがやいといせき あしかりのがしやしまいせき ごらいじんじやこじん							
書名	下里見宮谷戸遺跡・足門東屋敷間遺跡・五堂神社古墳							
副書名								
巻次								
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第322集							
編著者名	黒田晃・田辺芳昭・山本ジェームズ・岡崎裕子・熊塚光生							
編集機関	高崎市教育委員会							
編集機関所在地	370-8501 群馬県高崎市高松町35番地の1							
発行年月日	2014年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
下里見宮谷戸遺跡	群馬県高崎市下里見町	10202	505	36° 21' 49"	138° 53' 6"	2011.04.13 ~ 2011.06.18	480㎡	下里見公民館建設
足門東屋敷間遺跡	群馬県高崎市足門町	10202	509	36° 23' 49"	138° 59' 33"	2011.08.18 ~ 2011.06.15	60㎡	金古南足門公民館増設
五堂神社古墳	群馬県高崎市員沢町	10202	523	36° 29' 38"	139° 11' 26"	2012.12.22 ~ 2013.03.30	450㎡	東部公民館改築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下里見宮谷戸遺跡	集落・畑地	縄文・古墳・平安	縄文時代・古墳時代・平安時代の掘穴住居跡・竈・灰治炉、A・B下の島跡を検出	縄文土器・打製石器・土師器・須恵器	集落より鉄製金床出土
足門東屋敷間遺跡	田畑	近世以降	島跡を検出	なし	なし
五堂神社古墳	古墳	古墳	6世紀後半代に築造された五堂神社古墳の周堀を検出	円筒埴輪・形象埴輪・土師器・須恵器	周堀の底より10～15cm上面からA・Bを検出

